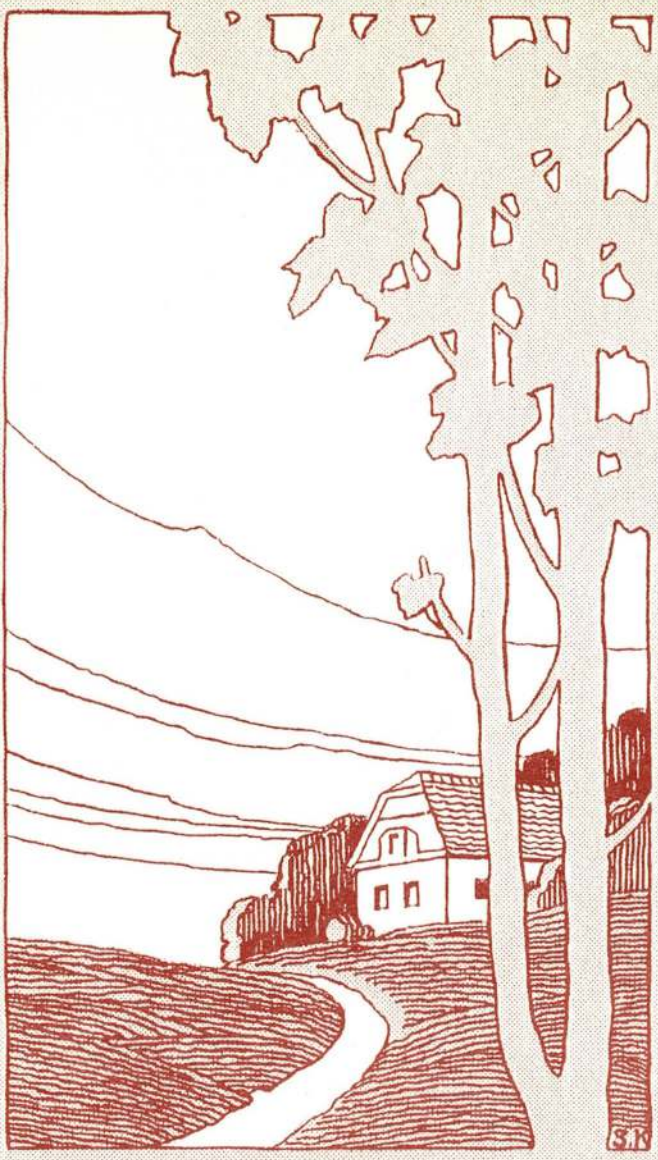
建築ト社會



第三輯
第十二號

大正九年十二月一日
日本建築協會

日本建築協會會則

第一條　本會ノ目的ハ我國建築界ノ堅實ナル發展ヲ期スルニ在リ

第二條　本會ハ日本建築協會ト稱ス

第三條　本會ノ事務所ヲ大阪市ニ置ク

地方ニ支會ヲ設クルコトヲ得

第四條　本會ハ人格、學識、經驗アル建築家ヲ以テ會員トス

會員ノ氏名住所ハ會員名簿ニ之ヲ記錄ス

會員タラムト希望スル者ハ會員五名以上ノ紹介ヲ以テ入會希望書及履歷書ヲ本會ニ提出スヘシ其諾否ハ理事會ニ於テ議決ス

第五條　本會ハ其目的ヲ贊成シ事業ヲ援助スル者ヲ賛助員トス

賛助員ヲ分チテ左ノ四種トス

一　名譽賛助員―地位又ハ學識アル名望家

二　終身賛助員―金參百圓以上又ハ之ニ相當スル物件ヲ本會ニ寄附スル篤志家

三　特別賛助員―建築ニ關聯スル特種ノ技術家又ハ事業家

四　普通賛助員―建築ニ關係又ハ興味ヲ有スル者

賛助員ノ氏名住所寄附ノ金額又ハ物件ハ各賛助員名簿ニ之ヲ記錄ス

第六條　名譽賛助員ハ例會ノ決議ニ依リ本會之ヲ推薦ス

終身賛助員タラムトスル者ハ會員貳名以上ノ紹介ヲ以テ申込ミ及寄附ノ金額又ハ物件ヲ本會ニ提出スヘシ其諾否ハ理事會之ヲ議決ス

特別賛助員タラムトスル者ハ會員二名以上ノ紹介ヲ以テ申込ミ履歷書ヲ本會ニ提出スヘシ其諾否ハ理事會之ヲ議決ス

普通賛助員タラムトスル者ハ會員ノ紹介ヲ以テ申込ミ本會ニ提出スヘシ其諾否ハ理事會之ヲ議決ス

第七條　會員ハ會内ニ於テハ第十九條ニ關スル權利ヲ享有ス

會員ハ會内ニ於テハ其責任ニ付會外ニ於テ責ニ任ゼザルコトヲ得

名譽賛助員ハ本會ノ優遇及第十九條ニ基キ相當ノ利得ヲ受ク

終身賛助員、特別賛助員及普通賛助員ハ第十九條ニ基キ會誌ノ配布其他各相當ノ利得ヲ受ク

第八條　會員ニシテ脫會セムトスル者ハ其旨ヲ本會ニ申込ムヘシ

前項ノ規定ハ賛助員ニ之ヲ準用ス

第九條　本會ハ會員ニシテ本則ノ規定ニ違背シ又ハ本會ノ名譽ヲ汚スノ行爲アリト認メラルル者ニ對シ理事會ノ決議ヲ經テ其權利ヲ停止シ若ハ之ニ脫會ヲ勸告シ又ハ例會ノ決議ヲ經テ之ヲ除名スルコトヲ得

前項ノ規定ハ賛助員ニ之ヲ準用ス

第十條　脫會其他ノ事由ニ因リ會員タルノ資格ヲ失ヒタル者ハ既納會費ノ返還ヲ求ノ又ハ其債務ヲ免カルルコトヲ得ズ

前項ノ規定ハ賛助員ニ之ヲ準用ス

第十一條　本會ニ左ノ役員ヲ置ク

一　會　頭　一　名

二　副會頭　一　名

三　理事長　一　名

四　理　事　六　名

會頭ハ會務ヲ總監シ本會ヲ代表ス

副會頭ハ會頭ヲ補佐シ會頭事故アルトキ其職務ヲ代理ス

理事長ハ會務ヲ總理シ會頭、副會頭事故アルトキ其職務ヲ代理シ理事會ヲ代表ス

理事ハ會務ヲ處理シ理事長事故アルトキ理事會ノ決議ニ依リ其職務ヲ代理ス

第十二條　役員ハ會員中ヨリ例會ニ於テ之ヲ選擧ス但會頭、副會頭ハ名譽賛助員中ヨリ之ヲ選出スルコトヲ得

役員ノ任期ハ貳ケ年トス

理事ノ改選ハ毎年半數トス但引續キ重任スルコトヲ得ズ

第十三條　本會ニ左ノ職員ヲ置ク

一　主　記　一　名

二　主　計　一　名

三　編　輯　三　名

四　編輯補　若干名

五　書　記　若干名

主記ハ庶務ヲ、主計ハ會計ヲ、編輯ハ編纂ヲ處理ス

編輯補ハ編輯ノ旨ヲ受ケ編纂ヲ分掌ス

書記ハ理事長、理事ノ命ヲ受ケ會務ニ從事ス

第十四條　主記、主計、編輯ハ理事之ヲ互選ス

編輯補ハ會員中ヨリ理事會之ヲ指名ス

書記ハ理事會之ヲ任命シ有給トスルコトヲ得

第十五條　本會ハ調査研究ノ必要ニ應ジ例會ノ決議ニ依リ各部ノ委員會ヲ設ケ各部ニ委員長一名委員若干名ヲ置ク

委員長及委員ハ會員中ヨリ理事會之ヲ指名シ委員長ハ當該委員ノ互選トス

理事會ハ特殊事項ニ關シ會員以外ノ專門家ヲ臨託委員トスルコトヲ得

第十六條　委員長ハ當該委員會ヲ代表シ委員長事故アルトキハ當該委員會ノ決議ニ依リ委員其職務ヲ代理ス

委員會ノ經過ハ例會ニ於テ之ヲ報告ス

委員會ノ調査研究報告ハ例會ノ決議ヲ經テ本會ノ名ヲ以テ之ヲ發表ス但シ緊急事項ニ付テハ理事會ノ承認ヲ經テ當該委員會ノ名ヲ以テスルコトヲ得

第十七條　本會ハ毎月一回會員ヲ召集シ例會ヲ開キ重要事項ヲ審議シ報告、講話會、討論會又ハ講演會ヲ催スヘシ但理事會ハ必要ト認ムルトキ臨時之ヲ開催スルコトヲ得

例會ニ於ケル議案其他ノ事項ハ理事會之ヲ會員ニ豫告ス但緊急事項ニ付テハ此限ニ在ラス

第十八條　本會ノ一行事ハ春秋二季大會ヲ擧行ス

第十九條　建築ニ關スル諸般事項ノ調査研究

調査研究報告ノ發表

建築ニ關スル重要事項ノ議決

決議事項ノ實行促進

會誌ノ發刊

建築ニ關スル圖書ノ刊行

建築ニ關スル講演會ノ開催

建築ニ關スル展覽會ノ公開

建築ニ關スル有志者ノ親睦會

理想的建築ノ計畫

其他建築ニ關スル有益ナル事項

第二十條　會員ハ會費年額金拾八圓ヲ本會ニ提出ス

但例會ニ出席シ難キ地方ニ在ル會員ノ會費ハ半額トス

一時ニ金百圓以上ヲ出シタル者ハ爾後前項ノ會費ヲ免ス

會員タルノ承認ヲ得タル者ハ入會金五圓ヲ本會ニ納付スヘシ

特別賛助員ハ特別賛助員年額金九圓ヲ、普通賛助員ハ普通賛助員年額金六圓ヲ本會ニ前納スヘシ

但六期以内ニ之ヲ分納スルコトヲ得

第二十一條　本會ノ經費ハ會員入會金寄附金賛助費其他ノ收入ヲ以テ支辨ス

本會ノ財產ハ理事長之ヲ監理ス

第二十二條　本會ノ財產價權價務及毎月ノ收支ハ主計其計算書ヲ作リ翌月例會ニ於テ報告ス

第二十三條　本會及本則ニ關スル詳細ノ事項ハ例會ノ決議ニ依リ細則ニ之ヲ定ム

第二十四條　本則ハ例會ノ決議ニ依リ之ヲ變更スルコトヲ得

コルクタイル

最新の機械と製法を發明せる我社は品質優
良と價格低廉なる点に於て他社の追従を許さず

床敷用

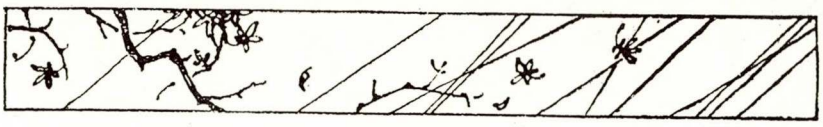
■コルク、タイル　■リノ、タイル　■下敷用コルク板
■コルク疊床　■絶縁用コルク　■其他一般

半額で提供す

他社製品と同等品ならば

製造所　大阪府東成郡城東村鴫野
コルク工業合資會社
電話鮫江三四

一手販賣所　大阪市南區心齋橋筋二丁目
株式會社高島屋呉服店裝飾部
電話南三八二三　裝飾部專用
自南三一　至南三五



『建築と社會』第參輯第拾貳號目次

口繪

△英國ボルトン都市計畫に於ける廣路を隔てたる博物館の全景（三色版）
△同　古刹の秋光（寫眞版の一）
△法隆寺平面圖（寫眞版の二）
（寫眞版の三）

〔卷頭〕
△近代の都市計畫 …… 二
〔論說〕
△市街地建築物法の實施期と建築界 …… 建築監督官工學士 竹内六藏 …… 七
△建築監督官としての任務 …… 警視廳消防本部長 緒方惟一郎 …… 一一
△消防方面より見たる我國の家屋 …… 帝國通信社 楠原祖一郎 …… 一五
△都市と文化 …… 貴族院議員 仲小路康 …… 二〇
△本誌の題號を見て更に建築家諸氏の重大なる責務を思ふ …… 日本建築協會終身贊助員 山本辰五郎 …… 二三
△度量衡の統一に就て …… 日本建築協會終身贊助員 有山福重郎 …… 二八
△使はるゝ人と使ふ人（上）
〔住宅〕
△居構百選（其十二） …… 會員 葛野建築事務所主 工學士 葛野壯一郎 …… 三七
〔庭園〕
△日本庭園考（九） …… 會員・農學士 大屋靈城 …… 三九



〔都　市〕
△將來の市加古市(7)……ウオルター・ディ・ムウデイ著……Z Y 生譯……四三
〔談　叢〕
△歐米視察談……會員・工學士・藤井厚二……五二
△外國人の見た大阪……今西京子……六〇
〔資　料〕
△大阪市都市計畫參考資料(其九)
〔漫　錄〕
△太西洋を見る日まで(三)……會員・工學士・波江悌夫……六四
△古刹に古都に秋郊の一日……江村郊邨……七一
═日本建築協會第三回秋季大會の記═
〔藻　苑〕
△漫　畫……八一
△小　品……△和　歌……△俳　句……口俳　文
▲時　報……八八
▲會　報……九三
附　錄
△市街地建築物法施行規則……一七頁

大阪煖房商會
大阪電氣商會

營業課目

暖房。通風。衛生。乾燥。電氣暖房
負請計設事工
賣販作製トフリ及機降昇

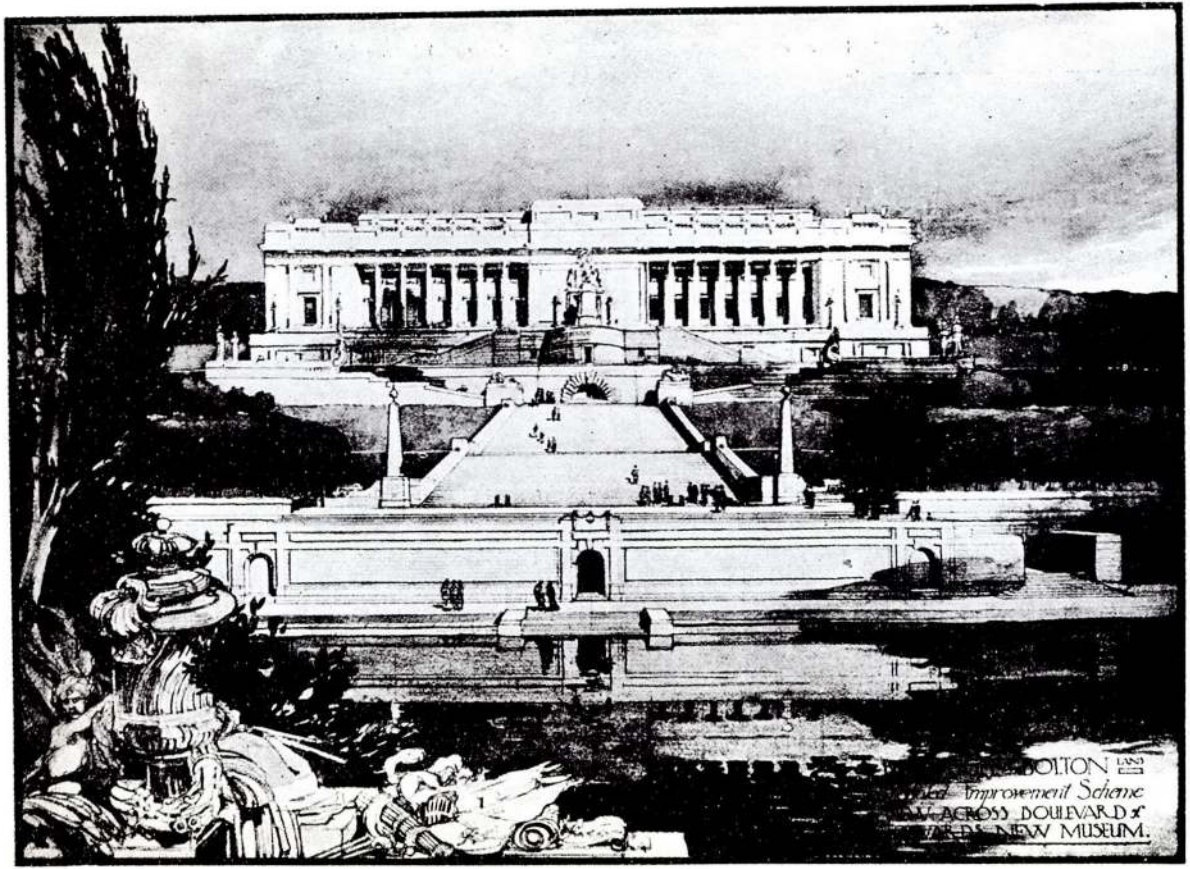
賣販料材械機諸氣電
負請督監及計設事工氣電
賣販托委品所作製燈電阪大

工事代理
社會式株燈電阪大
社會式株氣電川治宇
社會式株氣電本日
社會式株氣電屋古名

本店
大阪市西區江戸堀
南通一丁目三七
電話 長堀四五四一 佐土四六四

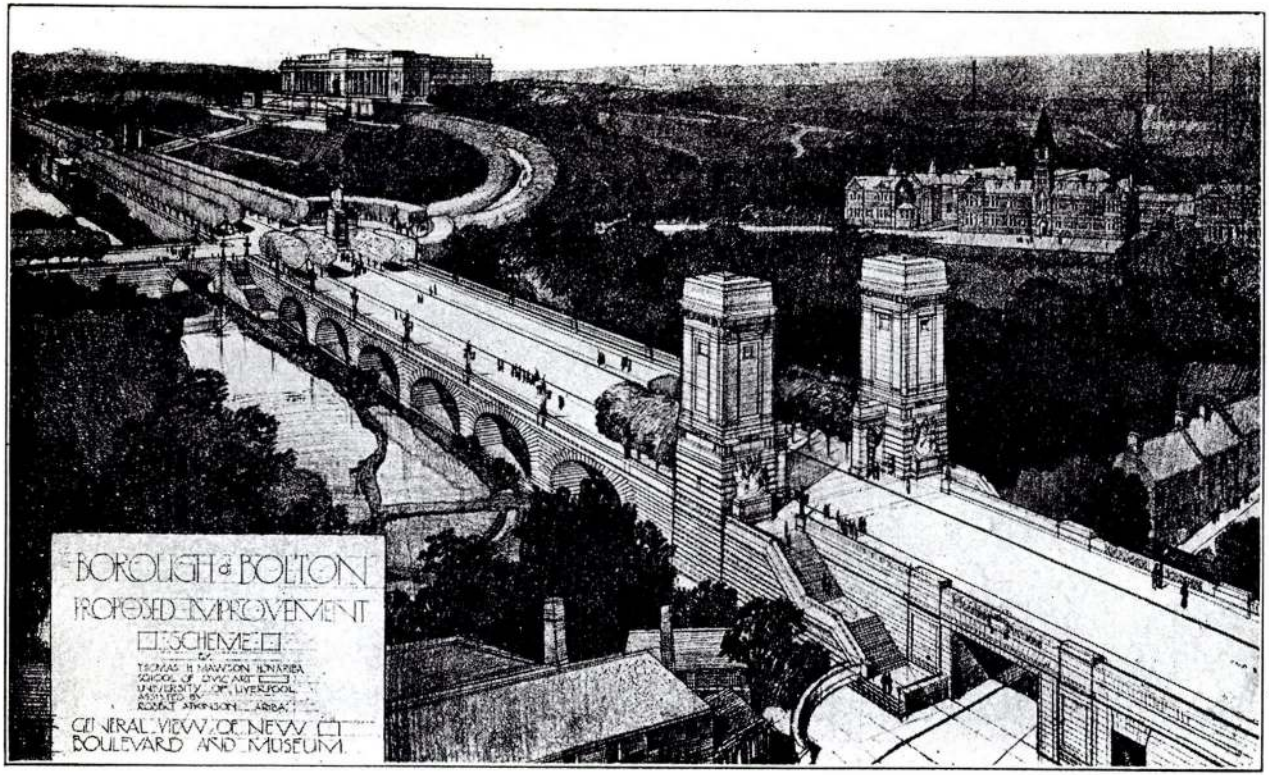
出張所
東京市京橋區西紺屋町五
電話京橋長二三〇六
名古屋市東區東本重町二丁目
電話長二三六二





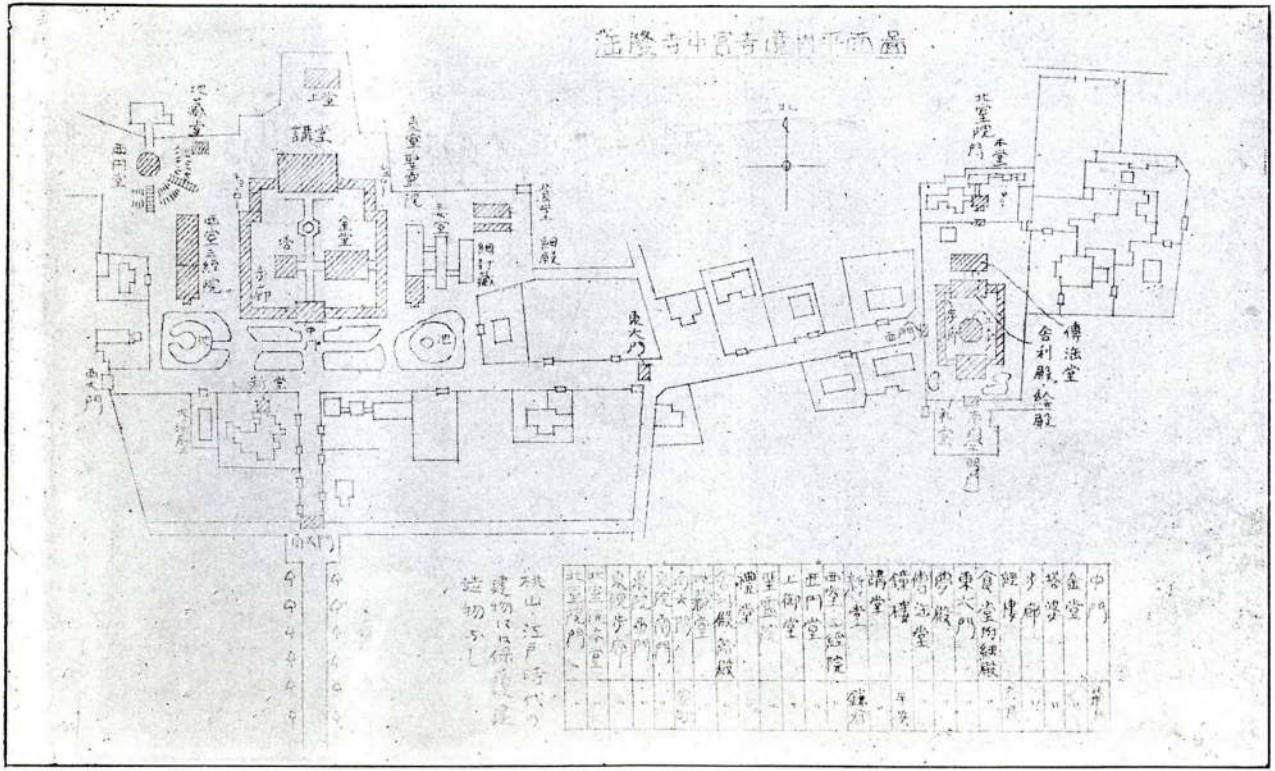
英國ボルトン都市計畫に於ける廣路を隔てたる博物館の前景

英國ボルトン都市計畫に於ける廣路と博物館の全景



氏ンソンキツア・トーパロ及氏ンソカマチツエ・スマート

法隆寺大置布観


法隆寺中宮寺伽藍配置図
北室院門
本堂
傳法堂
舎利殿・鐘殿
東大門
細殿
講堂
金堂
塔婆
食堂
経蔵
鐘楼
聖霊院
上御堂
伝法堂
講堂
東大門
食堂
細殿
金堂
塔婆
中門
桃山・江戸時代の建物には保護建造物なし

古刹の秋光



法隆寺金堂及五重塔前に於ける日本建築協會員の一行

會告

左記會員轉居先不詳ニツキ御承知ノ方ハ御通知願上候

氏名	舊住所
田中隆次	神戸市平野馬場町二三八
原田俊之助	大阪市北區東野田町　京阪電鐵會社内
若山眞一	神戸市大同町二丁目一〇〇
高松壽	名古市役所土木課
松本末太郎	神戸市宮本通五丁目一二ノ三
安西伊之助	大阪府東成郡古市村字森小路七〇〇
三宅重二郎	大阪市外鷺洲町浦江八返田
森勝義	大阪市東區清水谷町西之町三五四　長嶋方
菅原文太郎	北海達函館區相生町三二
鈴木吉兵衛	東京市淺草區北富阪町二〇

事務所設備費其他の寄附收納

（第四回）

當協會新事務所設置に就て其設備費寄附續々御申込相受け候處其內既に御拂込被下候分左に揭載して篤く謝意相表し候と共に更めて領收の証と致候

大正九年十二月一日

（自大正九年十月二十八日
至大正九年十二月一日正午）

日本建築協會主計

桑名兼太郎殿	二、〇〇	渡邊節殿	三〇、〇〇
松本禹象殿	二〇、〇〇	長谷川五一殿	一〇、〇〇
木子七郎殿	五〇、〇〇	西田儀太郎殿	五、〇〇
熊澤榮太郎殿	五、〇〇	矢田部喜平殿	一〇、〇〇
糸永文古殿	二〇、〇〇		
計	一五二、〇〇		

累計　貳千五百八拾參圓

外に壹千圓（無條件寄附）及電話使用權一箇



近代の都市計畫

都市を設計するに、之を組織的に美飾せしめたのは獨逸であつて、獨逸からして此の美觀策が諸外國に傳播した。獨逸都市が、古來美的であつたことゝ、又自治政が整頓して居つたことが相關聯して、獨逸の都市改善を促進して來たので、それは洵に自然の理數である英國及米國では、夙く商工業の革命が起つた。それは歷史が證明してゐるが、獨逸は露佛戰爭前までは、單純な農業國であつて、商工業の革命は、甚だ後れて侵入して來た。千八百七十年に、農業從業者は、總人口の六割八分であつたが、千九百七年に漸く二割八分に減退した。商工業が勃興して、其要求に順應する爲に、農村民が忽ち都會に蝟集して來て、製造工場を設けるなど、漸く舊市街の美觀を脅かして來た。此の機會に乘じて、土地の投機者達は、郊外に夥多の貸家屋を建てゝ、市民を誘致したので、市民は一齊に蝟集した。其結果、住宅狀態が甚だ不良になつたと共に、一面舊市街の人口も極端に稠密になつて、建築狀態は甚だしく危險に陷つて來た。斯く製造工場が發達して來るが、新街路の開通とか、給水とか、鐵路の敷設とか、種々の設備が緊要となつて就中商工業の最も急激に發造した所のライン河地方の都市では、其の設備が一層急速に必要となつて來たのである。―都市問題の研究―



〔論　說〕

市街地建築物法の實施期と建築界

○

財界の波瀾萬丈を以て終始したる大正九年は將に本月を以て其幕を下さんとするに方り、首を廻らして我建築界を顧みれば、見逃すべからざる幾多の事項がある。聊か所感の一端を開陳して斯界識者の一考を煩はす事必ずしも徒事でないと信ずる。

歐洲大混亂の勃發以來、隔絶僻遠の日東帝國も手を空ふして對岸の火災を見物するの暇なく、遂に世界大戰亂の滿中に卷き込まれ、我國民は圖らず何等の豫期と準備なくして、此世界的大波瀾の影響を蒙り我國社會は雨具なくして驟雨に遇ひたらん如く、泰平の夢を破られ、現代社會のあらゆる機關は强風に襲はれたる風車の如くに回轉し運轉して殆んど止まるべき術すらなく、或は故障を起し、或は損所を發見し、或は宇頂天となり或は狂態を百出して、此千載一遇の變轉期を經過した。

想ふに、政府も國民も謂はば無我無中に當面の事務に追はれ、沈思熟慮の閑日月なく、深慮遠謀の大抱負なく、不準備不整頓を承知の上にて世界の大勢に順應進退したのである。此間諸物價は暴騰に次ぐに暴騰を以てし、生活難の叫聲は黄金の波浪と共に到來し、デモクラシーの運動は勞働問題の發生と終始してゐる。歐洲の大戰は同盟軍の挫折によつて局を結び、數年に亘りし悲風慘雨も平和の福音に治まつたと雖も、我國財界の好景氣は惰性を持續して本年の初頭を迎へたのであつた。

果然識者の憂慮して止まなかつた大恐慌は新春早く殺到し、財界は忽ち混亂期に入り、金融の逼迫は事業界の頓挫となり、奔騰止まなかりし諸物價は漸次低下の傾向となり、不景氣の襲來は遼原の火も啻ならず、國民の醉態も醒め來れば亦昔日の觀なからんとする有樣である。想ふに天下の秋は正に靜觀の時を與へ、國民をして成敗利鈍の跡を鑑みて、以て今後の運命を打算開拓せしめんとするの神意に外ならざるべし。世態の變轉は塞翁の馬の妙味を示して自警發奮せしむるの天啓ではあるまいか。

○

一波萬波を率ゐるの間、我建築界も御多分に漏れず、不準備、不用意の儘、至難多忙の數歲を送り何等の成算なく、何等の連絡なく、何等の自覺なくして此一大時機に突入し、數多の苦き經驗を與へられて尊き幾多の敎訓を頂戴嚥下したと申すべきである。

乍併、多事多忙の數歲、顧みれば、我建築界は決して手を空しく終始して居らぬ、斯界識者の指導其宜しきを得て、都市計畫の高唱、住宅問題の絶叫、建築法規の研究、相繼いで起り、混亂紛雜の現代社會に一の青涼劑を提供しつゝ、我建築界の向上發展に傾注せる大努力は決して輕々に看過すべからざる

事績といはねばならぬ。

況んや我建築界の勇奮努力は果然世上識者の認むる所となり、やがて天下の輿論として正しきを制し政府當路者亦動き我國未曾有なる都市計畫及市街地建築物法の二大法案は第四十一議會を通過したのである。眞に奇蹟乎否乎、是れ必ずや天は自ら助くるものを助くるものにして、我建築界の前途に一大光明を招致せるのみならず、我國民の將來に一大幸福を誘導せしものと斷言して差支へはない。

今や好機到來、政府は鋭意其成果を收むるの道を講じ、都市計畫法の施行地域を決定し、進んで他の重要都市に及ばしめんとし、都市計畫委員會の成立を指導し、都市計畫案の研究を求め、更らに本年初秋に入りて主務省は市街地建築物法施行令を公布し、仲秋次いで同施行規則を發布し、本年十二月一日より之を實施せんとするに到つたのである。

今や六大都市は初めて建築監督官の任命を視、且夫々施行細則の決定實現に垂んとなる、豈に慶賀祝福すべき事績ではあるまいか。顧れば本協會は大正六歳の早春に呱々の聲を擧げ、双翼未だ成らず、日尚淺きに係らず、微力を盡して奮闘し、尚且つ斯界の爲めに應分の努力を敢行し、此好運を贏ち得たるは欣快措く處を知らざると同時に、將來に於て益々重大多難なる任務を自覺させるを得ぬ次第である。

○

去りながら、外に向つて滿腔の赤心を吐漏し、絶大の努力を繼續して、社會奉仕の大任務を敢行しつゝあつたと自賛するものゝ、省みて我建築界の内容は果して堅確充實してゐるものと自恃して差支ないであろうか、外に向つて餘力を殘さゞるの發奮活躍の間、燈臺の下暗膽たる陰影はなかりしや否や、財

界の波瀾萬丈の世運に突入せる貴重なる最近數年の實蹟に徴すれば、破甲弊冑。痩馬銹鎗の類、頗る多きを見逃す事は出來ないのである。

建築諸材料の價格は奔騰につぐに狂躍を以てし、勞働賃金の高率相次いで到り、各建築業者の苦痛創傷は到底他の諸工業と比すべからざる境涯に陷つて居た、しかも一度混亂せる斯界の峻惡なる雲行は年を追ふて甚しく、建築工事豫算の如きは殆んど常規を逸して捕捉すべからざる變態を呈し成算全く無くして、當面の難局に隨時對應せざるべからざる有樣であつた。

此の一大危機に臨んでは、平素何等の連絡なく、何等の準備なく、何等の研究なかりし缺陷は明かに曝露せられ、材料の暴騰には手を束ねて涙を呑み、勞銀の奔躍には耳を掩ふて鈴を盜まんとするの狂態を演じ、只管雷鳴を怖れて桑原を唱ふの外なかつたと申すべき悲慘只笑止千萬なる苦い且つ高價なる經驗を把握したのは事實慘めなものであつた。

諺に曰く『失敗は成功の基』と又『困厄は成功の母』と。想ふに此數年間に往來せる辛辣なる經驗の林は、如何に無感覺な者と雖も永久に忘るべからざる苦痛の森であつた。『羹に凝りて膾を吹く』の譬へもあれど、斯かる絶大なる實驗を經來りて、徒らに死兒の齡を數ふるの愚を學ぶべからざると同時に、進んでは成敗利鈍の跡に鑑みて、將來を開拓改善に導くのは、斯界の勇者が當然の大任務である。

曩に材料寸法の調査は先覺者の唱導する所と成り、同業者の會合、組合の組織は自覺者の運動する所と成り、今や建築諸材料寸法調査會は聯合的研究の歩を進め、五日會、十日會、亦七日會の成立は同業者間の共同なる問題の考慮と成り、一葉落ちて天下の秋は漸く高からんとするの機運は來た樣である。

從來幾度か繰り返されたる石工同盟休業も、回を追ふて文明的と成り、平和會と同盟會の折衝も理論的解決に落着となつた。又大工同業組合の新たに組織せられ、其規約綱領の發表せられたる、家具裝飾會社の發生成立せる等は、寔に斯界のため祝福慶賀すべき現象といはねばならぬ。

溝渠一度成らば水洋々として到るのは當然である、今や建築業界は苦き困厄の森林を過ぎて曉日駘蕩の春を迎へんとするの驚轉を開くの時期となつて居るのである。吾人は更らに結氷自ら解け、梅信相次いで到るのを期待して止まないと同時に、自啓自覺、大局の打算に基き、舊來の因習を脫却して將來の活舞臺に活躍すべき斯界の改善充實を要望して止まないのである。（をはり）

木塊化石煉瓦の發明

半生の勞苦に夫程でも無い年配を半ば禿た頭顱を氣にも留めず道路用木塊化石煉瓦を完成したのは島本佐一氏である、氏が、東京市の道路改良を志し其の天才的頭腦を傾け初めたのは今から二年前の事であつた、爾來道路の事と言へば人工と言はず天然と言はず所有る研鑽を積み苦心慘澹を重ねた事は言ふまでもない、其の結果、從來の道路其のものに追隨する苦心や研究に何等の價値なき事を知つた氏は今日迄研究して來た總てを擲つて去る九月から人工的道路の研究を根本から立て替ふべく市内の道路を巨細に調査する事とした、さう思ひ立つてから十數日を經てからの事である、愈々しく夜雨の降り連つた翌日の朝、好く晴れ渡つた初秋の光りに輝いた日本橋三越附近の十字街頭を歩いてゐた島木氏は、突如或る物を認めたやうに立ち止つて路面を見詰めた、其處には前夜の雨に綺麗に洗ひ流された數坪の木路面に四方から蹴上げ踏み付けられた小砂利が何時踏ん込まれるともなくメリ込んで宛ら混凝土面の如きものがあつた、島木氏は發明の端緒を得たもの、如く又期する所あるもの、如く數箇の木煉瓦と小砂利を一升程求めて自分の研究室に歸り默々として壓力四十貫のベレスの前に立つたそしてベレスの下に木煉瓦の一箇を置き其上に小砂利を山と積み渾身の力を双の腕に單めてカンとばかり把手を廻轉した、急いで引出した木煉瓦を右視左視して居た氏の顔には聽て會心の笑が浮かんだ、作り出された物は木塊化石煉瓦である。

建築監督官としての任務

建築監督官工學士　竹内六藏

1

市街地建築法も愈々近く施行せらるゝ事となつたが、私の勤務する警視廳に於ても、特に保安部に附屬したる建築課いふのを新設して右法の施行に備ふ可く内定し、目下は頻りに右準備をしつゝある。此建築課は、市街地建築法の施行と、都市計畫内に於ける其施行地以外の建築物の取締等も併せて掌るので、即ち建築法の施行事務と、東京府全般に於ける建築物の取調をやることになるのである。

此地域内に於ける家屋數は市部約三十五萬棟、郡部は約二十萬棟で約五十五萬棟もあるのだが、此家屋の改善と、その上に將來新築せらるゝ家屋に對する取締の事務は、甚だ多量であることは明らかで、それには大なる機關を要するのだが、目下任命されたのは僅に監督官二名に同補が七名の九名に過ぎない。こんな小人數では素より何事も出來ないので、私は以外に技師技手書記など約卅名を必要とする旨を申達し、右費用を府費支辨として出して貰ふやうに、年末の府會には追加豫算として請求する筈である。

從來警視廳に於ては、劇場浴場工場旅館病院等の特種用途に供するもの及長屋建の如きものゝみを取締る許りで、其他の一般民家に對しては全然何んの干渉も無かつたのである。今回の建築法に依つて、始めて一般的に取締る事になるのであるが、從つて本法の當初に於ては、定めし其趣旨を撤底せしむるに骨の折れることであらふと思ふ。

2

都市改善の方面から行くと東京も御多分に洩れ

ず建築物は多く木造建の粗末なものだから、保存期限も短かく、取壊しにも割合容易であるので、其結果として、之が石造煉瓦造などゝ異つて、改善にもまた比較的容易いであらふと思はれるのは實に何が幸になるかも解らぬものである。

勿論、建築法は、主として將來建築するものに適用するのであるから、其改善と云ふものは積極的では無く消極的に、どちらかと云へば、悪るい建物はそれを改築するを待つより外に方法はないのである。然し乍ら前にも申した通り、木造建が多く、從つて保存期限短かく其他色々の天災地變などよりの事情によつて、割合に改善の機會を多く與へられるから、今後二十年位も經つたなら、東京などは或は建築法の理想とする都市狀態を見る事が出來るではあるまいかと思つてゐる。

建築物の取締は都市以外の處は割合に放任して置ても宜しいのである。と云ふのは、都市を離れた處の住宅抔は、自然的に衞生的で、風通しもよく周圍に相當の空地もあり、從つて日光も充分に入るので、建物に關して相隣者間の利害關係は殆んど無く、その事情からして推しても、これと正反對の狀態にある都市に在つては、その取調の重要にして急を要する事は今更云ふ迄もない事なのである。

目下の東京は、殆んど問題にならぬ程の缺點だらけであるが、一体が東京といふ處は、大阪や神戸やなどゝ異ひ、一方に商工業都市なると共に一方片時も忘れならぬことは帝都であるといふ特種の意味である。即ち商工業都市として充分ならねばならぬ上に、帝都として更に防備の方面をも建築法の結果としてより以上に向上せしめて行かねばならぬのである。

一旦緩急ある時の、火災や飛行機抔に對する準備は勿論平時に於ても火災などにより、諸官署其他の重要建物を類燒せしめるのは甚だ困るもので東京が斯る事で脅されることは、日本國中に重大なる影響を及ぼすから、建築法の取締も、多少此意味に於て、他の都市とは趣を異にせねばならぬ事情であると思つてゐる。即ち、東京は他の都市と異り、單に經濟的見地や意味許りの監督では不

撤底ないのである。

3

云ふ迄も無く建築法を根底とする監督の目的は要するに都市をして衛生的に安全に、且つ相隣者間の調節しつゝ、都市の安全なる發達發展を圖るにあるので、殊に相隣者間の利害問題は、都市が繁榮なれば繁榮なるそれだけ激しくなり、隣家が工場で喧ましくて困るとか、あの高い塀の爲めに日が當らぬとか色々の問題が起きて來る。これを巧みに調子を取つて行く事もまた困難な仕事の一つであらふ。

建築監督官抑々の使命は、都市の家屋を造る人をして、家屋を使用する人の爲めに、衛生的にして安全なる家屋を給供せしむることであつて、實に都市人の九十パーセント迄は家屋を使用する人の側であつて、即ち借家人である。借家に於ける借家人は、勿論工場會社商店に於ける被使用者たる職工、社員、店員其他で、資本を出して家屋を供給する人とその家屋を使用する人とは自から別箇の立場にある故に、家屋を建てる資本家は、遂い費用の關係杯もあり、不用意に使用者の衛生とか安全とかを忘れ勝ちなものであるから、冷靜なる第三者が、此資本家を絶えず善導する必要があるので、これを爲すにあらざれば、都市に於ける不安全不衞生家屋を次第に增加して來るやうな事になるのである。

故に家主をして、都市居住者に善良なる家屋を供給せしむるといふ事は、即ち、建築監督官の重大なる使命の一つなのである。

4

都市としての東京が、大阪等に比して、殊に目立つて悪い事は、日本橋京橋等の、目抜きの繁華な處に三四尺位の極端なる横露路の甚だ多い事で三四尺の眞中に溝板などがあり、訪問者はこれを踏み鳴らしてやつて來る、其両側には、家と家が抱合ふやうに並んでゐるのである。

此等は土地利用の上から云つても、衞生上から見ても乃至は又火災時の消防困難から見ても、寔

に面白からぬ事は論ずる迄も無いのだが、今度の建築法に依ると、御存じの如く九尺以下の道路に沿ふては、家屋を建てる事が出來なくなつたから先づ避頭第一東京は、露路裏長屋の改善が出來て甚だ面目を改め得るのは眞に喜ばしい事であると思つてゐる。

——談。文責在記者——

國寶たる法隆寺金堂は推古天皇の十五年であるが既に千二三百年を經過し既往三十餘回の激しい地震に逢ふたに關らず今尙ほ立派に殘つてゐるのである。推古天皇の七年四月廿七日に地震があつて、日本書記には當時の事を『七年夏四月乙未朔辛酉地動舍屋悉破則令四方俾祭地震神』と書てあるから、餘程大地震であつたらしい。それで丁度法隆寺の出來たのは其後五六年だから、聖德太子が伽藍構造の上に一番この地震に注意を拂はれたものであるらしい。安政の大地震の時は奈良市中下町郡山などは震害甚しく法隆寺の石燈籠は總て轉倒し築地廻り屋外所々破却し諸寺院塀廻り破損したけれどもあの伽藍には別條無かつたのである。正平十六年六月廿二日の阿波淡速地震の時には法隆寺金堂東間の佛壇轉倒し塔婆の水炎が損じた。大和史料によると『當寺には御塔九輪之上火炎折點に下へは落ちず金堂東間の佛壇下へ頽れ落つ。更に七月十一日大地震在之、當時御塔立法星本より折て落畢、其後爲寺門之沙汰、或は寺僧鄕民勸進、或は年貢供料借要、廻種々之祕計同年十二月晦日造功如元成了』とある。古來地震の爲め塔婆の九輪水煙等に些少の損害はあつたやうだが金堂は格別大破損等を受けた事が無い樣子である。

消防方面より見たる我國の家屋

警視廳消防本部長　緒方惟一郎

—《一》—

何れの國、何れの民族に於ても、原始時代の住屋の如きは、單に雨露を凌ぎ、又は猛獸の襲撃に備へる爲めに、多くは禽獸の巢の模樣などを手本として造られたものらしく思はれる。しかし、追々智識が發達し慾望が增すに從つて、いろ〳〵な材料などを撰擇し、一方に於ては便利を圖り、同時に自分の財產又は榮譽を誇る爲めに、裝飾を施し、それに美術の觀念も加味し。尙ほ後年に迄も自分の榮譽を誇らんとする建築物等を造るに到つたものであらふ。

併し、其發達の系統及び變遷は、種々の勢力に基くもので、地理上の勢力——例へば地勢の高低山川の分布等に依り、又は地質上の勢力——岩石の豊富、又は森林の有無等により、又は氣候風土の勢力——としては熱帶溫帶寒帶に於て、夫々建築法に特長を有してゐる。其他宗教上の勢力も大いに關係があつて、例へば其民族に於ける信仰の本體、即ち神佛又は耶蘇等によつて、各々其本尊を安置する建築物の構造が、一般人屋の構造に感化影響を及ぼす事が尠くないのである。

歐洲の建築がエジプト、ギリシヤ、ローマの系統を受けて、石造を原則とせる建築法であつて、アジア、殊に支那日本の如きは、本造建築を原則とする系統と見て差支無からふと思ふ。

—《二》—

殊に日本の如きは太古森林に富み、木材に豊富だつたのは、確かであるからして、歐洲の如く石材を用ふる事より、今日の如く石造煉瓦風となれるとは異ひ、其木材を其儘に使用して今日

に到れるもので、殊に日本國民の信仰の本体は太古に於ては神であるから、其神を安置する處即ち社、神社の建築が一般の人屋建築に非常なる影響を及ぼしたのは事實であらふ。

歐洲の建築法に於ても、今日に到る迄には、種々の變遷を經て來たのであるが、日本はそれに比して、其變遷の跡は極めて少なく、只近來になつて支那及び歐洲の建築方式が多く加はつて來た事は確であるけれども、日本古來の建築法に於ては格別の影響を受けてゐないやうである。

斯の如く遷變の少ない理由は、我國に於ては國家の革命なきのみならず、未だ外敵に侵略せられたる事も無く、其他宗教上の革命の如きに逢つた歷史も無いので、現在に於ても、古來の建築物の最も多く存在してゐるのは、殆んど世界に其比類なき事を誇るに足るものである。例へば大和の法隆寺の建物の如きは千數百年以上も經過し尙現存してゐるでは無いか。

—『三』—

今後に於ける日本の住屋が、多少共夫々歐洲建築法を交ふるに至るのは想像する事が出來るけれども、日本の家族制度及び國民の趣味に就て稽ふれば、一部論者の言の如く全然歐洲の建築法に化して仕舞ふといふ事を想像する事は出來ないのである。

家族制度に就て例を云へば、家庭圓滿とか或は團欒とかいふ親族同居を原則とする故に、立体的に數層の高樓を築いて住むといふよりも、平面的に廣く建築する事が元來に於て適するやうになつてゐると思ふ。

又服裝の上に於ても、其他趣味上より考察するも、全然椅子卓のみに依るよりも疊に座つて打ち寛ぐといふ處に深い趣味があるのであるから、會社工場諸官署等の如き事務的に屬する關係にあつては、歐洲建築が便利であるけれども、我々の住屋としては寧ろ不便が多いので、結局應接室は歐洲建築によるも家庭的居室は疊唐紙とするのが現在の我が生活に適合するやうである。

—『四』—

さて、火災に就て何れに利害あるかと云ふ事を

考へれば、純然たる石造や煉瓦造や、コンクリート等の不燃質物を以て完全に建築せる西洋建は火災の防止に最も適することは云ふ迄も無いけれども、木造を以て西洋建築に準じたるものは、火災に就て最も不便にして有害なるものである。

紐育の都市は木造建築の最も多い處であるが之れが卽ち現今世界の都市中に於て火災損害の最も多い所以である。此點から見て木材系統ではあるが、日本固有の建築は換氣採光の上から云つても又は火災防止の點に就ても、最も研究された跡を認める事が出來るのである。其上に殊に我國は地震國であるから、それに對する自然の研究も却々理論的で、尙ほ且つ地方によつては、暴風雨の害に對する豫防研究の跡を見る事も出來る。

之等に就ては大建築物などゝ頗る正直に出來てゐて例へば大阪、京都、奈良などの地方の如きは此等の建築の多い關係から、東京に比して頗る燃焼率が少ないのである。約り良質の粘土を豐富に使用し、殊に周壁や蛇腹などの如きに迄も周密なる注意を用ひてあるから、隣家から火が出ても却々延燒迄には時間が掛り、其間に相當の方法を構ずる事が出來るからである。

—『五』

之に反して東京などは、すべて表面だけを見てくれ良くし、殊に其上外界に現れざる部分は頗る缺略を加へて居るので例へば天井上の壁や瓦下の粘土の如きも殆んど形式にやつてあるので、延燒率が甚だ多い、瓦下の粘土などは、目下頻りにまがひ物を使用てししかも薄くぬつて置くので、すぐに夫が粉末のやうになり、風の吹く度に瓦の間から飛び出して後には屋根板の上に直接瓦だけが載つてゐるやうな事になり、從つて少し火の粉が吹き込めば直ぐに燃え移つて仕舞うのである。

まして一般長屋構造の如きは數戸一棟の下に相連なつてゐるので、一方の家に發火すれば、下の方では知らぬ間に、火の手は天井から天井と傳はつて、既に長屋全体に燃えついてゐるといふ次第である。殊に防火の用意は素よりだが、火災に際して避難の順序及び裝置の如きは考へられて建築されたものは殆んど無いと云つて宜しい。

しかし少し古い建築物を見ると、正直に雨戸に避難口を設けてあるものがあるが、今日の建物には先づ絶對に見當らない。殊に學校病院寄宿舍等の多數の住居を目的とする處に於てさへも此設備を忘れて居るのが最も遺憾な次第である。

—《六》—

又、風位及び風力より住屋を考ふれば、風位としては地方に依り多少の相違あるも、先づ北西の風位が一年中には最も長く吹き、南東の風位之につぎ、北西風の吹くのは、東京では十一月から翌年四月頃迄だが、此時期も地方に依り勿論多少の異ひはある。

此風位は裏日本より中央山脈を越えて來る風であつて、最も乾燥してゐるから北風の吹く期間は總て物も乾燥し、火災の上には最も恐るべき風であつて、普通にこれを『火事風』と云つてゐる位である。

此時期に入ると、東京の消防などは總ての戰闘準備を整へて、今か今かと待つてゐる次第だが、江戸開府以來東京の大火はすべて此時期に起つて居る。

即ち住屋を建築するに方つて充分に注意をせねばならぬのは、この風位の方面に向つて、空地河川森林などのあるやうな處を選べば、延燒を免かれるに大いに利益があり、一般に防火設備はこの風位にするのが宜しいのである。

又市街の道路の如きも、斯の風位に沿ふて延長したる街は、其時期に火災を起せば必ず大火となるもので、東京では神田區内に一番これに屬する部分が多いのである。

—《七》—

風力に於ても、臨時の突發的暴風は別として、大体に於ては此時期は一日に平均して一秒時間十米突内外の速さで吹く、十米突と云へば、先づ直徑五寸位の樹木が風の度にぐら〳〵する位の強さである。消防本部は十米突が吹くと、非常準備の命令を發して、總動員を行ふが、こんな次第で先づ消防の働き時は此十一月から四月なのである。

火災の原因から住屋に就て考へて見れば、漏電其他特別の注意を要すべきものを除き、普通の注意を缺いだ爲に發火したる戸數部分は、臺所、湯殿、煙突が普通であるから、故に家屋を建築する上に於ては、臺所の構造、湯殿、ストーブ、煙突などには、充分に建築の當初に於て、注意の上にも注意を加へる必要がある。

—談。文責在記者—

都市と文化

帝國通信社　楠原祖一郎

一　緒言

都市と文化は畢竟密接不離の關係を有してゐるものであつて、都市の生命を永久に持續せしむるには、必ず一の文化と云ふものが施かれなければならぬ。文化とは思想の華である、都市の生命は即ち、文化の絢爛なる華に依りて、其永遠性を發揮することを得るものである。而れども文化は一時代を劃して、蕾よりそれを華麗なる花辨に開かしむることは出來ぬ、現代の文化は其原因と見るべきものを遠く先代に索めなければならぬ、文化夫自身は永遠のものである。けれども時代に順應した文化の華は一時代より一時代に及びて永遠性を持續するものであつて、一定の度に於て即ち大小甲乙なく持續する文化と云ふものはない筈である、即ち都市の文化は、當時の思潮の中心勢力を直ぐ理解消化し、民衆の歸嚮する所に在つて、變化し——變化とは文字上の變化ではなくつて、形式上の推移である——向上して行かねばならぬ、吾人は今是等の諸點に關して節を分ち、都市としての存在は文化を如何に利用せなければならぬか又は民衆の心理は如何に文化的に導かなければならぬか、是れには如何なる施設を要するか、と云ふ事を大略述べて見よふ。

二　文化の過程

文化とは時代を通じて推移するものであると云ふ事は、前少しく述べた通りである。

文化は思潮界中心勢力をポレテイヴに善導したものだとすれば、其當時の思潮界と文化政策との關係はどうなつてゐるか、に就て少しく考察せなければならぬ。

現代の文化は四民覺醒の文化である、春暖かき

南國に天眞の生命を保持すべく覺醒せなければならぬ文化である、人として、社會人として、當然なすべき或事項として、行爲せなければならぬ爲めに覺醒すべき文化である。

吾人の覺醒は、吾人の意志を代行する第二の人格者の覺醒である、卽ち文化は覺醒の警鐘である此意味に於て文化は一の頽廢せる思想界、沈衰せる思想界、行詰れる思想界のバイロットである。

社會と文化との關係は、人を離して考察する事は出來ない、どうしても文化政策の意義は人を人たらしむる條件の下に行はれなければならぬ、人を殺しての文化政策は、國を亡ぼすものである、その確かなる例は支那である、支那は隋、唐、時代には百花絢爛たる文化の世であつた、然し其文化の根本は人を殺してゐる、人の存在を條件としない文化であるが爲めに、其文化は根本から崩れた、文化は崩れると同時に唐は亡びた、卽ち文化の過程は人を認めての文化であらねばならぬ、人類の存在を條件とせない文化があるかと思ふ人もあらふが、それは確しかに在る、近くは日本に見れば封建時代の文化である、封建時代には盛んに國學作興の文化であつた、然し其の文化には通常人の携はるを許されない、獨り士族階級にのみ限られた文化である、士族以外大多數に對しての農商人には其文化を知らしむるを欲せなかつた、卽ち人を殺しての文化であるだから封建時代の中心は崩れて明治となつた、而して「王政は復古し其人心維れ新にして文物四方に通ず」と時の人士が聖代を稱揚した所以である、今から見れば當時の文化抔物の比でもないが、當時の人士にして見れば、至せり盡せりの文化であつたに相違ない。

依是觀是文化の基礎は四民衡平であらねばならぬを意味してゐる、獨り特權階級にのみ文化は委せらるゝべきものではない、同一文化の壽命は永ければ永い程當代の士人の中心勢力となつてゐる事を表明する、文化の過程は此の根本を体得して進まなければならぬ。

三　都市政策と文化

都市は文化を最も緊切な肥料としてゐる、都市と云ふ畑に政策と云ふ種を蒔いて、文化と云ふ肥

料を施し、考察若しくは歸納と云ふ耕作方法に藉りて、都市生活の充實と云ふ確實なる收穫を得る事となる、是れは一つの空論ではない、最も確實なる事實であつて、何人も否む事の出來ない通徹的な論證である。

都市政策とは、都市をヨリ深くヨリ多く、都市らしく充實を期する爲めの方法である、然らば都市らしく都市たらしむるには、何が最も必要であるか、前の文化である、どう云つても、又どの方面から論じても、文化は蓋し都市政策の最大なる目的であつて、都市の文化は即ち圓融相卽的の關係を有してゐるものである。

都市としての價値を發揮せしむるには、都市としての施設が必要である、就中目下盛んに畫策されつゝある社會的施設の如きは、都市としての体面を保持し　都市生活の充實を期する上から云つても、緊要最も欠くべからざるものであつて、從つて諸種の異例的なる施設も現はれるであらうが是等は凡べて一樣に文化と云ふ着色料に依りて、各其特色を發揮せしむる事は社會施設の意義を明瞭ならしむる上より見て、最も必要なる事である若し都市政策の窮極たる、施設の實際に當つて文化と云ふ根底がなかつたならば、蓋し無味乾燥なる學理を實際に應用したに過ぎない事になる。

植物學者は華麗なる草木を陳列しては、白い紙片に原名を書き入れて、屬科別に分類する、夫は頗るドライな仕事である、骨董屋は骨董を鑑識する、それは審美的な觀念にて鑑識するのではなくて、時代別種類別に分類する、同じくドライな仕事である、何故ドライなのか、其間に審美的觀念がないからである、それと同じく、都市政策上の施設に於ても、文化と云ふ愛好的觀念がなければ畢竟是等の人々の分類と何等異る處なく、頗るドライな物となるのである、乾燥しきつた事實に群集心理が歸嚮するか否かは別問題として、施設の實際目的は、民衆の歸嚮に從ふを意味してゐるのだから、當然文化を度外視する事は出來ない、即ち理論上から云つても都市政策と文化とは、前述して置いた如く離る事は出來ないのである、然らば都市たるものは如何に文化を利用せなければな

らぬか、單に美術館を建設して、古代の美術を眼前に髣髴せしむる、頗る結構である、音樂堂を立てる、是も必要である、ドライな生活に陷り易き市民を慰安せしむるが爲めには、是れ等施設を講せなければならないのは、云ふ迄もない事である然し文化政策と云ふは、そんな狹い意味のものではない、繪を畫き歌を唄ふ頗る宜しいが文化は是れにのみ止まるべきものではない、今少し根底のある今少しく施設の意義を徹底せしむる、文化策は必要だ、吾人は次ぎに述べて見よふ。

四　民衆と文化

民衆又は民族は國家行爲の元素である、と同時に社會生命のモナドである、國家行爲と社會生命は同一なる樣に見ゐるが、似て非なるものである社會生命即ちソーシャルライフは國家行爲の基礎である、內に社會生命の充實ありて、外に國家行爲となりて現はるゝものである、生命なき社會は則ち國家滅亡の前兆であつて、古代より生命なき社會の例は幾何もある、生命なき社會とは民衆を認めない社會である、民衆と云ふのと、國民と云ふのと、どれ程の差があらふか、國民を認めて民衆を認めない國家は亦幾何もある、頗る可笑しい話しで民衆と云ふと附和雷同し易い、一種の社會主義者だとし、國民と云ふと國家行爲に參ずる聖實なる民だとしてゐる、そんな國はどこにあるか頭を叩けば必ず吾人の頭腦に響く程ある、分類も是迄御念がゐれば寧ろ悲慘な滑稽を感せざるを得ない、民衆と國民に文字上の異りこそあれ、實質的價値に於て異りがあれば大變である、吾人はさう考へてゐる。

圓滑なる國家行爲は、充實せる社會生命に依りて愈々益々圓滑性を發揮する事を得る、その社會生命の根本は何か？要するに民衆文化の徹底的普遍に俟たざるを得ない、民衆文化とは何か食ふ着る住むに要する文化的意義の體得である、食ふ着る住むは何に依りて得らるゝか、即ち働きである働くが爲めに民衆文化を理解せなければならない即ち働き甲斐ある働きをする爲めには、生活に要する文化的意義を体得せなければならないのは吾人たるもの義務であると見る事が出來る。

勞働と文化？是れ眞實に民衆文化の根本目的であつて、働くに就て其に要する文化の意義を体得することは、飜て自己の地位を向上し進歩し發展するを意味する、而して自己を知ると云ふ一大事實は文化の實現上最大なる意義を有してゐるものであつて、勞働の哲學的基礎を知る事は、文化を解すると同時に、最も意義ある働きをなすことを得るのである。

其に吾人の衣食住を滿たしむる爲めには、勞働の哲學的基礎を認識し、生氣ある勞働に從事するの必要あるを說いた、而して之れは理論であつて實際に運用するに至つては、社會政策家の文化的施設に俟たなければならぬのである。茲に於て吾人は都市と文化との結論として、此方面に關することを少しく述べて以て本論を終りたい。

五　文化の利用

夫れ吾人の衣食住の根本は、文化的勞働にあると云ふ事を說いた、然らば是れを實行せなければならないのは當然である、從つて是れが實行方法を示すは社會政策家の責任であつて、是れが實行は都市の責任である。

先づ其方法を論ずる迄に、勞働の經濟的根據を述べて見たい。

勞働は國家の生產組織の根本である、生產組織の增大は、國家の富を增進するものであつて、國家夫れ自身が富を占有すると同じ事になる、而し富の本質は勞働以外に更に一つの重要なる意義を有してゐる、即ち生產の原料、又は勞働夫れ自身の原料たる、勞力消費の輕減設備が是れである、强ちに資本の增大、勞役頭數の增大ばかりが、富の本質を增大ならしむるものではない、即ち以上は勞働の經濟的方面であつて、此手段に藉りて獲得せなければならないのは、勞働者の地位の安定である、勞働者は自己の勞働價に對して、對等な勞金を得るばかりではない、ギルドを組織し、ギルドに加入して權威ある勞働狀態を持續せなければならない、是れが勞働の文化的意義の最大なるものである、都市は是れを翼贊し斯の手段に藉りて勞働者に慰安を與ふる樣、政策を施さねばならぬ都市文化の最後は卽ち是れである。

本誌の題號を見て更に建築家諸氏の重大なる責務を思ふ

貴族院議員　仲小路廉

一

雜誌が來る度に、先づ第一に一應それを手にした人各々に、何等かの感じを與へるものは表題である。我輩はその表題に就て、心を留めて見且つ考へる事に、常に云ふべかるざる興味を覺えてゐるものである。

『建築と社會』は又就中その中に意義もあり深い興味もある次第であつて、總て政治經濟は勿論尚ほ進んでは文藝も技術も、何れか社會と關係を有たぬものがあらふか、しかし其關係の度如何に到つては、時勢により異る處があるのである。

我々は中世紀時代には、自から中世紀の感を抱き、近世と成ればまた近世の感を抱くもので、從つて王朝貴族の時代の盛んな時には其時勢を表徴する總てのものに王朝貴族的狀態が表れて、歐洲諸方に於ても皆その通りであつた。

然るに時代は一朝にして變遷を告げ、個人思想の旺隆なる時代となり、其時代にはまた總べての事物に、個人的思想が現れて來たのは勿論で、總て其時代々々の政治的思想法律的思想皆相伴ふて其狀勢を現して居るものである。

佛國革命後一時に勃興したるは個人思想であつたが、その思想の法律的社會的に現れたるものが一時權利思想の發達となり、延いて所有權は絕對にして、天上より地下にも通ずるものだから、已のが所有する物件は絕對的に、自己の考へ通りに處置をする、我物を思ふ通りにするに、何を他人より餘計な事を云ふかといふやうな考になり、其

時代には、それがまた至極尤な事とされてゐたのである。

二、

所謂煮て喰ふと焼いて喰ふと我物は我物である自分の土地家屋である以上は、何をするとも自由だと信じてゐたのである。處が實際に於てそれは少し無理であつた。如何に我が土地なればとて、四隣にかまはずに無暗に壊したり、大きな穴を掘つたりすれば、それが延いて四隣の土地迄も壊す即ち近所隣の土地迄も、自分の處の大穴の爲めに龜裂を生じたりする事になるのである。

天地間の事物にして、何一つとして他に關係無く單一なものはないのだが、それと同樣な事情が各個人の生活狀態にも及んで來て、個人思想の旺盛なる時代には人生五十年丈く短かく世を渡れ、これが眞に痛快だ奇抜な事だと考へられた。

然し乍ら其人は丈く短かく世を渡る事が或は痛快であるかも知れないが、それが爲めに及ぼす影響、即ち社會が蒙る害毒を如何とするか、實に社會は、只一人の人間が丈く短かく世を渡る量見の爲めに少なからぬ害毒を引受けねばならぬ事になる。此處に於て確かに思想上に一つの變化が來て——世の中は總て相持ちである一人の所業も全体に影響を受け善惡共に其波動を負擔せねばならぬ——此思想が次第に發達して、兎も角もそれが今日の時代を支配する事となつた。これをむづかしく云へば社會は共存共營の者であるといふので、竟に個人々々の道義觀念よりも社會奉仕といふ觀念が強くなつて來たのである。

三

今日の社會は斯くの如き狀勢となつた。これと就中甚大の關係ある建築、即ち本誌の示さるゝ『社會と建築』の關係には、餘程の意味が含まれる、と思ふのである。實に今日の時勢に於ては、建築家は只家を建てるといふ考よりは一歩も二歩も進んで寧しろ社會を建築すると云ふ考ではなくてはいかないのである。個人々々の關係では無く清新にして健全なる社會、是を建築するものが即

ち建築家と成つた。

建築家の責任は、實に重大を加へたと同時に、こゝに社會的奉仕として、近世思想を實現するものが建築家の手に俟たねばならぬ事となつた。これが我輩の最初に述べた時代により觀念思想の關係を異にするものであつて歐洲中世紀に於ける、王朝貴族時代には、建築家は其時代其物に努力し個人思想時代には、建築家はまた個人的に驅使されたが、最早や今日の時代となつては、其重大なる責任は、一人一個に驅使さるのみではなくして社會全體に奉仕し、否、それ許りでなく、社會其物を建築するのが建築家の責任となつたのである

其責任の重大なると共に此處に云ふべからざる愉快も伴ひ幸福をも感ずるのであるが、人世何が愉快といつても、何が幸福だといつても、其時代〳〵に於て現在したる社會の爲に事業を殘して社會全體に恩澤を及ぼす事より以上は無く、人々は其恩義に感じて永く其功積を忘れないのである。

四

偉大なる事業を殘せば、その人の身命は盡きても、其事蹟は永久に生命を保つて居るもので、我國に於ても、野中兼山、熊澤蕃山、河村瑞軒、何れも其當時の社會の建築家であつたのである。今以て口碑に遺り、中には神としても尊崇さるゝ者もあり、歐洲諸方に於ても、其時代を建築したる偉人の事蹟程、後人に偉なる感激を與へたものはない、此間に極めて高尚なる理性が發揮せられ其感化力は時代を表徴するのみならず、活動したる歷史として遺るのである。

我輩は今日の建築家として世に立たるゝ諸氏の第一義として、新たなる社會を建築する此時代は我々の手によつて建造されたものたとして、其中に時代の文化が表徴されたいと思ふ。

これこそ普遍的には社會を益し、特種的には時代を美化せしめる花もあり實も殘ると云ふは、實に斯の意味を云つた事であるのだ。

——談、文責任在記者——

度量衡の統一に就て

日本建築協會
終身賛助員　山本辰五郎

度量衡の統一根本理由

農商務省は、現行度量衡法の改正案を今議會に提出せんとするもの、如し、改正に對する根本理由は『日本在來の度量衡は何等の統一あるなく猥りに亂雜なれば日常取引の不便錯誤夥しく從つて國民は精神的に經濟的に幾多の損失を蒙りつゝあるは否定すべからざる事實である、而して今後經濟社會の益々複雜するに於てこの如く亂雜なる度量衡を使用せんは獨り取引上の不便錯誤を招くのみならず爭議の機會を增加し、更に國民をして二重生活より脫せしめ得ざるべし。故に日本在來の度量衡法を改正しメートル法を採用するに於て之等の弊害を矯正し得らるべし。然れども、メートル法の採用は我國民の多數をして當惑せしむべしされど、メートル法は國際的計量にして此系統に統一するは內外共通の便益とも云ふべく、即ち、メートル法の採用は時代進運の要求なれば一時の不便苦痛を恐れて是が採用に躊躇するが如きは我國民をして永久に虐げ徒に能率を低減せしむるものなり云々』と聲明せられてゐる、理論として傾聽の價値あると何人も肯定するところなり。然れども靜かに考慮せよ、啻だ單にメートル法に統一すべしと稱すれば如何にも簡單なる問題の如くあれど、實に國民として輕々視すべからざる大問題ではあるまいか、殊に我建築界に於て然りとするものである。

メートル法の採用と建築界

私は嘗つて建築雜誌上に於て拜讀した。それは

日本建築協會、建築業協會、建築學會、官廳技師會に於て、建築材料寸法統一聯合會を組織し、勞力の節約、工事期間の短縮等を主眼として、普通建築材料の出來合品を市場に有せしむべく研究しつゝありと。最もその目的は私等請負業者として相互に賛同し且つ聯合調査會に於ても農商務省のメートル法改正採用に鑑み、市場出來合品其他の材料をメートル法を基準とせるものに改正せんとする意嚮の如し。固よりメートル法は國際的計量にして此系統に統一すべきは內外共通の便益點からすと雖も、日本在來の寸尺法より直にメートル法に轉換すべき其間に於ける問題を併せて研究討議しつゝあるであらうか、私は築築界が此メートル法採用に際して如何に面喰ふかは恐らく想像以上ならんと思惟するのである。即ち、メートル法を完全に使用し得るまでには有形無形に多大の犧牲を拂ふべきことを覺悟せなくてはならぬ。舊習を捨てゝ時代の要求の意義を徹底せしむるには幾多の犧牲を拂ふべきは當然かも知れぬ。併し、この犧牲を如何にせば可及的低減し得るか、而して如何にして統一後のメートル法を普及せんとするか〻問題ではあるまいか、メートル法改正研究者は併せて斯の二問題をも研究すべきではあるまいか

教養の低級なる職工の當惑

日本在來の度量衡法を捨てゝメートル法を使用すべきは普通學を修めたるものに於て些々たる問題と稱すべきか、比較的總てに於て教養の低級なる諸職工が、而かも幼少の頃より數十年間寸法尺を基準として自己作業上の修養及經驗を積みつゝ今日に及べるものを、直ちにメートル法を基準として其作業に從來せしむることは容易ならざることゝ謂ふべし。諸職工の當惑は作業能率の低減及技倆の低下すべきは爭ふべからざる必然的結果ではあるまいか。これより生ずる諸職工の經濟的損失及使役者の有形無形の損失は之を如何にせんとする歟。就中、大工の如きに至りては蓋し其著るしきを想はずんばあらずである。

謂ふまでもなく、今日建築の中心職工は之を大

工となす。その大工に於てメートル法の採用を同時に能率低減技倆低下（但し當分としても）は直ちに建築施行に影響すべきは瞭かなる問題であろう。されど、私としては、メートル法採用を排するのでない。當だ考慮を要すべきは其實施期間と實施方法の如何である。度量衡統一より釀生さるべき此必然的根本問題を豫め適當の方法の下に講せられむことを望むのである。今や何れの事業界に於ても、勞働力否熟練せる諸職工の拂底は共通的缺陷と雖も、我建築事業に從事する諸職工の拂底甚だしき折柄、メートル法採用は特に考慮すべき問題にあらざるや。

職工の拂底と將來

次に、私は漸次低減しゆく建築諸職工の現在及將來に就て卑見を述べたい。總て事業の成敗はその事業に從事する『人』の問題如何によりて左右せらるべきは謂までもあるまい。殊に職工に於て甚だしく其影響を感じるのである。同じ賃錢を支拂ふ職工にも、熟練し經驗を有し、而かも相當の技倆あるものもあれば、又然らざる者あるは事實である。故に職工の如何が事業能率に差異を生ずべきは白明の理である。更に熟練上達せる職工を得ずんば當だ事業能率に影響するのみならず折角の名設計も所謂建築本來の使用及建築美を彰さずして平凡に終ることなしとせず。故に請負業者は何人も此熟練せる職工使役に腐心しつゝあるのである。これは請負業者も下請負業者も等しく希望するところにして、現在の請負制度は直營工事にあらざる限り、請負業者は下請負業者に分割作業を約するは習慣とし居れば、下請負業者は可及的熟練上達せる職工を使用せんと努力しつゝあるのである、その結果は職工爭奪を演ずるのである。されど、熟練せる職工數の拂底は熟練職工を養生せざる限り何時までも不足は不足である。一方に於ては文化向上と俱に建築事業も進歩向上しつゝあれば、この進歩向上しつゝある今後の建築界が要求せんとする諸職工は、今日より以上に其總てに於て熟練し上達し敎養あるものでなくてはならぬ今日に於てさへ熟練職工の拂底せる今後の理想的

職工は之を如何にして求めんとするか。時代の進運と共に職工そのものゝ智識手腕も漸次上達するの日亦近しとするは、職工の實狀に通せないものゝ觀察にして、今日の實狀に甘んじ何等の敎養を施さざるに於ては、將來の職工は現在の技工より以下に低減すべき傾なしとせず。換言すれば、幾年かの後は現在の技工と比較し尙ほ且つ低劣なる職工を使用すべきではあるまいか。

職工の敎養は刻下の急務

謂までもなく職工は一個の技術者である、技術は尊重すべきであるが、尊重すべき技術を有する職工を如何にせば求め得べきか。

殊に建築事業の中堅職工とも云ふべき大工に於て然りとす。熟練せる大工は、年少の時より弟子入りをして十數年間腕を磨かなくては一人前の技工となることを欲せない。されど今日に於ては、現在の社會制度及經濟組織の上より昔日のそれの如く十數年間何等の經濟的報酬をうくるなく偏に刻苦奮勵して一人前の技工たらんとする者の漸次減少すべきは爭ふべからざる事實である。一度弟子入りを爲すも二三年經過し未熟なりとの自信を有するも師の下を離れて職に就く者多し。この現象は物質文明の餘弊とも謂ふべきである、斯くて將來、所謂熟達せる技工を要求せんとするも、斯は望むべからざることではあるまいか。而して熟達せる職工の拂底は直ちに事業に累するや勿論である。或論者は曰く『建築技術及施行方法の進歩向上に伴ひ今後の職工は必ずしも熟達する腕を有せざるも不可なし』と稱せられてゐる。それは建築施行が今後機械力によること、材料の統一されたる曉に於ける職工狀態を總稱した議論であらうが、私は、その議論に直ちに贊同し得ない。今後の建築界が機械力を用ゐる材料の統一を觀たりとするも尙ほ且つ其作業狀態に順應せる熟練職工を要すべきは今日熟達せる職工を要求せると同一ではあるまいか。更に曰く『憂ふる勿れ、今日は職工學校あり亦徒弟學校ありて理想の職工を養成しつゝあるにあらずや』と稱す、如何にも職工學校や徒弟學校の創設目的は、理想的職工養成にありし

も、その結果は目的に反してゐる。それは職工及徒弟學校出身者が今日の職工と交つて作業に從事する上に融合し得ない事情もあらんが、學校出身の職工、卽ち理想的職工を目的とした學校出身者は卒業と俱に、現在の職工と、技術家の中間にあつて、所謂お世話役たらんとしてゐる。私は今後建築界の推移に鑑み、今後は技倆と稱するよりも部分的作業に熟達せる而かも相當智識ある教養ある職工を要するのであるから、斯の種學校出身者が純然たる職工たるに於て初めて理想的職工を得るにあらざるやと考ふ。されど現在にては職工たらんとするもの極めて稀れにして其多くは職工を使役せんとする地位に就くべく焦慮し、一方に於て十數年間の弟子入りを欲せざるに至りては今後の職工を如何にして求めんとするか、建築家は豫めにして之を研究すべきにあらざるなきや。

渡米航海中コレア丸より
片岡理事長の來翰

十一日出帆以來日々体屈を極め大閉口致し居りしもホノルヽ到着以來海上生活に慣れたると海上の平穩とにより日々其日のたつことの早きを惜しむやうになりしは自分ながらをかしき感を生じ候日本人は一等船客二百五十人許の中五十人餘にして學士會員十一人あり一度コレヤ丸學士會を催したる位にて其他には外國通の小松綠、東洋汽船の重役淺野氏等あり比較的優勝の態度にて外國人に對することを得候日々のスポーツとエンタルテインメントは大に盛況を極め昨夜のファンシーボールには日本人二西洋人四の割合に賞品を受け其爽快なる景況は到底內地にては見得ざる程度のものなりしを御報告申上度候

ホノルヽ上陸は廿日の夜と、廿一日の午前との二回にて得るところ少からざりし、丁度同鄕の人物にてホノルヽの紳士なる高桑氏が横濱より同船したる爲ホノルヽにて凡てのアレンヂメントをなし呉れ非常の便宜を得候廿七日桑港着直ちにミツドランドにてセントルイ、シカゴを經て紐育に向ふ筈に候歸路は十二月二十九日桑港發の春洋丸に乘船の筈に候（來年一月十五日橫濱着）安井氏も健在日々スポーツに從ひ貴所員の諸君へよろしく、協會の連中へ御序の節よろしく。

使はるゝ人と使ふ人 〔上〕

═ わたくしの事業に携る人に就て ═

日本建築協會
終身賛助員 有山福重郎

◈使はるゝ人の資格

總て事業を經驗して、それを發達させて行くには、計畫と實行の兩側面のあることを牢記せねばならぬ。夫で計畫は組の管理者、卽ち使ふ人がこれを司り、實行は使はるゝ人が自ら之に當るのである。

こゝに或一つの仕事を實行するとせば、此の仕事に對して一定の方針を定め、而して如何にこれを經營して行くかの計畫がなければ、其の仕事を完成し得べきものでない。然しいかに立派な計畫があつても、之を實行する人がなければ、夫れを實現することは出來ないのである。左れば此の計畫と實行とは、車の兩輪の如く、決して其一を缺ぐことは出來ないのである。殊に事業の成否如何の如きは計畫そのものゝ善惡よりも、寧ろ計畫を實際に行ふところの、人才の力、卽ち實行の力に依ることが最も必要である。

いかなる時代にあつても、善良な使傭人を獲るといふ事は、至難であるが、殊に現代はこの使傭人に、善きものが、發見されないで、困難をする之れは極論すると、使ふ人にも行屆ない點があり使はるゝ人にも氣儘があることになるのだが、此の塲合、雇主若くは組の管理者といふ側を離れて主に使用人および組員のことに就て、其の心得を說いて見やうと思ふ。

先づ使はるゝ人となるには、如何なる資格を要するかと云ふに、(一)當でになる人、(二)賴みに

なる人、(三)信せられる人でなければならない。いかに卓越せる仕事的の技能があり、手腕があつても、又力量があつても、當てにならぬ人は頼みにならぬ、信ずるに足らない人であるならば、使はるゝ人としての資格を、完然に具備してゐるとは云へない。之を要するに使はるゝ人の唯一の資格は使ふ人に對して、常に大なる滿足と、信頼を與へ得る人と云ふことに、歸着するのである。以下、善良なる人とは如何なるものか、其の善良なる、しかも模範的の人となるには、如何なる資格を具備すべきかにつき、卑見を述べることにする

◈常識の修養

實地の執務家は學術上の專門家でない、學者でない、從つて深い學問は必要としない。のみならず餘りに學問が深いと、却つて仕事その物を輕視する傾があるから、自然仕事に興味を持たないことになる。物に對して興味のないのは、熱誠を缺ぐに至り、熱誠を缺く事はやがて失敗の奈落に導き入れる恐れがある。故に餘り學問に食傷するのは實地家にとつては却つて有害である。

然らば實地家には學問の無いのがよいかと云へば、全く無學ではいけない。矢張り事務を執るにはそれ相當の學問がなければならぬ。恰も時計の如く、一分間を休むことなく進展するのである。目眩しい許りに發達推移する世の中にあつて、若しも學問がなかつたならば、如何にして能く物を理解し、處辨して行くことが出來るであらうか。然れば學問は絶對に必要である。併し餘りに學問に食傷すると寧ろ「及ばざるに均し」と言ふことになる。夫ならばの程度が好いかと云へば、凡ゆる物に對して、理解し得る準備智識、一方に偏さない智識、卽ち常識が最も必要であると謂はねばならぬ。

學問を衒ひ、理論に走り、研究にすぎるは、却つて實地家の進行を阻害し、又は極端に走せ偏頗にすぎ調和を破り、秩序を紊すが如きは、事業に失敗を招くものである。だが建築土木に從事する者は、事に當つて奇矯に偏せず、頑固に陷らず、是非善惡を見分け、利害得失を識別し、言語およ

び擧動は、自ら中庸にかなふ如き、所謂る智、情意の三つが、頗る美妙なる調和を得て、その權衡を保ち得るの常識家たる事が極めて必要である。

世には平凡にして、何等、幽玄なる眞理を齎らさない議論を稱して、「あれは常識論だ」とか言つて、それを侮蔑し、人より優れた思想を持たない者を呼むで「あれは常識家だ」と言ふて之を卑下する傾があるが、それは心なき人の思ひ、言ひ、考へることであつて、常識は、斯の如く卑しむべく亦輕ずべきものでない。

たとへば深い谷に渡した一本の丸木橋がある。それを渡るときは、恐怖と不安を抱かない人はない。何故然るやと言へば、それは、過つて深谷に落ちはしないかと云ふ恐があるからだ。人は何故落ちるか、夫は身體の中心を逸するからである。人が中心を保つ事は困難である。若し人間が誰でも落ちて好いものならば、無事に渡るよりか、落ちる方が安いかも知れぬ。けれども谷に落ると、生命に關する不幸を見ないとも限らない。よつて人間は困難を感じながらも、身體の中心を保ち、平衡を得べく努力するのだ。これはたゞに肉體上の事ばかりでない。吾々は此精神的方面に於ても常によく中心を保ち、平衡を得て行くことが困難である。常識とは卽ちこの中心を保ち、平衡を失しない精神作用を云ふのである。偏せず、黨せずと云ふ事は困難であつて容易になし得ることでないが、常識は卽ちこの困難を實現した狀態であるから、決して之を輕じ、卑しめてはならぬ。

また一面から觀察するときは、常識とは智、情意の圓滿なる發達を遂げた、精神狀態であるとも言へる。智にすぎれば、萬事を智識のみに憑へて情意を捨て、情にすぎれば智意を顧みずして、情のみで押し通し、意志强きにすぎれば智情を輕じたゞ意志の力にのみ依らんとする。かくては盾の半面しか見ないのだから、到底全き實地家となることは出來ない。要するに常識とは、智、情、意の三つが圓滿に具足したものを言ふのである。

◆唯だ忠實を旨とせよ

たとへ如何に技倆が秀でゝ、智能があり、思慮

が周密で、是非善惡の判斷が確實であつても、その職務に忠實でなければこれ等一切の美點および長所は、恰も月光の陰雲に被はれたやうに、光を放たないであらう。或る一事を托されて、やれば如何樣にもやり了せるのだが「この位の事で宜からう」と、なすべき餘地を殘し、大體を取繕めた丈けで、捨てゝ置く人があつたとするならば、何うであらう。大工が家を建てた。大體出來上つた併し肝腎な所に栓一本を打たなければならぬが、それは高い所で面倒だから、まあこの位で大丈夫だらうと捨てゝ置いた。間もなく豫期しないような暴風が突發したゝめ、建てた許りの家が倒壞した。而もその原因は栓一本打つ勞を惜んだためであつた。斯かることは往々にして生ずることであつて、全く忠實を缺いだ結果である。

周密な上にも、周密な用意をめぐらし精到な注意を働かしてした事でさへも、動もすれば失敗することがある。況んや少許の勞を厭ふて、手を省くやうな、不忠實の事があれば、之には何等かゞ酬ゐられずにはゐられない。職務に對して怠慢であり、正直を缺き、勞を厭ふは、卽ち忠實の精神を缺ぐからで、不忠實は、直に破壞を招き失敗を來すのである。苟も人が人を使ふのは、その人に與へた仕事を完成し、成就し、効果を擧げて、事業の成功を期したいからである。然るに事業を破壞し、又はその發達向上を阻害するやうな人は、その根本に於て既に相反してゐる。斯の如き人は寧ろ去らしむるに若くはない。されば、忠實は實地家にとつて、最高の道德であると同時に、唯一の財產でなくてはならぬ。卽ち忠實な者は事業の根本義に叶ひ、事業を向上せしめ、發達せしめるのであるから、最終の勝利はこの樣の人の手中に歸するのである。

何事でも求むるならば、或る程度までは與へられる。けれども手を拱いて求めたのでは、決して與へられない。然し人生には、先づ與へて、次ぎに與へられる事がある。これが人生における自然の結果である。忠實を盡すことは、卽ち人に與へることで、人に與へる事は、やがて自分が人より酬を受ける前提となるのである。忠實に從業すれ

ば、その努力は決して水泡に歸するものでなく、その組なり、商店なりは、益々繁榮して、使はる、人もまた自然に榮達するのである。

單に利益を求め、報酬を望むが如きは、自己本位であるから、決して眞の忠實とは言へない。眞の忠實は、一種氣高いところの動機、崇高なる精神より生せねばならぬ。二宮尊德は「働きとは天地の神の授けられたる事を助くるのである」と言つておるが、甚だ深い眞理がある。人は生れながら、無爲にして徒食するとは出來ない。何事か爲さねばならぬ義務がある。この義務は、人生としての本分と、その天職の最善を盡すことである。然れば人間は、どこまでも道德的でなければならない。即ち忠實をいたすのは、自己の利益のためとか、又他に利益を得せしめると云ふやうな、淺薄なものでなくて、吾々が人生において受けてゐる責務といふ負債を、綺麗に返濟することである人が身を勞して快を覺へ、心を苦しめて後ち悦びありといふのは、皆なこの精神上の作用から來るのである。然れば如何なる些細な事でも無責任に不忠實に、粗略にしてはならぬ。一は十の最初であり、小は大の始まりである。人間萬事、輕卒にこれを看過してはならぬ。

吾々が事務を執る、日によつて甚だ愉快でないこともある。併し人間は、その心の持ちやう一つで愉快にも不愉快にもなる。高杉晉作の歌に『面白きこともなき世を面白く住なすものは心なりけり』とある。吾々はこの歌のやうな心持になつて自己の今あるところの立場と、その貴き使命とを感謝して、面白く日々の仕事を致したい。

銘々に與へられた仕事は、みな貴い意味の含まれてある使命にちがひない。けれども人間は弱いものであるから、業務に困難が起こり、障害が加はり、蹉跌がくると悲嘆の聲を放つに至るのである。併し此處が人間の鍛練の境地である。故にこの試練境で、充分に精神の修養を爲し、また事務の練磨をせねばならぬ。「我物と思へば輕し傘の雪」と大高源吾はいつてゐる。人は心の持ち方一つで、精神の重荷を輕くされるものだ。

しかも職業を嫌ふと、其の報酬には嫌惡と紛雜

と失敗がくるのである。之に反して職業を愛するならば、其の報酬として興味と熟達と成功を贏ち獲るのである。職業は神聖であつて、貴賤の區別がない。甲の職と乙の職と區別して、其の種別によつて品騰し、判別して好惡を加へそれを愛憎し或は他の職業を尊んで羨望し、或は自ら卑しめて、下等の職に携はるものであると考へてはならぬ。

職業は平等である。自分は土木屋と建築とを比較し、又帽子屋が貴く靴屋が賤しいものだといふ道理を發見しない。花屋が高尚で、豆腐屋が野卑な商賣であるといふ理由を發見しない。何れの勞働もみな神聖なものである。人に上下の區別をつけるのは、單にその職業の位置を示したものであるから、此の位置をみて、直ちに職業の等差をつけてはならぬ。

木下藤吉は、織田信長の草履乘りをしてゐたとき、斯う言つたそうだ「半紙を二つ折りにすると上下は一つになる。俺は主君の草履乘りをしてゐるが、何事も主君の側にゐる。丁度、半紙を二つ折りにした樣なものである」と。之れは極端と極端の一致することを、卑近な例で說示したものであるが、此の比喩には拔く可らざる眞理がある。社會の低級者は現代の吾々の心理を解せず、一見して位置が低い樣に云ふが、その職責の頗る重大なものがある。木下藤吉は一介の草履乘りであるけれど、信長の側にゐて、その主君の安危を護つたのである。之は取りも直さず木下藤吉の職務が重大であつたことを示す處の有力な證據ではあるまゐか。土木建築業者にはその職業が安く見分れてゐて、其實甚だ使命の重いものである。人は職業に對して、斯ういふ哲理を覺つておらねばならぬ。

◆勤勉と忠誠

我組の能率を增進するには、前に述べた如く組員が仕事に忠實でならぬことは勿論であるが、而もいかに忠實であつても、常識が發達してゐても其忠誠を盡して、撓まず屈せずといふ、勤勉の精神が缺けてゐては、效程の擧るものでない。

常に一定の方針、節度を設けて、總ての仕事を

此の規律のもとに進行さすのである。故に出勤・退出の時間なども必ず一定してゐるのである。然るに勤勉の心なき人は、この時間を守らず、又た組の用事などで出張せなければならぬ時でも、自己一身の都合でもつて豫め指定した時に出發せずまた約束した事を履行しない。かくては、仕事の進行上について、多大なる支障を生じ、延ひて同業間に、この怠惰若くは不勤愼な惡風を瀰漫させ組内は、ために惰氣滿々たることになるのである實際家にとつてはこれ程の惡德はない。單に自己の不便、不快のため、組に損害をかけ、同僚に惡感化を及ぼすとは不心得も甚だしいではないか。

我組の業務と、組主の心理又社會狀態が皆組織的であるから、他の全部が悉く勤勉しても、其中に一人怠惰者があるときは竟に全部の進行を澁滯するに至るのである。組内に於ける一個人は恰も時計を形成せる機械の一部の如きもので、その一部に故障が起り、または破損したならば、機械全體の運行は、直ちに停止すると同じである。從つて一人の懶惰、一人の不勉強は、直ちに組全體に波及するのだから使はる人は各其受持ち部分に就き全部の活動のために、深く自己を謹愼せねばならぬ。

◈仕事は合理的なれ

いかなる簡單な仕事でも、それを執行するには周密なる注意をもつて、正確に、最も緻密にしなければならぬ。然るに注意に乏しい人は、輕率に物事をするため、しばしば同一の失敗を繰返すことがあるから、竟には、取返しのつかぬ損失を招くことになる。之に反して、どこまでも愼重に且つ注意深くする人は、失敗せぬから組に損失を懸けることがない。大抵な仕事に當つても狼狽せざるのみか、少しの過誤もなく、其仕事を美事に完成して行くのである。

斯ういふ人には失敗や、または過失の憂慮もないが、また何でも不能といふ事がなく、爲る事、爲す事悉く誤りなくして、効果を擧げて行くのである。深い注意力は、着實な精神に宿つてゐるのである。前後の關係も思はず、周圍の事情も考へ

ずして、突飛な振舞をしたり、又た秩序を亂したり、規律を無視するやうな、不謹愼な行をするものは、仕事に對して周密な注意を缺いでゐる人か又は着實な性格を持たない人に限られてゐる。斯ういふ不謹愼な組員のゐたときは實に此組の不幸である。

何うしても規則的にして、合理的な業務その物の本質に、適合した性格を有せなければならぬ。仕事その物の本質と、之を執り行ふ者の本質との間に、大きな溝渠が出來てはいけない。過失、失敗、錯誤は總てこの兩者の間に生じた溝である。若し事務を謬なからしめやうと思へば、着實で、正確で、質實でしかも眞面目でなければならぬ、如何に技量が優れてゐても、如何に手腕があつても、粗大放漫なる性格の人は、とても建築家としての、資格なき者と謂はねばならぬ。

◆正直に確實と敏活

すべて我組の方針は、すこぶる簡單なものであるが、夫れを遂行する方法は、甚だ複雜多樣であつて、而もその業務が進歩すればする程、なほ事務が錯雜になつて來るのである。斯うなると仕事の進行はなか〳〵容易でなく、從つて其の仕事を處理する上について、敏活を要することになる。

何役所の工事は竣工濟か、と、上の人に問ふときに、「はい、とつくに」と云ふ人と、「いへまだです」と云いふ人がある。これは仕事進捗の上において、大變な差異がある。「はい、とつくに」と云ふ人は敏活を尊ぶ人だ。この種の人は、如何に物事山積しても、速に之を處理して行つて直ちに落着ける人である。多用を進行さす秘訣は手順よく仕事を始末して、その仕事を後に廻さない事だ。

こう云ふ人は、常に自分の方から、仕事を追ふやうになる。かう云ふやうに敏活に執務する者は爲すべき事が何時起つても、綽々として餘裕あり少しも驚き、倦み、勞れ、厭ふことがない。從つて成績も著しいものがある。けれども「いへ監督が」と云ふやうな人は常に停滯して自ら仕事の爲に壓迫を感ずる樣になり、その成績も亦甚しく劣

るものである。失敗や過失は、斯ういふ場合に多く生じ易いものだ。斯の如き人は、建築家として到底上の人に信任を得ることが難いであらう。

たとへ如何なる技能を有してゐても、又勤勉であつても、敏速を缺いたならば、充分の効果を奏することが出來ない。けれども如何に迅速を尊び敏活を要しても、結果如何を顧みずに、不正直な手段や、投げ遣りな方法を以て、無闇に急いでは却つて敏活の要をなさない。眞の敏活は、正直にして確實、丁寧にして親切でなければならぬ。道路の善し悪しも考へずに、近路を通ふると、反つて峻坂や、深谷の爲に、通行を阻止されて、案外に時間を費すことがある。急ぐ時には多少の時間は、損の樣に見へても、善い道を選んで行くに如くはない。正直と、確實と、そして敏活とは恰も鼎の足の如く、互に並立せなければならない。（つゞく）

桑港より　片岡理事長の來翰

一昨々日（二十七日）午後當地へ着致しました二十八日二十九日の兩日は極力諸處見物をなし食事場、觀物場の狀態を視察しましたけれども正式の訪問は一も之をなさず凡て歸途に讓りました歸途の船室は十二月二十九日春洋丸と決定せしゆへ再遊を致し得る事と存じカゴ大學及市役所にも尋ねることを見合せ專ら社會生活の狀態一般の事務及商業等の樣子を視察するようにしました、排日の眞相は可なり深きものあることも發見し何となく非常に不愉快を感ぜざるを得ざる次第にて成金都會の嫌味は尙その建築振りにも見出されて如何にも落付きのなきを見るのであります、殊に上町の住宅地の無趣味なる建築振りは全くコロニーの初期に見る如きゾンザイさを發揮して居りますが交通組織の發達は訪問者をして愉快に感ぜしめることは確かです着列々果物の美味なるに飽き、氣候の中和なるに驚き物價の比較的低廉なるにも驚きました、本日午前九時ユニオンデポー發特急にて安井君その他同勢六人シカゴへ向け出發します來月二日午前同地着の豫定です、協會の諸君、三寸里會員一同へ御序の節よろしく御傳聲被下度願上げます



「住宅」

居構百選

（其十）

葛野建築事務所主
會員 建築士 工學士 葛野壯一郎

廿七 イングリッシュコッテージ

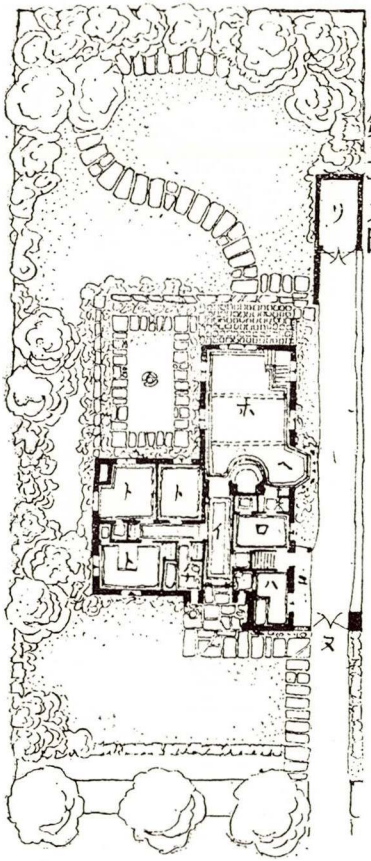
第二十九圖は英風小コッテーヂの一例で、設計者はブラッドグッド、チュチリ氏、郊外住宅として野趣に富んだ田園向の面白いもので有ります。詳細寸法の記入が無いから精しくは云へないが大体五十坪以内で、間取りの特長としては臺所及勝手口が道路に近くて非常に便利だといふ事で有ります。（イ）のホールから右すれば（ロ）の臺所に入り（ハ）の女中部屋に通ずる、（ロ）（ハ）の中間（ニ）に勝手口を開き直ちに往來に出る事が出來る、女中部屋には專用の手洗便所あり、臺所には食料品置場及び配膳室あり、配膳室を通じて（ヘ）なるダイニングアルコーヴ即ち食卓のあるところに入る樣に出來て居ります。ホールの正面が（ホ）のリヴイングルームとなり其處には大きな爐と前に記したアルコーヴ及び屋階に通ずる階段が有ります。（イ）のホールの中間廊下を左へ入れば（ト）な

る三箇の寝室と(チ)なる浴室便所が有ります。居間を最奥の方へ抜けて臺所や寝室を入口に近く置いたところが、今迄に掲げた各種のプランに比し全然行方の異なつた處で、斯の點は寧ろ日本風のプランに似て居る樣で有ります。外觀は第三十圖に示す如く全部漆喰塗で、屋根は板で以て蘆葺風の形を摸して居ります。

（未完）

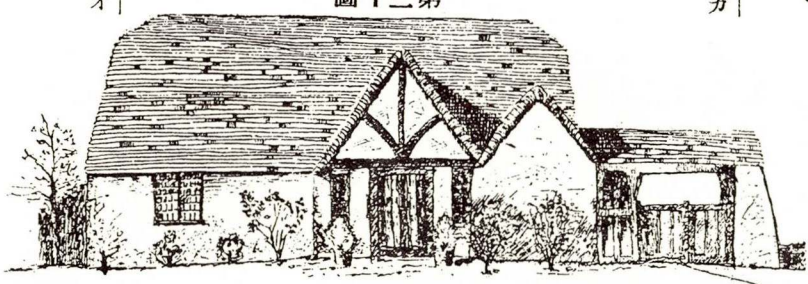
（ハウス、エンド、ガーデンスブック、オフ、ハウセス、）

第二十九圖



イ、ホール　ホ、居間　リ、車庫
ロ、台所　ヘ、アルコーヴ　ヌ、勝手口
ハ、女中部屋　ト、寢室
ニ、台所口　チ、浴室便所

第三十圖





〔庭園〕

∴日本庭園考（九）

會員　農學士　大屋靈城

六　日本庭園の特徴

本邦の庭園が世界に於て類似のない特徴を有つて居ると云ふ事は一般世人の認むるところであるが然らば如何なる點が著しい特徴であるかと云ふ事に成ると一寸一口には言ひ表はし難い。無理に言つてみるならば日本庭園は「心を樂しませる」と云ふ方面に大いに發達した結果總てが印象的である。これに反して西洋の庭園は「目を樂しませる」と云ふ點を眼目として作らるゝ事が多かつた爲に特に視覺に攝取して樂しむと云ふ方面に特徴づけられて居る。勿論「目を樂しませる」と云ふても樂しむのは心であるから矢張心を樂しませる事に成るのであるが心を樂しましむる爲には強ち視覺のみに依らねばならぬと云ふ事はない。聽覺に依ても觸覺によつても精神の慰安を得らるゝものである。換言すると西洋庭園は色彩と云ふ事が本位に成て居るが日本庭園は「感じ」と云ふ物が主と成

つて居るようである。庭の中に色彩に富んだ花壇を作つたり彫像を配置したりする事は見ても綺麗だ立派だと云ふ感を與へるが瀧やヒチクレた松を見ても綺麗だ立派だと云ふ感を與ゆる事は少い此の時に感ずる吾人の氣持ちは「感じがいゝ」と云ふ言葉でしか表はせない。これには單に視覺のみでなく聽覺や觸覺が大分手傳つて居る、卽ち瀧を見て氣持のよいのは其の容姿よりも音とか冷かいとか云ふ方面からの感じが大部分である。

日本國有の庭園はこの方面に大なる特徴を以て居る從つて一寸覗いた位では眞の庭の價値の解からぬものが多い、卽ち觀賞とか鑑賞等と云ふ如き意味の徑路をたどつて初めて眞價を見出し得るのである。この邊は我々が佛像とか古畫等と云ふ美術品を觀る時と同樣な感じがする、卽ち日本庭園は藝術味を帶びて居る事に於て殆んど世界に類の無い發達を示して居る。此頃庭園に實用を加味した所謂實用主義の庭園等と云ふ事が云はるゝ樣になつたが、あれは確に日本庭園の墮落であつて庭園其れ自身としては何等の價値はない。尤も建築でも長屋や借家建築の樣な殆んど藝術を無視した實用本位の建築物が最も多く建てられねばならぬと云ふ狀態にある今日だから、庭園も大いに實用向のものを作らねばならぬと云ふ事は勿論必要であらう。

日本庭園が如斯く印象的、精神的な點に特徴を有つて居るから成るべく自然に近づこうとする、大自然の氣分を表はそうとする。譬へ一木一石と雖も自然に逆ふ如き手法は排斥する。從つて人工美より寧ろ自然美を貴んで居る。この事は庭園のあらゆる方面に表はれて居る。例へば石燈籠の如き如何にプロポーションがよく、構造がよくとも錆びと云ふものがなければ一文の値打にも成らぬこれが西洋の庭であつて見れば彫像の如き飾鉢の如き立派な色彩と感じのいゝ釣合とを見せて居りさえすれば新しい古いは庭に於て重大な意味をなさぬ。これ全く庭の性質が根本から異るからである。

西洋の庭が形式とか人工美とかに重きを置いて進んできた間に日本の庭は形式を離れ自然美に活

きんとして發達して來た結果兩者にかくも著しい差異を生じた譯である。然らば支那や朝鮮の庭は如何と云ふに支那に於ても矢張日本と似た造庭の手法が行はれて居た、否寧ろ日本の庭は支那に學ぶところが多かつた。然し此の兩者の間には又徴しい差異がある。これは全く双方の國の國民性が異るのと氣候風土の異るのに起因すると云はれる日本人は物を消化する能力が強いから譬へ印度又は支那方面の造庭法を學んだとは云へ其の作品の上には全く消化されて日本獨特のものとして表はれて居る。特に異國人の手で庭を作つた事がなく全く邦人の手によつて成つた爲に工匠等と云ふて他國人を雇入れて造らせた建築や彫刻の方面に比較すると一層他國の影響を其儘受けて居るものは少ない。

今迄述べた自然的象徴的な庭の特徴は謂はゞ東洋の造庭手法とも云ひ得るもので西洋でも十八世紀の末、時恰もルチーサンスの末期に當り、ロココ時代に於ける極端な技巧に倦いた頃に此の手法が大いに歡迎されて爲めに彼地の造庭法にも一大變化を與へた。

當時東洋殊に支那の庭園を歐洲に紹介したのは彼のウヰリアム、チヤンバー、マリアント子ツトウヰリアム、テンプル等であつてチヤンバーはロンドンのキューガーテンを設計しアント子ツトは英支折衷園を佛國のツリアンノン苑に設計した。

又ウヰリアム、テンプルはベトフォドがハートフォルドセアに作つたムーアパークを以て嘗て見た庭園中の優秀なものであると賞揚したあとで次の様な言葉を附言して居る「併し他の方式で又よき庭園がある、それは支那式の庭園である。歐洲式の整形なのに反して支那式のものは不整形である、然し全体としては却て整形なるもの以上に美觀を呈して居る云々」と。斯の如くにして英國では十八世紀の末葉大陸にあつては十九世紀に成つて遂に東洋風の自然式造庭の手法が到るところに流行して歐洲の造庭界を風靡する有樣となつた。

これを彼國ではランドスケープ、ガーテン、(Landscape garden) と呼んで在來のフォーマルガーデン (Farmal garden) と區別した。

從つて今日では日本に洋風の造庭術が這入つて來て我國の造庭法に大なる影響を及ぼして居ると同じく一方西洋にも日本、支那の造庭術が大いに勢を彼國の作風を變化させた譯である。

爲に世界の造庭手法は殆んど同じ方向にのみ似寄つた傾向を持つと云ふ事に成つた。

今日我國の公園等に見る造庭法は日本固有の手法でなく全くこの世界的共通の造庭手法である。

尙此の外にも我國造庭術の特徴として擧ぐべき事は澤山あるが、次の三つは是非見逃してならぬ事であらう。

一　造庭に縮景法を用ひた事
二　造庭に借景法を用ひた事
三　造庭に意味をつけた事

これ等に就ては改めて今少しく述べて見よう。

（續　く）

考古學的遺物遺跡として、近畿地方で豫期し得可き最も古いものは何であるか。かの人類と類人猿との『リンク』ともいふべき『ピテカントロプス、エレクツス』の樣なものゝ遺物は、世界中たゞジヤヴアの島丈けで發見せられたに過ぎないのであるし、氣候や何かの條件から考へても、日本に又た近畿地方にこんなものを豫期することは固より不可能と云つて宜しい。然らば其次に古い原石器時代次に舊石器時代の遺跡遺物はどうであるか。是は歐洲とは弘く存在し、印度埃及にもあることであり、人類が當時から日本群島（今の狀態とは餘程異つてゐるであらうが）に棲息してゐたことも決して不可能でないから、此時代の遺物と豫期することは必しも無理ではない（遺物遺跡から見た上代の近畿地方）



「都市」

將來の『市加古市』（7）

ウオルター・デイ・ムウデイ著
Z Y 生譯

第五章　如何に都市計劃をはじむ可きか（つゞき）

げに都市計畫を市政の一部門として進むる運動も、若しも諸都市がチヤールス・エイチ・ウエイカーの如き人の指導を受くる道さへつけば成功し得ると思ふ。ウエイカーの如き公共的精神に勇敢な人や經驗と訓練ある都市計劃事業の專門家等は決して市廳の論理から產出せらるゝものでない。人類の福祉のための大事業は、公共的精神ある市民等の心情と精神によつて養育せられ、且つ養育の中に創められ續いて行かねばならぬ。民衆の幸福を圖る事業は、靈感的な博愛的なものである。帝國の命令などは何等の力もない國々では、いつでも左樣なのである。もつとも專政國の人民にとつては少くも都市計劃事業を進捗させるに足るしるしとはならうが、我國の如き、例へて見れば、

大樹林下の下生の迷路にも似たる事件、煩しい御役所風の虚禮や勢力爭ひのために起される失望や情のための事業の遲延にも耐え、都市計畫委員會は一市をより良くするための公共的精神と民衆の代理者である—勇猛に漸進的に確固として立つて居らねばならぬのである。

都市計畫局の選擇する都市計劃委員會が、根本に必要であるといふことは、非常な改善を熟思して居る殆んど凡ての都市に於て、市當局者が之の目的を達する爲に—例へば公債發行之の他—實業協會や之の他の半公共的奉仕者の團躰の協力を得ることが、常に必要になつて居ることでわかる。以上の議論や理由は單に理論的探究の結果ではないのである。市に關する事象に接觸した上に立脚し多年の冷靜な經驗の結果であり、米國大都市に於ける都市計畫に含まるゝ要素の凡てより骨折りて集めた材料に基いてゐるのである。

此議論の目的は米國に於ける都市計畫事業が、市會並に計畫局の助言者として活動する半公共的團躰によつて養はるゝが、最も良く仕事が出來ることを示さんとするに在る。計畫委員會を市政との交渉から自由にして置くならば、兩者の關係をつけることより生じ易い、あらゆる類の之の濫用を防止することが出來、有力な專門的見地から望ましいことがあるときは市當局者の援助と奬勵とを與へ得る地位にあることが出來る。だが法令の容す限り寬き心をもつて都市計畫事業に特權を與へやうとする市當局の好意を貶すものではない。市加古都市計畫委員會は、市から法律に相等しい寬大なる財政上の援助を受けてゐる。併しかう言ふ風にして金を得たが、之れも專門家の專門事業にのみ用ひたので（市加古都市計畫を創め振興させるために費した總額の三分の一で）、後の凡ては私人の財源から補充したものである。若しも法律の制限の下に造られてある樣な、特權によつてのみ援助せられて居るのであるならば、市加古市都市計畫事業は決して創められなかつたであらう。

『如何にして都市計畫事業を始むべきか』てふ題目を論理的に結ぶために第四の點即ち最後の階段—都市計畫的努力の永續—に就て今考へやう。

寄附——これが右の答である。

都市を（之れに不斷に群れ集り來る幾百萬の民衆のために）、更に住み心地良き居所たらしむることに增して　更に顯著な人道的努力があらうか。仁慈なる人々は本質的にあらゆる類の人道的の計畫を寄附する。世界的の事業はかくの如き寄附によつて進歩せしめられる。都市計畫事業は凡ての博愛的運動の根底的要素である、都市計畫事業なくしては、都市狀態を更に良好ならしめんとする努力も、市と市民の生長に對して適當に組織し、十分に決定した計畫の保證を伴つて始めて達し得る如き、成功の高い地點に達することは出來ない我市民の健康を安全ならしむることは、卽ち國民の最大の資產を安全ならしむる道である。此大人道的目的のために現に在る寄附中には、ラッセルセェーヂ寄贈金、ロックフェラー基金、カーネギー基金、之の他無數の基金が含まれてゐる。どうして都市計劃事業が寄附でなからう。

百萬弗の四分の三の寄贈的投資の利子をもつて大都市の都市計畫事業を年々支持するに足る十分の基金が得られる。二萬五千から五萬の人口の都市では恐らく十萬弗の投資で之の事業を支へることが出來る。かく人口に比例して資金も增大するこの大さがどうあらうとも、各都市の大さがどうあらうと、各都市は之の地方の寄附に必要である十分の財力ある愛博家を與へるに相違ない。

若し都市計畫事業の歷史が書かるゝ場合には名譽は三つの本源に—計畫開始の際財政的に後援した民衆的精神の人と、之れを創造した專門家と、之れを發展せしめた振興者—與へてあるべきである。事業の最後の實現を確實にした寄附者の名譽表彰館の中には空虛な壁龕もあるのである。

第六章　鎧ふに必要の諸具

各都市は之の地理上の位置、住民の性質等、之の範圍は多樣で容量に變化があつても、兎に角各市の特有の要素を有てゐる。之れ等が或者は複雜であり或者は單純であるが、併し各都市は己を保護し得るに足る要素に適する獨自の問題をもつて

居る。成功ある都市計畫のプログラム中にはそれ等を中和し消化してあらねばならぬ。事業を成功せしむるため各要素を裝置して鎧はしめ力を發揮せしむることが、都市計畫事業振興者の第一の任務である。調和を通して進展することが、彼の不斷の目的でなくてはならぬ。自分は他の處で公言した都市計畫事業振興者は、文明の販賣人であると彼は多くの事物の販賣人であるが、第一に調和てふものゝ販賣人である。

地方的精神、私人又は團躰的貪欲、宗教、傳說階級差別、政治的黨派、勞働組合、在住外人、改革者、社會的奉仕者、公民、商業、社會的機關、婦人參政權運動者、國民的偏見、無頓着、專門的偏執、之れ等の凡ては現に市の生活に於てそれぞれの役目を演じて居るのである。之れ等の混成し調和あゝ統一を造らねばならぬ。一個の市にて遭遇せねばならぬ處のものは、之の要素の多樣に於て著名なる市加古市によつて證明せられ得る。黨派的偏見と私の利己主義とが、擴大するとを阻止するために戰はねばならぬ。北西、南の方面は互に川や鐵道や工場區域などが自然の境界線となり相互間の街衢の連絡なく、地理的に距離して居る而して夫等の各部分の利益はワシントン、フイラデルフイヤ、バルチモア間が利害相異るのと似て居る。時に多くの市としての宣傳が必要ではあるが、三區域は正に全市に影響する如き政治上又は處置上の問題に就ては調和す可き筈のものであるしかも地方的に見れば三者は他人であり別派なのである。若し都市計畫の事業の差別が、公衆改善の配置に見わる樣なことがあれば、三區域は自己保存の法則から何も己を主張する樣なことになる若し公衆改善事業が全市から投資を受くるのであるならば、全ての民衆の贊成を經ねばならぬ。であるから他を排して市の一部分丈けに便利を與へる譯に行かぬ。地方主義は重要な要素であるからこれを研究しこれに當り手際好く取扱つて行かねばならぬ。

市には更に多種類の機關—商業、公民的、兄弟的、社會的、宗教的等—がある、市加古市にあつては、世界の何の市にあるよりもこれが多いので

ある。市の宗教的生活は教理と信仰の多様に於てその活動に重要な役目を演じてゐる。市加古市は又婦人參政權論者があつて、これ又都市計畫事業の太釜の中の他の成分である。又市加古市は西部地方の政治的公設市場である。或團躰他の團躰の誇りがな政治的徒黨がある。徒黨中に徒黨があつてどこで停止するか分らぬ程である。又課稅權を有する廿二箇の地方統治團躰がある。相互の管轄區域が重り合ひ、之の權力亦市から全く獨立して居る。自治市の團躰と相等しい團躰である。

市加古市は廿七箇の分離せる別派の鐵道幹線を有して居る。市の商業大動脈の卅五パーセントは鐵道所有者の占むる處となつて居る。市の周圍は三方、鐵路、轉轍路、終點で椽とられ他の方が湖で切り去られてゐる有樣である。市が鐵道團躰を良く取扱はずしては、公衆の改善、殊に市街の改善の處理をつくることは殆んど出來ない。市加古市の計畫案に從つて着手した第一の市街の擴張には四箇の統治團躰、十二の著名な道鐵團躰の協力があつた。

市加古市三百萬の人口中殆んど八分の五は外國生若くは直接に外國に兩親を有する者である。卅七の國民が市民中にある。千九百十年の市勢調査に從へば、廿六萬五千九百四十八人のアウストラリヤ、ハンガリー人がある。ヴキンナ、ヴダペスト以外には、アウストラリヤ・ハンガリー國にてこれ以上の人口を有して居る市はないのである。

又五十萬千八百卅三人の獨逸人が居住して居るこれハンブルグの如き第二流の都市の人口の半數以上、ベルリンの如き首都の人口の七分の一に相當して居る。

スウエデン人は全國の首都たるストックホルムの人口の四分の一居住して居る。又七萬五千の伊太利人が居る。これ伊國最大の都市たるナポリの總人口の八分の一に等しい。

ノルウエー人は四萬七千二百卅五人居住して全國首都クリスチヤナの人口の五分の一に當つてゐる。アイルランド人は廿萬四千八百廿一人で、全國首都たるダブリン市人口の半數を代表する有樣である。

二萬人のポーランド人、十八萬四千七百五十七人の露國人、二萬人の丁抹人、六萬五千人の英國人、七萬人の佛國人、他の外人の凡てを加へ千九百十年には百六十九萬三千九百十八人の數に上つてゐる。實に市加古市は市民の鎔解坩堝であり、文明の大釜である。計畫委員會はそれ等の諸要素を化合する坩堝である。他の米國諸都市に於ける諸々の要素を鎔ふことを右の統計に示された市加古のそれに比すれば殆ど□ーンテニスの遊戲位のものとしか考られぬ。とはいへど自分は右の計算に於て公言する。市民中、消化に最も手硬い連中は、所謂凡ての土着の米國市民であると。自分はあらゆる時に臨で坩堝に入れる機會をとらへ樣と思つてゐる。殆ど土着米國人の都市は偏見、傳統階級差別にひたされて居る。さういふ類の都市に眞實の進歩を求むることは——『塀の中の蛙が毎回一呎飛び三呎退く時は、塀を超す迄に要する時間幾何か』てふ或古い數學問題に似て居る。それ程にかゝる惡精神が支配して居るのである。

縱し市加古市が根元的に他の米國の何の都市よりも、一層復雜なものに惱まされて居つても之れは表面的な假裝的のものであつて、ハンデイキャップでない。市加古が一方に食過をしても他方で之れを公民的精神をもつて消化してしまふ。『やつて見せやう』といふのが、世界の注意を引く市加古市の精神である。國民の希望は傳統に濕り階級的精神の蔓る樣な右の如き市にはない。全然コスモポリタン的な團躰に立脚し、授けられて永遠に殘るであらう。

殆ど凡ての失敗はその處置を誤ることに原因する、或者は全然不注意のために或者は無知のために失敗する。無知は赦す可らざる消極であつて、唯その中の小部分のみが無經驗から生じて居る。凡ての人はその正しい道を決定するに彼自身の類推と觀察の能力を用ひ或は他の能力を用ひ得るこれ薄氷を踏む危險の業である。併し大抵の人が假定に基いて行爲するが、そも〳〵その事が煩の生ずるもとなのである。何故に人々は自ら知らない點に就て他人に相談をしないのであるか。これ己を亡す自惚のためであるか。彼等は豫備、人事、

人情に就て意見を交換することもなしに正しく歩まうとする。歩み入るは容易だが、歩み出すは困難である。歸路は急速な滑走が長い急激な墜落かである。目標に面し乍らドット倒れる、愚物への報償はこれ位のものである。『賢き人が踏むを危ぶむ處を愚人は走り入る』といふ言葉は、民衆の幸福に關し市當局者と關係する個人にとりても市民の團躰にとりても、無思慮な接近の他のどの樣な羈よりも一層眞實なものである。根本は團集を敎育し市當局者をして道に沿ふて歩ませしむるにある。重要な點は如何にと言ふことにある。この如何とこふことが、多くの都市計畫の努力の海底の破船たるものである。

都市計畫の振興者は凡ての事物が協力して働らき見て善い樣に按排することにある。與へられた目標へ安全に進路を操縱するが彼の仕事である。濃霧中では、常識と良き判斷てふ號笛を兩岸に鳴らして、海峽の目じるしをすることによつて衝突を避けることが出來る。凡ての要素を用ひることによつて、歩む道を容易ならしめねばならぬ。それは或物を排折することを許さぬバリサイと組んでサドカイを排折すべきでない。凡ての要素を集合せしめ共に立たしむべきである。振興の戰線を張る早い頃には、あらゆる類の人民を混成する價値を學ぶ可きである。彼は彼等の見地を發見するであらう。彼は彼等の反對を除き去り、持前を飾ひ分け、彼等の動機を分解する。外交手腕を恭敬と、說服を以て凡てを同一の方向に搖らしめるのである。

大抵の人は、他人と會つて懇意になることを努めぬために、仕事を失敗してしまふ。さういふことが何等價値のないものゝ樣に思ふ。己惚、無知、無經驗、自己滿足が彼を孤立せしめ赤手空拳にしてしまふ。他人は皆火星やアラスカに住で居る交涉なき人間と化し、仝じ土俵に居ることは出來ぬ樣になる。

自分は曾て市加古市の商業販路擴張の目的をもつて、南米諸國に旅行した四十名の實業家の遠征團の指導者となつたことがあつた。南米は急速に本來の富力を發揮しつゝあつた。その自然界の材

源は新しい El Dorados（スペインの米國遠征隊の夢想した黄金國）となりつゝあつて、商業の巨大な不斷の發達は、大に紐育を陵駕してゐた、自分等がこのことを發見したのは、南北戰爭に續いて來た狀態に源因する。荒廢し傷けられ、殆ど死んだ南米は、何處にかないものかと信用を求めて居た。時恰も商業開拓者として奮鬪して居た市加古市は、自己の立場を確實にするために、手一杯に働いて居た貿易の延長を切望して居た。併し必要な用心をして求めて居た市加古は南米の商人が求めて居た信用を、長い間擴張することが出來なかつた。紐育の商人は南米商人の古い手形を承認して銀行で割引して、彼等との商業上の關係をたてゝ居た。減殺するに困難な程の協調が發達して居た。我等は市加古が今彼等にとりて、論理に明な市場であることを確信せしむるために、それ等のことを論じた。議論の秤は我等に有利であつた。威嚴を墮さずしかも相手を不興ならしめぬ樣にして、目的を進捗せしむるは固い胡桃を割る樣に困難である。然し第二第三の都市を訪問して案ずるより生むが容易であることを發見した。こゝでは胡桃割たる我等が親切に受けられた我等が我等の使命を說明した後に、白髮の老たる商人が立つて、好意と佳い趣味と撰擇せられた常識をもつて言つた。『紳士よなせと言つてお互にもつと取引關係を多くしない譯は、互に知らぬからです』と。彼の言は正鵠を得て居る。我等全團躰は彼が言葉を終る前に、彼の意見を實現した。代表者を屢々送れば南方との取引關係を濃密にすることを試む可きであるといふのである。

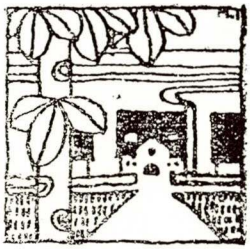
『お互にもつと取引關係を多くしない譯は互に知らぬからです』と！。何たる刺激ある言ぞ。人と事物との關係ある處に適用す可く如何に眞實であるかよ。所謂改革者なる者を注意せよ。彼は何をしとげるか。眞に僅のものである。何故か。彼が背後で働くからである。改革者は決して革改をしない。何故なれば彼は唯一面—彼等自身—を見る丈けであるからである。彼は唯一個の意見—單個の見地—を有するのみである。彼は神聖な個人の濃い大氣の中で孤立をして居る。その幻影は曲り偏見に滿ちて居る。

問題の全方面を見ることが、それを解決する唯一の方法である。『學ばされ』てふことが改革者のときの聲である。彼は嚴責し激賞し狂烈になり解剖し、猛り要求し威嚇する—が待て。諸君は彼が辯論することを聞いたことがあるか。否。彼は主觀に忙しく高慢である。改革者の或類の者は一般の公のプログラムを同一列に搖らしむるに困難である。

併し凡てを鎔ふはしむる經過の背後には、民衆がある。全民衆—有力な實業の若干でなく、或人々の群でなく小徒黨でなく宗教的要素でもない—全市が之の要素の凡てと共に、同一列の方向に搖れねばならぬ。彼は何が惡いか、民衆が彼の計畫に反對するは何故かを學ぶ。誤れる考へを正し、誤り導かるゝ市民を正道に復歸せしめ、頑固な者を說得し、誤想を鑄直すのである。反對者に友情を懷かせるため招いて相違點を論ずる。公職者に會見し、刊行物の援助を求める。夏でも冬でも夜でも晝でも計畫を告ぐるために、到る處に行く。彼は招待をまたずに進んで行く。請演し語り考へ書く、一言にして言へば彼の小路に一切の要素をならべしめるための事業を進歩せしめんと教育ある熱心をもつて働くのである。

調和の販賣人たる計劃委員會は信條も教理も主義も黨派も偏見も信仰もない。之れ等は凡てシカゴでもボストンでも、ミネアポリスでもニューオルレアンスでもシヤートルでもアトランタでもダルラスでも、凡て米國の一切の都市で之れ等は凡てを中和せせねばならぬのである。（第六章終）

今日ふりし雪にきほひてわが宿の
冬木の梅は咲きにけり



〔談叢〕

歐米視察旅行談

會員 工學士 藤井厚二

(一)

私の海外旅行致しましたのは特別の研究目的を有つてではなく、唯諸外國の有様は如何に我國と異なるかを目のあたり見たいとゆふ希望で出發致しましたのであります、旅中に見聞致しました事實の中殊に私の感興をそゝつたこと、參りました國々の大体觀又は第一印象などを、斷片的に御話して見やうと思ひます。

まづ最初に旅行の順序から御話いたしますれば横濱を出帆致しましたのは昨年の十一月八日・桑港へ到着いたしましたのが同月二十四日、それから紐育へ直行致しまして十二月の一日に同市に着いて、郊外のモントクレヤー（市の下町に出るのに約五十分を要する近郊）の米國人の家に泊つて十二月と本年一月一杯を紐育及び其附近の見物に費しました。二月にはミスシッピー河以東の諸市を見物する目的で、レーキウッド、アトランチックシチー、フヰラデルフヰヤ、ワシントン、ジヤ

クソリンビル等の諸市を經て、フロリダに行き、それからニウオレアンス市からミスシッピー河に沿ふて上り、セントルイス市を經て、シカゴに出て、デイロイド、バッハローからボストン市を見物して、紐育に歸りました。

三月の八日に紐育を出立して英國に向つて、同月十六日にプリマウス港に上陸して、直ちに倫敦へ參りました。四月一杯迄を主に倫敦に滯在して英國内を見物し、五六の兩月は歐洲大陸の諸國の見物に過しました。佛蘭西の巴里、馬耳塞、モナコから、伊太利のゼノア、ローマ、チープル、フローレンス、ベニス、ミラン等を經て、瑞西に入つて山中の雄大な景色を賞しまして、バーゼルからライン河畔を下つて、白耳義に出て、ブラッセル、ゲント、ルージ、オステンド、等の各市及其附近の戰場を見て、それから佛蘭西との國境附近の今後の大戰の激戰地を通過して、再び巴里から敦倫に歸つて參りました。

七月三日リバープールを出帆しまして、米國に向ひ、紐育上陸後直ちに、桑港に直行して、七月十九日に着きました。

それから友人堀越君とロスアンゼルス市ヨセミテの絶景シャトル市等を見物しました。同月三十日シャトル市を去つて八月十四日に横濱に無事歸國致しました。

（二）

行程約十ケ月、飛脚旅行に過ぎないので、顧れば、まるで夢の樣では御座ゐますが國々に就いて思ひ出したことを申述べますれば。

北米合衆國に就いて第一に感じましたことは、なにから何迄行き届いた、非常な便利な國で御座ゐます。併し夫と同時に寢て居て食をとらうと云ふ風な具合の生活上に必要以上の便利なことに考を廻らして居るといふ點があるやうに思ひます。

次に兼て彼國は物價が高いと聞いて居りましたが、高い事は成程高い樣ですが併し近來非常に騰貴した我國と比較して見ますと、そんなに高いことはない樣に思ひます。殊に彼の國の高價のものゝ大部分は實質が勝れて居て即ち値打あるもので

すが、我國ではそれに比較して、實質が非常に劣つて居りますから結局我國の方が高價であると思はれるものが澤山あります。建築の小住宅にしましても、左程驚く程高い事はない樣です。一例として紐育郊外のリッチモンドヒル（モントクレヤーと同じ樣な紐育郊外の立派な住宅地）と申す所で、私の友人が二階建の木造家屋を買ひ入れました。それは私の紐育へ參ります二週間前で地所付七千五百弗と云ふ小價格でした。（三四年前なれば四千三百弗位）其の大さは。

建物間口三間半、奥行九間建坪約三十坪地所約八十坪、一階の間取りは米國式のベランダがあり夫から玄關、左手が客間、其奥が食堂、玄關の奥が階段で二階へ上る樣になつてをり、其奥が臺所で食堂と連絡し冷藏庫もあり一切の設備が整つて居ります。階段の下から地下室へ通じこゝに熱氣暖房設備があり、又物置になつてをります。

二階は正面に夫婦の寢室、其次が子供の寢室夫れから階段のつき當りの奥に夫人の居間があり其外に便所浴室の設けがあります。

此の例は米國の小住宅の普通の一例で、我國の住宅と比べてみたら決して高いとは申されぬ事と思ひます。

次ぎにアパートメントハウスですが、これは市の中心に近い便利な所で、設備も非常に完備して居るだけ家賃が高い樣であります、紐育の五十七丁目と申せば先づ中心地に最も近い住宅地でありますが、約六坪位の部屋二つに浴室便所と押入付きで、建物の十四階目に在つて、一年一千二百弗の家賃でした。高い事は先づ驚かされるのですが便利なことは此上もないのであります。

家庭の樣子について觀察いたして見ますと、北米合衆國は色々の國民が集つて出來た國であるだけ家庭に夫々其ものゝ國の風をあらはしてゐるのは誠に面白く感じました。同じ夫人でも獨逸系の主婦は特に巧に生活と經濟とを案配してゐるのを認めました。特に廢物利用に就いては、英國佛國等から移住して來た人々の氣の注かぬ所に注意してゐるやうでした。

次に英吉利に就いて感じましたことを申せば、衣食足つて禮節を知るとは全く此の國の事であると思ひました。ストライキの實際を見ても、交通機關の混雜する場合を見ても、社會的の訓練は中々行き屆いて居ります。政府と國民との間でも、我國とは大分趣が異になつてゐて、飽く迄沈着で愼重であることが認められます。戰後の國力回復にも政府も國民も一致して勉めて居りまして、其の爲に苦痛はあつても國民はこれを耐え忍んで居ります。富豪に媚びた政治や、上景氣には有頂天になつて、不景氣が來襲すれば政府に泣きつき、國民の納めた金で救助を仰ぐ樣なことはありません。本年の初春に政府が戰前の爲替相場を維持して居たのを放棄して平時の狀態に移らむとした時爲替相場が可なりに下りました、英貨一磅は米貨三弗二十セント位迄に下りました。其の際、貿易業者は非常の苦痛だつたらうと思はれましたが、皆よく我慢して難局に耐ゑやがて、相場は、次第に回復に向つたのでありました。私の參りました時分も砂糖が少ないといふので、茶にはサッカリンを用ひた喫茶店宿屋が澤山ありました。國民が各自に自省して政府の方針に從つて國力の回復に努力して居るので着々實力も出來て居る樣です。

之に較べて佛國では、戰爭の打擊も多いのに係はらず英國程回復につとめて居ない樣に感じました。國運は確かに下り阪であると思ひます。併然藝術にかけては、世界に最もすぐれて居ります。殊に東洋の藝術の研究が非常に盛んで、よくこれを咀嚼消化して居るのには敬服の至であります佛蘭西の風俗は豫て外人當てこみの惡い方面の話をのみ聞いてをりましたが、行つて見ると誠に優雅な點があり、實際には必しも惡い方面のみではない事を感じました。婦人のごとき一般に贅澤であるとされてゐますが、買物をするにしても、實質の同じものを得るにどの店が最も廉價であるかを研究して金の費ひ方に相應苦心して居ります。中流以上の娘は一人歩きもせず、青年と談話を交換する場合には、必、他の近親者が側に居ります。佛蘭西程政治、道德、藝術其の他百般の事柄に就

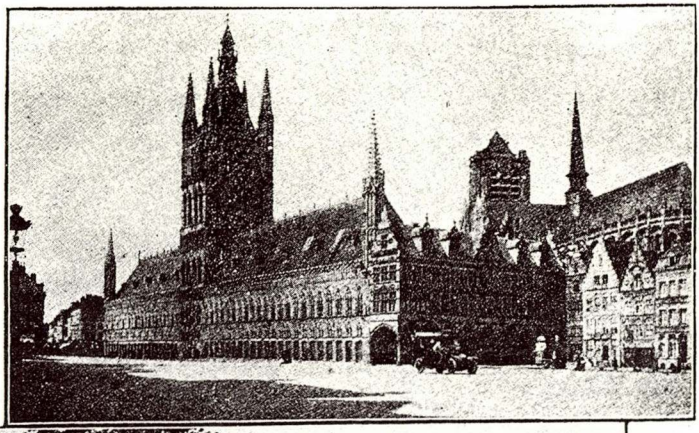
き極端の二方面がある國はないやうに思ひます。

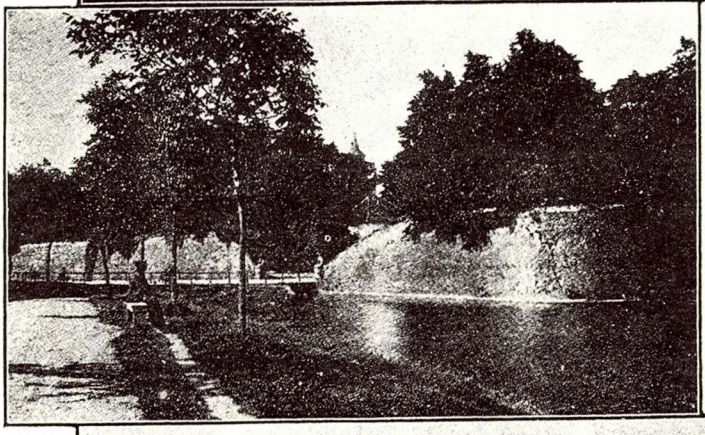
次に伊太利は建國の日が尚淺いのに其當時の活氣もなく、已に亡國の面影があります。只古代羅馬の遺跡廢墟に見るべきものが澤山あります。

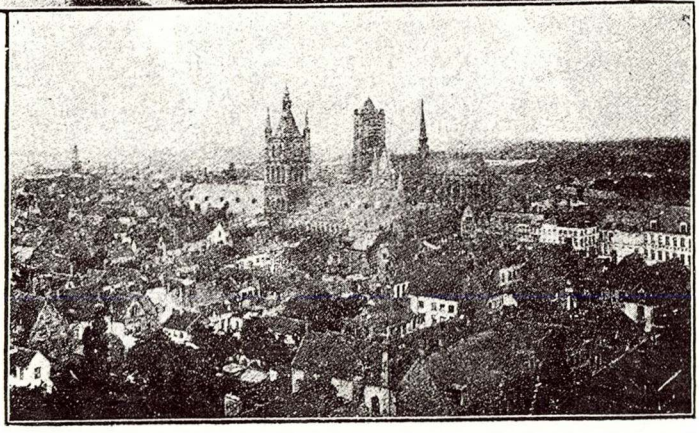
瑞西に入れば、伊太利の樣な野蠻な所もなく風景もよくすべての設備も整つて居りますが、言語は獨語佛蘭西語英語が用ひられ、一定せず國と云ふ感はまつたくありません。我國の樣に言語、風俗、習慣の他國との相違の甚しい程國とゆふ感は明かになります。

白耳義では、今度の戰爭の跡を見物いたしましたが、ブラッセル市及其附近は戰爭の初期に戰場であつただけに損害を蒙つたことも少なく回復が早い樣であります。これは主として國境から北佛の野で戰はれた爲めでありませふ。町々の樣子も整頓して、ショーウインドーには我國の九谷燒風の俗惡な陶器も見受けました。ブラッセルでは、米國からの戰場見物客が澤山入り込んでこれを當て込んだ米國むきの芝居、活動寫眞などの盛況を見ますと、これが獨逸に一度占領された都とは思はれませぬ。然し戰爭の後期に交戰地となつた地方を見れば、滿目荒寥たる有樣は御話になりません。ベルダン及イープル附近は最も甚しく今猶鬼氣人を襲ふ程の慘狀を呈して、鐵條網の殘れるあり、タンクの放棄せられたるあり、白骨さへも露出せるを見ました。イープル附近は英軍の損害殊に甚しく死傷五十萬人を越ねたとゆふ事であります。町で損害を蒙つたのはイープルが最も甚しく全滅して居ります。其程度をこそ戰前の繪ハガキと戰後の寫眞とで比較御覽を願ひます。實際に戰場を見ても、其以前を知らないと只土の堀れて草の茫々と茂つてゐるのみですから其以前の寫眞と比較して驚く樣な所もあります。佛蘭西國境から巴里に歸る間の戰線の狀況を見物いたしまして、獨逸のために同情の涙をそゝぎました。白耳義近くのリリーから巴里迄は急行列車で四時間餘りを要するにすぎませぬが、其二時間以上は戰場として使用せられた地で、獨逸側を見れば、巴里の都は、指呼の中に在つたので九份の功を一簣に缺いたわけです。

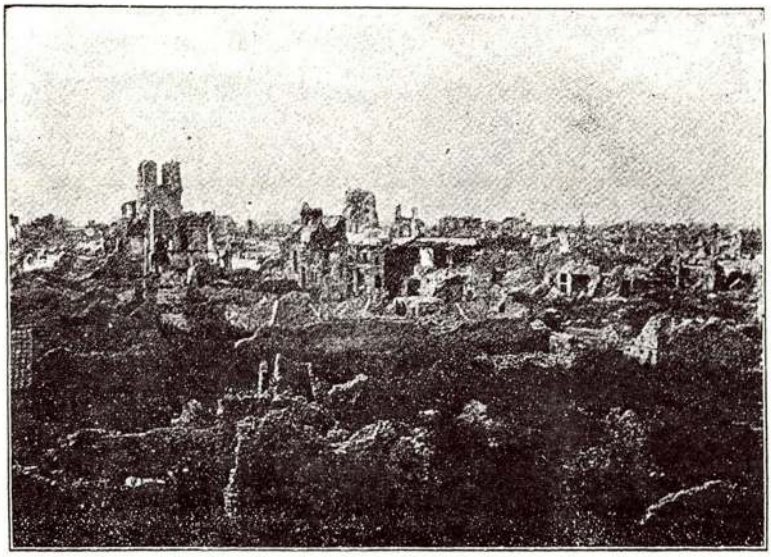
戰前の「イープル」附近



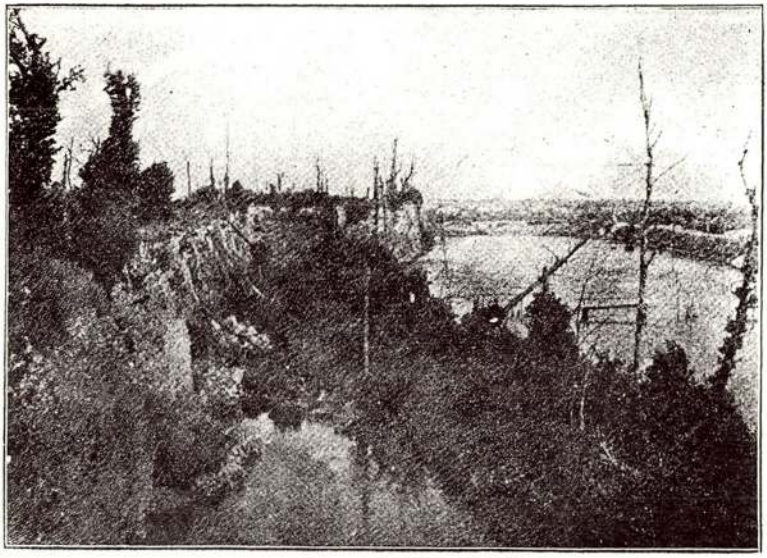




（一其）狀の廢荒近附「ルブーイ」の後戰



（二　　其）



（三）

次に我が國と比較して私の感じました事を述べますれば第一に深く感じましたのは五感に分類して其趣味の中で尤も遲れてゐるのは、聽覺であるとゆふことであります。他にも遲れて居るものもありますけれども是程甚しいものはありませぬ。嗅覺の如きは却つて香道などがあつて我が國の方が勝れて居りますが、音樂は今後我が國民の非常の訓練を要することと思ひます。伊太利の如きは既に亡國の徽を見せてゐますが、路傍に人の憐を乞ふて、マンドリンやギタを彈じてゐるものゝ内にはひとがどの音樂家が居ります。佛蘭西では、十二三の女學生に音譜の書取りをさせる學校が澤山あります。我國は文學美術等に泰西文化を輸入して以來今日迄相當な成績をあげ、殊に繪畫は諸外國に劣らぬ作品がありますのに音樂の方面には修養に足りないのは遺憾の至りです。

次に遲れてゐるのは彫刻であります。尤もこれは我國古代の木彫には優秀なものがあつて、諸外國より優れてをりますが、近代作品は貧弱です。米國の如き建國の新らしい美術のない國の作品より劣つてゐる樣に思ひます。

繪畫は在來の日本畫は別問題として考へても洋畫の眞髓を得たと思はれるのは我が國には少ない樣です。前述のやうに所謂洋畫は英米伊等の諸國に比して、相當のものがあります。たゞ佛蘭西が優秀な作家數人あることによつて我國よりは優れて居るのみです。殊に私の愉快に感じましたのは我國の佛畫の非常に立派なことです。佛蘭西や伊太利の名畫と稱せられるものを見ましたが、大底は神話或は宗教より題材を取つたもので、それと佛畫とを比較して見ますれば、佛畫程崇高の念も起りませぬし中には隨分殺伐で不愉快な畫がありました。

最後に建築に關することについて申せば、我國でも近來木材は次第に減少して居りますが、米國では一層著しく減じて來たことは明瞭であります最初は松杉等太平洋岸に澤山あつて、製材の工場も其附近に設けられて居たものが、近來は材料が

殆んどなくなつたので、其工場は今迄顧みなかつた樅や太西洋岸の松杉の輸送を受けてをります。然し太平洋岸でも、もとは松杉が豊富にありましたが、此度の大戰の影響をうけて、木船の急造やら木造の建築の勃興やら、日本への輸出やらで、大分亂伐の風があつて、我國のやうに殖林事業は行き屆いてをりませぬから、やがて木材の窮する時代は目前に迫つて居る樣に見うけられます。

建築の設備については、米國の近代建築は他の諸國よりも餘程完備して居ますが、英國でも中々眞面目に研究されて居ります。水道下水についても、暖房通風についても、隨分と細微な點に迄注意を拂ひ、議論しつゝあるのを見るとゆふ有樣であります、米國に於ては、隨分見掛だけのもの多く、裏へまわると案外な事を發見します。英國の住宅では外觀は粗末ですが、内部は、相應の裝飾を施美しいものが多いやうであります。獨逸の建築は、外觀は私はあまり感心致しませんでしたが内部裝飾には見るべきものが頗る多く、獨逸獨特の風の勃興したことは感服致しました。端西のチユウリツヒを過ぎる時分に特に私の目を引いたものは、此次の大戰の始まる一年前に完成した獨逸の某建築家設計の建物の内部でありました。

色彩についても各國夫々特色のつるのは爭はれない處であります。米國が兎角成金振を發揮してケバ〳〵しい、金ピカを喜ぶのに比して英佛の地味でしかも優雅な點は面白い對照であります。特に佛蘭西では赤と黒とを使つて、金と紺或は紫とを配した面白い室内裝飾を見受けました。又劇場等に於ける意匠の工夫も餘程研究を積んで我が國でみられないやうな氣持ちのよい色彩の配合を見ることが出來ました。

扨て我國今日の建築の有樣を見ますと、我國は歐米諸國に比しては氣候風土が順良であると云ひますが、建築上には色々の問題が起つて面倒な樣に思ひます。氣候が四季の變化をする爲に、衣服はこれに應じて多くの準備をする必要が生じます家もこれと同じ樣に色々の設備を要します。これは生活の單純といふ事を根本的に工夫する事の出來ぬ一大原因であると思ひます。それですから、日本をはなれて初めて布哇に上陸しました時に、住宅の建築中なのを見て非常に簡單なのに驚きました。この島は四季を通じて、殆んど同じやうな暑い氣候で、冬の設備を全然要しない丈、彼等の

生活は單純でありまして、建築も我國の樣に冬の事を考へる必要がなくなります。北米の建築では反對に冬季に對する完全な設備を整へればよく、則ち夏季に對する工夫を要しないのでありますそこで屋根裏迄も寢室に利用して差支ないのでありますが、日本でありましたなら、此種の利用は到底夏季の場合を考へたら實行出來ぬ事になります又日本と同樣に四季の變化をする國々でも日本の樣に濕度の一年間に於る變化の甚しい國はないと思ひます。米國では、所謂大陸的氣候で寒暑兩樣に都合よく工夫致さねばならぬ風土でありますが日本と違つて、空氣が乾燥してゐるのでありますから、米國の住宅がよろしいからといふて直ちに之を眞似ても夫は失敗に終ります。我が國では、梅雨期とゆふ不愉快な期節後は、野は一面の水田となつて、夏季は濕度非常に高く建物は恰も湯をいれたる水盤の中にある樣なものです。秋から冬の間は案外に濕度は低いといふ、寒暑二樣の氣候以外にこんなことを考へねばならぬ爲に複雜な問題が建築上には起る譯です、其上世界に有數な地震國でありまるから、建築學は諸外國に比して最も進歩發達すべき國であらねばならぬと考へられますが、前に述べました我國の彫刻界を同じ樣に木造建築には他に類のない非常に立派なものが譯山ありながら現今建築界は振はないのは實に殘念の至りです。これは復雜な氣候風土に對する徹底的の研究理解がない爲ではありますまいかと考へます、我國に杖を曳く外國の觀光團が主として印象の美しいのを風土天然に置いてゐるのは無理もない處であると同時に、我國の旅館、ホテル、道路、街路、交通機關、さては都市町村の建築に於て不快な印象を與へられてゐるのも亦爭はれぬ處だと思ひます。從つて、短時日に我國を縱覽してゆく彼等の與ふる印象の反面は全く我が建築界にも責任がある譯ではありますまいか。してみると我々の責任はなか〳〵重大な譯でありまりして昔に優秀な木造建築を殘して呉れた建築家に對しても面目を失はぬやう、大いに努力すべき秋であります、併し此等の諸問題を深く考へて見ますと議論よりは實行で解決して行かねばならぬ事と確く信じて居ります。例へば住宅改良とゆふ問題が非常に盛に起る樣になりましたがこの問題は諸外國でも盛んな樣に見受けました、併乍我國では改良といふよりは變更とゆふ方が適當だと思はれる程度でありまして、全く根本的改革を斷行しなければならぬ場合になつて居ります。家に在つては疊の上に洋服で座し、外では住宅改良を叫ぶ樣な時代は過ぎ去つて吾々は今後其所信は一に實行によつて有効なる實績を擧げたいと思ます。（終り）

外國人の見た大阪

今西京子

先に東京で世界日曜學校大會がありました時、私は九月廿七日から初め、十月の中頃迄かけて、前後五六回も大阪市中の方々を外賓の方の案内役を勤めて廻りました。流石に彼方の人達も色々珍らしいものを見せられて驚いて居りましたが、同時に私も亦それが爲に新しい感想を得たやうに思ひます。總じて當事者の歡待振りも非常に行届いて居り、案内役に當つた市役所の方の説明振りも流石に非常に上手な正しい英語を使つて居られました。例へば、小さな事ですが、外人の爲めに小綺麗なプログラムを刷つて配つたの等も、氣の利いたやり方であり、彼方の人達も喜んでゐたやうに思はれました。

△キモノ

何にしても外人（私の伴れ立つた人達は皆米國人でありましたが）を眞先に珍らしがらせたものは、日本婦人の「キモノ」でありました。『どうお感じになりましたか』と訊ねた時には、着物の「袖」や「裾さばき」が珍らしいといふのでした。殊に赤白色々に取り交つた「ふり」が美しいさうでした。最初、婦人の帶は何としても變なものを背負つてゐるやうに思へて仕方がなかつたが、段々目狎れて來ると、反つて帶の結び方の上手下手等も解り第一模樣の美しいのに感心をするやうになつたといふ事です。

外人は、日本人の禮儀の正しい事に感心してをりました。其上に大層に寬大であると喜んでをりました。而して、思つたよりも日本は文明の國であると云ふのでしたが、私は又彼の人達のさういふ感想が意外でなりませんでした。日本を初めて

●大阪市都市計畫參考資料（其九）

(9) 郊外電車乘降人員發着荷物圖表

郊外電車乘降着荷人員圖表（半期別）

乘降人員

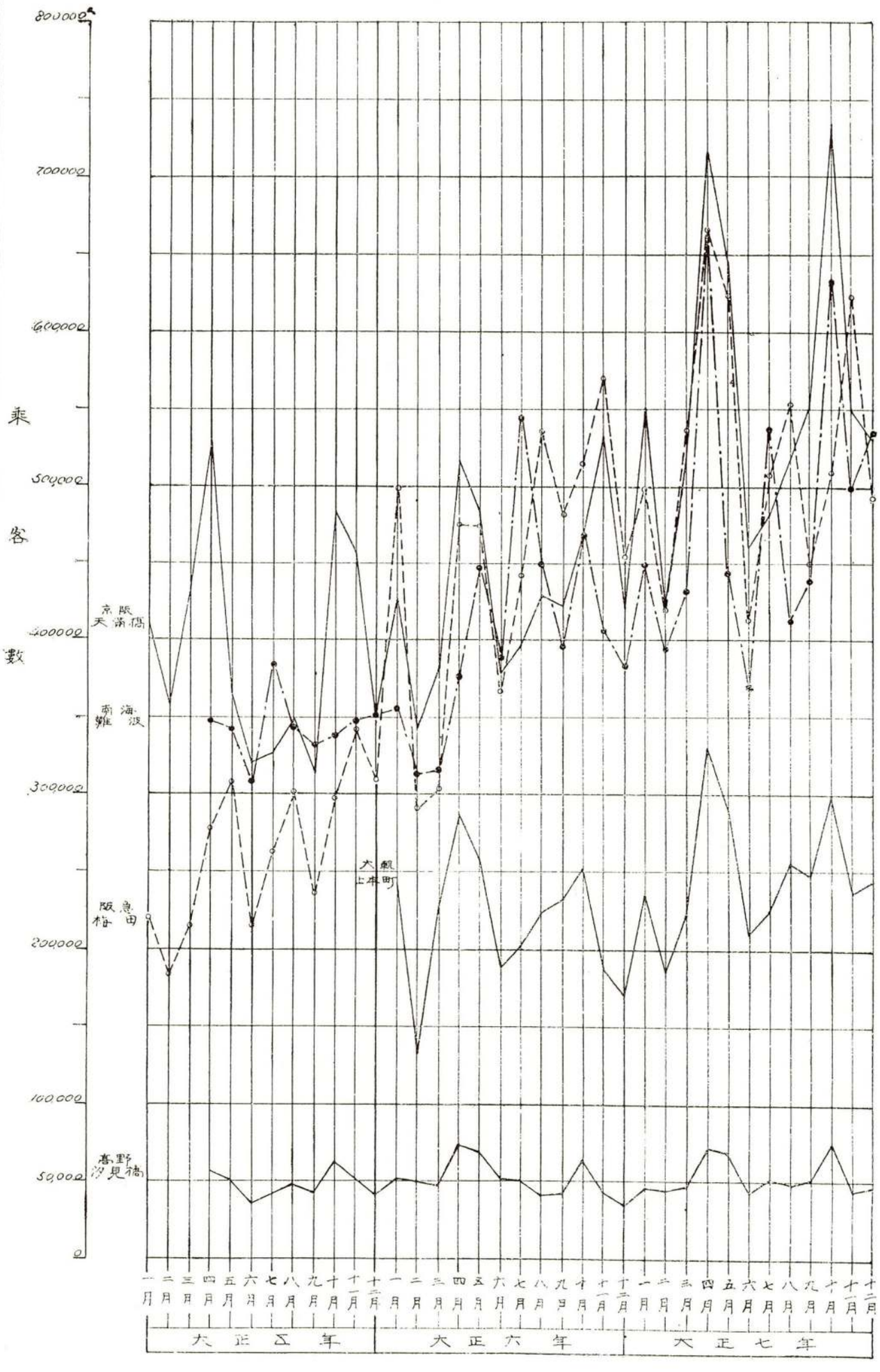
停留場	期間	乘車人員	降車人員
阪急梅田	大正五年 1-6	1598.322	
	7-12	2007.287	
	大正六年 1-6	2169.324	
	7-12	2938.957	
	大正七年 1-6	3199.876	
阪急神崎川橋	大正五年 1-6	273.059	
	6-12	309.428	
	大正六年 1-6	328.665	
	6-12	277.338	
	大正七年 1-6	337.992	318.066
阪急十三天神橋	大正五年 1-6	2202.505	
	6-12	2044.173	
	大正六年 1-6	2627.803	
	6-12	2918.753	
	大正七年 1-6	3368.715	
阪急十三難波	大正五年 1-6	2055.393	2091.030
	6-12	2022.449	2043.856
	大正六年 1-6	2698.501	2.742.069
	6-12	2534.947	2563.786
	大正七年 1-6	2865.970	2942.116
阪急上本町	大正六年 1-6	1.333.584	1.348.400
	7-12	1.269.189	1.291.483
	大正七年 1-6	1.477.161	1.477.508
	7-12	1.504.293	1.520.175
阪急梅田			

發着荷物

停留場	期間	發送噸數	到着噸數
阪急梅田	大正七年 1-6	13855	13.855
	7-12	18430	18429
阪急神崎川橋	大正五年 1-6	14.347	8544
	7-12	17624	10343
	大正六年 1-6	12639	8123
	7-12	15.315	10.135
	大正七年 1-6	13.617	7.429
阪急十三天神橋	大正五年 1-6	4674	3259
	7-12	6.641	5.226
	大正六年 1-6	7776	4736
	7-12	6557	5.973
	大正七年 1-6	7.707	7.413
阪急十三難波	大正五年 1-6	51.526	59.079
	7-12	57.708	75.859
	大正六年 1-6	62.996	75.405
	7-12	69.851	83.685
	大正七年 1-6	65.461	62238
阪急上本町	大正五年 1-6	4425	3.003
	7-12	4.910	3.404
	大正六年 1-6	5.196	3.293
	7-12	5.057	3.438
	大正七年 1-6		
阪急梅田			

備考　青線ハ乘車人員及發送荷物ヲ赤ノ線ハ降車人員及到着荷物ヲ表ス

郊外電車乘客人員圖表


800000
700000
600000
500000
400000
300000
200000
100000
50000
0
乘客數
京阪
天満橋
南海
難波
阪急
梅田
大阪
上本町
高野
沿見橋
一月 二月 三月 四月 五月 六月 七月 八月 九月 十月 十一月 十二月
大正五年
大正六年
大正七年

觀た米國人の總べてが、案外に日本といふものを間違つて考へてゐた事は何故でせうか。彼の人達は、日本の紹介者だから、餘りに日本を卑下した言葉、後進國だといふ、從つて野蠻だとも思はれるやうな觀念を廢されたからではないでせうか。私はこの點から、日本の、主になつた紹介者――渡米した宣教師達の隱れた責任は、本當にゆるかせにならないものだと思ひました。或は又讀物の上で間違つて受け取つた考へもあるやうでした。丁度私と自動車に同乘した或る一人は、『貴嬢の齒は黑くはないがどうしたのか』と妙な質問を浴びせました。多分、昔の婦人がおはぐろで染めたのを、日本人の齒は黑いものと思ひ違へたのでありませう。私は『この白いのが自然だ』と答へました。『おゝ自然だ、自然――大變いゝ言葉を使ふ』抔と非常に興じました。

△新舊の建物いろ〳〵

私の交際つた一行中で一番の年少者でチヤーチスといふ十四五歳の少年がありました。その少年に『見物した中で貴方の一番氣に入つたのは何處でしたか』と訊ねました時、その少年は、天王寺の『市民博物館』だと答へました。矢張り子供は子供らしく、あの館內に在る色々の模型を大變興がつて殆んど立ち去り難く觀てをりました。私も彼を初めて見たやうな次第でしたが、いゝものだと思ひました。大阪の子供達の爲めに、お母樣が是非、日曜の午後の散策等にいらつしやればいゝと思ひます。又その子供の父親が居りましたが、その人は商人だけに三越に一番興味を持つたと云つて居りました。三越や灘萬に行つた時は、『日本は全く米國風だ』抔と云つて居りました。けれども大阪城に案內した時は、流石に愕いて居りました。あの大きな石垣を積む爲めに、三百年の昔、全く機械力を借らずに、千石樽に縛りつけて小豆島から運んだのだと說明した時には、只驚いて呆氣にとられて居りました。或は天守閣を觀ては、皆一樣に『ワンダフル〳〵』を繰り返してゐました。神武天皇の大和征伐や、仁德天皇の「たかきやに登りて……」の歷史を話してやつた事には殊に興味を以つて熱心に聽きました。同じく文

樂も面白く不思議なものゝ一つでした。こんな場合、日本の舊い劇杯に餘り明るくない私は、まるで一緒になつて珍らしく見物したやうなもので、説明者が説明される抔といふ滑稽も演じました。菊人形も面白いものなら、又、茶臼山の住友邸に行つては、之が一個人の所有かとその廣大な邸宅や庭園に驚いてゐた事も、外國人には尤もだと思はれます。

△病院と共同宿泊所

少し困りましたのは、回生病院に行つた時でした。私もその時初めて委しく内部を參觀したのですが、病院としての彼の建物は如何なものでせうか。成る程、内部の設備等は立派なものかもしれません。然し折角病院の代表的なものとして外人の參觀に供するには、あの暗い、舊式な、無理やりに間に合せたやうな廊下の曲りくねりも、少し引けめに思はれてなりませんでした。案の定、中の一人は、『大阪に病院は之れ一つか』等の奇問を發しました。可笑しかつた事は、醫學等の專門語を一寸出せなかつた事でした。初めは、皮膚科では「皮膚の療治場」だと云ひ内科では「お腹のところ」等と苦しい通譯をしてゐましたが、餘り質問が澤山なので、終ひには『日本のお醫者樣は獨逸語が上手いから誰方か獨逸語の出來る方は訊いて下さい』と投げ出して了つたやうな滑稽もありました。市立幼稚園で園兒達の可愛いゝ遊戲は何よりも一行を慰めました。凝つた衣裳をつけた舌切雀や桃太郎のしぐさを、一生懸命に間違ひもなくやつたことは寧ろ痛々しい位でした。あれ程に覺え込む迄には、隨分練習もしたでせう。私は先生達の餘りに努力に過ぎた教へ方を何だか子供達へ可愛想に思はれてなりません。小さな事の樣ですが、寧ろ、お愛嬌に間違つてもいゝ、子供は子供のまゝに、あどけなく騒揚にあらせたいと思ひました。

次に築港の職業紹介所及び、共同宿泊所は又社會事業の一つとして殆んど完全したものを紹介したいと思ひます。一同も感心してゐたやうでした殊に、市營住宅では、あの内で、まづ上位と思はれる一軒の家を全部そのまゝ開放して見せられた

事は、親切な心盡しでした。前から用意してあつたものか、掃除等もきちんと行き届いて居りました。皆の人達は喜んで、家中を見ました。その時ブラウン博士でしたか、殆んど、私達の目にも觸れないやうな處を見付けて私に質問しました。それは椽側の一番隅の上の方に棚があつて、其處に色々な本が積み重ねてあつた事です。それを何の本かと云ふのです、そしてこの家はどんな人が住つてゐるのかといふのでした。その本は、民法や刑法の本でしたので、多分この家の主人は巡査でゝもあるのでせうと答へました。博士は非常に滿足して、『米國に是非來て下さい、私の居間も書齋も開けて、歡迎します』と無邪氣に笑つて御機嫌でした。

總じて、外國人はよく心得の行く迄熱心に質問をつゞけることでした。見るものには、日本固有の「風致」とか「雅」とかいふ複雜な趣味性は一寸理解が出き難いのでせう。生花一つにしても、わづかの草花に向つて、ちやんと天、地、人の意味をこめた深い技術抔、到底解らないだらうと思ひます。庭園にしても、友禪の模樣一つでも、あの人達は、幾何學式に直線で以つて組み立てるやうな頭腦で見ます。繪畫にしても濃厚な油繪で養はれたあの人達の眼は、全く一筆描きの墨繪の價値は理解出來なからうと思ひます。私は、容易に外人の眞似の出來ない日本人の性格、趣味性を誇らしく感じました。（婦人記者）

秋寒く病めばはかなき物思ひ

郊外の夜は更けやすきかな



漫錄

××× 太西洋を見る日まで

工學會員 波江悌夫

□三□

○五ノ二二二號

フライ・ホテルはシヤトル市役所前の廣場に面して近頃出來上つた二十階建の建築である。

ホテルを出て西に下れば第二街第一街の繁街を横ぎつて直ぐに海岸通となる、北の方を眞直に上れば銀行諸會社の軒を並べた第三街に出る、廣場を東へだら〳〵と下れば一二丁の間にユニオン停車場が二つ並んでゐる・手前のデポーは太平洋岸の諸線を集め東のステーションは大陸横斷鐵路の起點になつてゐるさうだ・此二つの關門を目の前にホテル・ニワリツチモンドは十五階の新裝を凝らして畏つてゐる。

ベルボーイに道を敎はつてホテルを飛び出した自分は落付かぬ足付で硬いコンクリートの歩道を東へと人の流に漂つた・後から後からと馳驅して來る自動車の絶ゐ間を横ぎらんとする四つ角の人の群は自から人の流と覩られもする・踏む吾足に力がない樣な氣分は正に人の流に漂ふと申すより外はない。吾眼に映ずる四邊の光景は一種異樣の物凄い壓迫を感ぜさせる・生馬の目を拔くといふ大江戸の繁街にキヨロ〳〵する田舍者の夫の如うにあるのだ日の本の帝都に生れて來た近代人だつて一歩幾弗といふ商業都市の銀座通を漂ふては落ち付いた氣分になれる譯のものでない。まして前後左右に肩を摩する人の面を見たまへ。一人として顏馴染がないではないか。第一眼の色髪の色、見上げる樣なビール樽が

ノツソ〳〵と續いて行く間に挟まつて歩く自分の耳には何をいふて居るのか解らない言葉が飛び込んで來る。飾窓（ショウウインドウ）の前に立つて自から映す姿を見るとあんまり感心した恰好でもなささうだ。そして兩側の商店建築までが、高い高い上の方から、見下ろして、どんなもんだいといふ樣な四角張つた姿で並んで居るではないか。いかに力んでも四方から押寄せて來る此の壓迫な感じは、自分の心を妙に固まらせずにはおかなかつた。

リツチモンド・ホテルの帳場には赤い顏の番頭が居た。「W氏といふ日本人が泊つて居ると思ひます、何號の室でせうか。」と自分は勇氣を奮ひ起して訊いて見た。番頭はニヤリと微笑を漏らしながら夫でも宿帳を調べてくれた。そして五階の二十二號と教へて呉れたが、是丈の應答にも約十分餘を費やして居るのを考へると口と耳とが自分のものでない樣な氣がする、のみならず番頭の口邊に蓄かれたニヤリが聊か癪に觸つた。

廣間の北側に二箇のエレヴエーター（エレヴエーター）が人を吐き出したり、人を吸ひ込んだりしてゐる。ベルボーイの導くまゝに今昇らんとする箱の中に押し込まれた。總じてヤンキーは女を大切にし且つ尊敬する習慣から、女と同室の場合は脫帽する事になつてゐる。昇降機の箱は室といふべきか車といふべきか、はたまた縱に延びた廊下と呼ぶべきかは詮索の必要があるかもしれないが、彼等は之を室と見做してゐるに相違ない、何となれば婦人が乘り込んでゐる場合には脫帽する事になつて居るからである——その癖渡船や電車の中では平氣で帽を戴いてゐるそうだ——されば今自分の同乘した此の昇降室には二人の婦人が居たので吾も〳〵と脫帽して居るのみならず、一足先に入り込んだ男があはてゝ帽を手にした以上、自分も見樣見眞似で畏まらざるを得ない。大きな肩の間に身を容れて閉口してゐる間にスル〳〵と運轉を初めた。すると一人が三階だと大きな聲を出す、四階だ六階だ七階だと引續いて夫々聲が異つた口から漏れる、あいにく五階だと注文するものがないこんなに居るのだから誰か居るだらうと思つて居る中に、器は四階を經て忽ち六階に飛び上る。〆つたと思つたがもう遲い、什うしやうかと考へて居る間に器は遠慮なく九階に來た、婦人連の二人が出た跡に自分と今一人の男が殘つた。すると先生十階だと命令を下した、運轉手は自分に何階だと訊くから十階と同じ事を繰り返した。五階に行く積りの男が何のために十階に用があるのだ此調子で行けば紐育に行く筈が倫敦三界迄突走る事になるかもしれない。少々面喰つた、自分は早速右手の昇降室の前に陣取つて降りて來るのを待つて居たが左手の箱が降りて來たのでキマリが悪くなつて歩き出した、昇降器（エレヴエーター）も案外不便なものさ。

まゝよ、折角だから各階を見物方々階段を下りる事にしてブラ〳〵九階を出た、約八尺の廊下は兩方共突當つて北に折れて居る兩方に室が設けてあるので廊下はあんまり明るくない、それ故晝間だのに電燈が燈つて居る、室の番號札を見ると930とある、隣りは932である。はてなこのホテルに九百以上も室があるのか知らと思つて驚いた、して見ると二十二號の室は五階よりは、すつと下の階でなければならない、こんな事ではいつW君に會へるか危くなつて來た。

八階に下りて見ると取付きの室に830とある、其隣が832であ

る。して見ると各階に百室がある譯である、こりあ五階に下りたら 530 532となるに相違ない。こうなると聊か狐につまれた樣な氣がし出した、夢中になつて五階迄下りて來て見ると果然530 532とある、愈大變だ、此調子で行くと二十二號の室は一階でなければならない。だが一階には食堂だの待合室だのあつて寢室のあるべき筈がない、愈變になつて廊下をうろ〳〵して居ると角の處でバッタリ日本人に出遇はした、オヤと思ふ、見るとI技師だ

『やあ貴君は此處に泊つて居るのですか』

I氏はニッコリして諾いた。

『君はフライへ泊つたと聞いたが什うしたのです』

『いやれ今朝W君を尋ねてやつて來たんですがれ、室が解らんので閉口してゐるのですよ』と本當の處を白狀した。

『何號の室なのですか』

『番頭は五ノ二十二と教へてくれましたから、五階迄來たんですがれ。此階に二十二號なんて室がある處か皆五百級なので……』

I技師は思はず『ハヽヽヽヽ』と笑つた、そして次の樣に說明をしてくれた。

『そりや五ノ二十二でなくて五百二十二ですよ簡易を喜ぶ米人ですから五二二と云ふたのを貴君が聞き違へたんですよそれから寢雜を避け解りよい樣に各階共階の數字を百級にし頭に置いて呼ぶ慣になつて居るんです。五階の二二號が五二二號となる譯ですよ』

成る程さうかと思つた、そしてポケットへ手を入れて自分の室の鍵札を取り出して見た。それには立派に三一八の番號が彫つてあつた。

○室の鍵

I技師は五三六號の室に泊つて居た。とにかく私の室にお出でなさいとあつて導かれた、西向の表側に窓を開いた小さな寢室である。シングルベッド一つワードローブ一つ椅子が二脚それに小さな風呂場と戸棚が付いてゐる。

I技師は此前一度此シャトルに來た事のある人丈に、自分よりは落付いた顏をしてゐた。備付の電話で丁場に聞き合せたら、W君はあいにく外出してしまつたさうだ、多分貴君の來方が遲いので用事に出たのだらうから、まあ御話なさいとあつて自分も尻を落付けた。

I氏は官命を帶びて加奈陀に於ける獸皮產業の視察に來られたのである。殊に近來メキ〳〵と聲價を揚げてゐる狐の皮に就いては最も研究をする事になつてゐるのださうだ。狐につままれさうになつた處で、狐に緣のある人に出遇つたのはこれより安心な事はない。

I氏は茲一週間ばかり此附近を視察してからバンクーバー市に出で、それから奧深く雪の加奈陀を橫斷するとの事。

『什うです、私も一人では寂しいから、一週間一所にシャトル見物をやろうではありませんか』

とI氏はいふた、I氏とはヴ港見物も一所にやつた關係もあり

自分も今少し沙市を視察して行きたいし、又二人前の室の始末を考へねばならぬし、W君は二三日内に出立する様子だしろからと思つて、I氏の此勧誘には少なからず動かされた。

『實は私もゆつくり沙市を見物したい様な氣になりました處ですから考へて見ませう』

『それにホテルの室が大き過ぎましてね』

『大き過ぎたとは什ういふ事ですか』

『いやれ船の中でW君と約束して二人前の一室を占領したのですが、W君は都合あつてC君と一所に此處へ泊り込んだので今朝打合せにやつて來た譯ですよ』

『そんなら斯うしたら什うです、W君の都合を訊いた上で差支へなければ、私が貴君の所へ代りに行きませう、一人で寂しいし、貴君も夫の方がよいでせう』

自分はI氏の申出に感謝せざるを得なかつた。

『さう願へれば結構此上なしと思ひます、私も愈腹を決めて沙市見物をいたしませう』

と漸く決心をする事にした。

『それはそうと室は何號でしたれ』

『待つてください』

と自分は又ポケットを探ぐつて鍵を取り出した。

『三一八號ですか、よろしい明日の晩間違ひなく引越しますから貴君も丁場へ注意しておいて下さい』

とI氏はいふたが、

『此鍵は一々丁場へ預けて外出せないと、丁場で困りますぜ、客の有無は此鍵で判斷をするのですから』

ホイしまつたと自分は思つた。

『鍵を持參で外出するのはまだよいですが、愈ホテルを引上げるとき、ついポケットへ入れたまゝ出發する事がありますから困るのはホテルの丁場ですよ、それ御覽なさい。此鍵札に

「鍵御持參の儀御出立の折は二錢切手を張つて郵便ポストへ御投入相成度候」

と書いてあるでせう』

成程やり相な事である。おまけに自分より前の持主がやつたと見えて新しい切手の跡が殘つて居るを發見して此鍵も大分に戸惑ひをして居るなと自分は思つた。

○加へ算と引き算

I氏と明夜を約しての歸りにW氏を訪れたがまだ歸館して居らんので、其儘ホテルへ歸つて來た。ベルボーイは自分の顏を見るとWさんといふ方が尋ねて來られたと報告した。貴君の外出したのを知つて居ましたから其旨申上げましたら『夫では行違つた夜になつてから來て貰いたい』と傳言を賴まれたとの事である。それなら夜行つて話を付ける事にしやうと思つた。

時計を見ると午後の一時だ朝飯を食はんので大分腹が北山だから其儘廣間を拔けて衝當りの食堂へ入り込んだ、女給仕の案内で左側の卓へ腰を下すと、メニューを持つて來た。

太平洋の船の中でもメニューは解らぬものゝ一つであつた。スープの欄を見ても二つの中どれがよいのか今に解らない、まして

魚もの肉ものゝ料理と來たらさつぱり名前が解らない。さればといふて注文せずんば腹が承知をせんから指でよい加減の所を押へて注文する習慣がついてしまつた。これは默つて、目的を達する唯一の手段である。處が時々飛んでもない料理を持參されて食ひ方に閉口した事二三度でなかつた。

又船の中では大抵三四皿宛食ふて居た習慣から、今し給仕の與へたメニューを見て、解らぬ乍らオムレツ、とカツレツとハムサラダらしいのを一皿宛注文した。尤も豫てからアメリカの料理は途方もなく大きな皿を持つてくるから用心をしろと聞かされて居たが、近所のテーブルに持つて來る皿が左程大きなものでないのに安心して三皿も注文した處が、愈ナイフとフォークを兩手に握つて三皿の料理を目の前に眺めた時は、他所目で見たのと違つて成る程大きな皿だと思つた。オムレツと申した處で日本で食ふ奴の三倍は確にある、カツレツでもその通り、ハムの切り身に至つては氣味の悪い程大きな肉片が皿からハミ出て居た。

さすがに氣の大きな國は違つたものだと感心しながら腹の虫を喜ばせておいてオムレツから食ひ初めたけれども、どういふものか半分迄食ふて閉口した。カツレツなら腹に入るだらうと切り初めたけれども、こいつも半分丈しか咽喉に通らぬ。ハムに至つてはもう食ふ氣にならない。

さういへば三皿注文した時給仕は變な顏をして居た。實をいふと腹は減つて居るに相違ないのだが、心が落ち付かぬ爲めか氣遲れがして居た爲か平時の半分も食へなかつたのだらう。自分でも二皿位でよかろうと考へながら、身体に似合はない小食だと考へられても剛腹だと、一皿餘計に要求したものゝ、今になつてナイフも付けんのは猶更變なものだと無理にも一片切つて見たがどうしても口へ入れる元氣がない。仕方がないから茶を注文したら、ブラック（チー）黑か綠（グリーン）かとの質問だ、茶にも妙な名が付けてあるものだと綠を要求したら日本茶を持つて來た。成程綠茶に相違ない。こんな事迄に頭を使つて居るのだから、料理が思ふ樣に食へぬ譯である に相違ない。

そこ〳〵に切り上げやうと勘定書を請求した、チップを何程やらうかと考へながら周圍を見ると、夫々注文した料理を甘さうに食べて居る。心茲に非ずんば食へども其味を知らずといふのはこんな時をいふのだらう。こりあ一つ考へなほす必要がある。とにかく妙にソワ〳〵してゐる氣分を立て直ほすに非ずんば……と思つてゐる處へ給仕が勘定書を持つて來た一弗二十五仙とある支拂は帳場でしてくれといふので、食堂の隅へ來て五弗の紙幣を一枚渡すと丈の馬鹿に高い女が半弗の銀貨を幾つか並べて『ダラークォーター、ツー、スリー、フォワー、ファイブ』と數へ上げた御剩りが何程になるのか一寸考へながら『ワン、ツースリー』と自分が數へて居ると、何と思つたか『もう一度數へて見ませう』といひながら『ダラークォーター、ツー、スリー、フォアー、ファイブ』とやる。

要するに御剩りは三弗七十五仙になつて居るのだ。

『三弗七十五仙あるよ』

と云ふと、女は又『ダラークォーター、ツー、スリー、フォワー、ファイア』と勘定を仕直す。

剩り錢は總て引き算でやつて居る吾々の頭には、加へ算で計算して居る米國式が一寸頭に入らないと同時に『三弗七十五仙あるよ』と剩り錢丈を計へて居る自分の引き算が此の女に呑み込めないのだ。

彼の女はどう〳〵四度目の『ダラク ォーター、ツウ、スリー、フォワー、ファイブ』を繰り返した。

自分は思はずお可笑しさが込み上げて來て、たまらなくうれしかつた。これからアメリカ人をこまらせるには引き算に限ると思つた。

○戸惑と失策

午後は自分の室に引籠つて、荷物の整理やら故國への手紙やら雜務を片付けて置かうと考へたから、廣場の賣店で繪葉書やら切手やらを買つた。釣り錢は不相變加へ算でやる、こりや慣れる迄は妙に感ぜられるが、慣れて見ると案外便利かも知れない、單純を喜ぶ米人の頭には掛引だの、割引だの、引算だのは事柄を複雜にしてしまふと考へてゐるに相違ないが、幼稚な時代の取引が其儘殘つて居るのだと見る方が、至當であろう。日本だつて算術を知らない人間は加へ算で勘定をするのは往々見受けるからね。

手荷物を整理し始めて見たら失つたと思つた鍵が出て來た。日本から持て來たシヤトルの地圖も紹介狀も一所にあつた。船の中でたまつた洗濯物も相當にある、これも滯在するとなれば始末して置かればならないと思つて初めて電話に掛つて見る、ホテルの電話姫の聲が聞へる『ベルボーイアップ』とE一氏に聞いた通り簡單にやつつける、『オーライ』と返事があつた先以て大出來である。

やがて扉を叩く『カムイン』と返事をすると。

例のボーイ君が入つて來た、洗濯物を賴むと。

『困りますれ、御洗濯物ならヴアルベットボーイを呼んで下さい、それから御荷物の時はポーターが居ります、御食事に就いてはウエーターに御願ひ致します、それから洗濯物は此戸棚に此通り洗濯物の袋が備へてありますからこれに御入れになつて御渡しになればよろしいのです』

とある。ボイ亦失策か、それでもお蔭で大いに解つた。併し此儘追い返すのも變であるから。

『さうかい。そいつは知らなかつた。處で風呂場の排除管の工合がどうも惡いので、一寸見て貰いたかつたのだよ』

と甘くコヂ付けたら、ボーイ君も其氣になつて、早速風呂場を檢べてくれたが。

『成る程少々漏れますれ、早速修繕しておく樣に命じませう』

と出て行つた。

二時間餘りかゝつて荷物の整理を終り。そこ〳〵に手紙を書いて出掛やうと、テーブルに向つたが、頭がごた〳〵して居るので長い手紙はとても書けなかつた。

二日無事着、數日滯在の積り、萬事勝手違ひ、電話一つ掛けられず、閉口頓首、御笑ひ下され度候。

こんな事を葉書に書きなぐつて階段室にあるポストに投り込んだ葉書は氣持よく箱の中を辷つて行つた。

W君が丁度歸つた所へ訪れて行つた、C君は隣室を占領して居た、話は上陸以來の失策談で持ち切つた。

C君の話によるとW君の世話でNホテルに案内された晩、大失策を演じ怖くなつてW君の隣へ一所になつたのである。

『愈寢やうと考へてれ、スウッチをひねつたと思つて下さい、燈火が消ゆると同時にスウッチの所から白い煙を吹き出した、オヤと思つて居るうちに其勢が益激しくなるので、狼狽しましたね、電鈴はないがとウロ〳〵するけれども、百計盡きて電話を掛けたのはよかつたが、何と報告すべきかが解らない。無我夢中に自分の室の番號を吐鳴つて居るうちに「オーライ」といふ返事が聞いて、初めてホッとしました。此時には室の上部はもう煙で一杯になり切つて居ました、ベルボーイの來る迄の間の待ち遠しかつた事、氣が氣でない室の有樣、什うする事も出來ぬので冷汗が流れましたよ』

とC君は其時の心理に立歸つたか、ホッとして言葉を切つた。C君は年は若いが多年氣合術の研究に沒頭して心神の膽練は既に堂に入つて居る人であつた。船の中で屢々其實驗をやつて、僕等に多大の教訓を垂れた人だ。

此の人が此の狼狽と此の困惑に陷つたと聞いては、自分等はまだ〳〵よい方だ、最もC君の此失策は全く突發的變事だ、電話を掛けるの機智と、煙の內にボーイの來室を待つた度量は、常人の眞似し得られぬ所であろう。

W君は言葉を添へて。

『原因は漏電だつたらしいので、ボーイは直ぐに修繕にとり掛つて事なく濟んだものゝ、C君の身になつて見ると心細くてならない。こんな化物屋敷の樣な室に居るのがたまらなくなつて私の室を探した處が番號を忘れてしまつて戸惑をしたといふ話ですよ』

自分は■君も戸惑をしたかと思はず微笑した。

『私も今朝戸惑をやりましたよ』

C君はその時こう云ふた。

『W君の室が判らないので、丁場迄行つて訊いて見やうとしたんですが、まて〳〵氣を落ち付けたら思ひ出すに違いないと廣間の安樂椅子に腰を下して靜座をやつて居る處へ丁度W君が下りて來たので、やつと交涉して貰ふ事となつて今朝漸く此室に移轉しました。

W君は葉卷の煙を擧げながら。

『今朝貴君に電話を掛けた時は丁度C君が隣室に一所になつた時でした。船の中で貴君と約束した事もあり、一應御相談したいと思つたから……』

自分は戸惑の話から一技師に迄つた事、並びに一週間ばかりシャトルに滯在したいといふ希望を述べたら。

『それは好都合でした、實は私も明日出立しなければならなくなつて、來たし、C君は什うしても市俄古迄は僕と一所に行きたいといはれるし、君が一君と一所なら双方都合よい譯になつた』

とW君も贊成してくれた。

◆　◆　◆　◆

失策や、戸惑ひ！は勝手知らぬ國へ來ては常飯時であるのが本當の所かもしれない。だが心氣既に轉倒して居ては事毎に妙な結果を產むのは止むを得ない樣に思ふ。心神の鍛練に相當の修業ある人ですらが時と場合で面喰ふ以上は、凡人の吾々は失策と戸惑を常飯時としてやつて居たら却つて早く此變態から脫する事が出來るかも れない。だつて自分でやつた失策も後から考へると可笑しくてたまらない、そしてやろうと思ふた所で無茶にやれるものでない、と て見るとやろう〳〵と遂に方針を立替へるのが利口かもしれないと思つた。

××古刹に古都に秋郊の一日

——日本建築協會第三回大會の記——

江村郊邨

秋光冴へて、眞雛の菊花、色漸く濃かなり。

月の三十一日、大内山に紫雲靉靆てふ天長の佳節、南浪華の驛「湊町」に今日の古都行に加はらむとて馳せ集ふ人々に膽煎らむ爲、まだ東雲に茜さゝぬ午前五時といふに、早や吾等事務側の人達は驛頭明け行く星空らに影を印しぬ。

朝曦さつと生駒の巓嶺を染めて、薄絹の空ら蔽ひは靜かに卷かれ、浪華の大路にも、道がに群ら雀の囀り繁く、今日の天候上々喜を報じぬ。

驛前、孤梢停々として、道が老ひ秋を告げ顔に薄紅葉の色艶かなるポプラの樹下、白ろ菊と紅菊の色取々なる徽章の數々と、今日の案内記の刷り物を載せたる机に、紅菊の徽章にもそれとしるべき委員達は既に人待顔なり。

上りプラットには、早や汽罐車の湯氣も白く立ち昇りて、我等一行の爲、會員坪井氏と驛の長さなる人の好意にて、特に最前部に取り附けられし二輛の客車も、『オーライ』を嘯き顔に用意成れり斯くて、時は刻々に我等を今日の幸ちある古都行に運び往さて、午前六時半といふに、早や其處等邊りは、白菊の徽章附けたる會員の、カメラにスケッチ函に、レーンコートに、パラソルに、ステッキに、背廣に、袴に、罩にフロックとモーニングに、等しく坪井氏と驛長さの好意にて開放されたる驛前の「倶樂部」も、驛の廣場も、賑やかな事〳〵。

發車相圖の呼子の音も、「ウーウオー!!!」と響く汽笛の應らへも、折柄澄み亘る秋き空らに躍る心

と、樂しき往方の思ひとに、今日許りは、すが〳〵しくも勇ましく聽こへけり。

車は轢る、車内はどよめき風物は送迎す、「今宮」「天王寺」「平野」「八尾」「……」「……」、過ぐる驛、迎ふるプラット、成る程大祝日の氣分は何處の隅にも漂へり。打ち拓けたる田圃黄金成す苅り稻の豊穣の粒もたわゝに堆み連ねたる、山坡谷りて、老杉古柏の色も黒絲りに、坡脚に碎くる溪流のせゝらぎも古寂に、遠ふ山、近き溪間、薄黄金色に紅ひに、濃き綠りを織れる、田家軒傾きて、旭旗の下に蕪羅、大根の太しき連ね干したる、扨ても自然の繪巻き物よ、我等一行の打ち寛ろげる



「夢殿」前に於ける一行中（會員撮影）

談笑と飽かす眺めの前に、徐々と展開し巻き收めらる。嘻我が行を犒ふ「自然」の饗宴よ

午前九時、「法隆寺」驛着。

途は坦々稻壟菜圃の間を縫ふて、一路、千載の古都飛鳥の文明を象徴すべき巨刹『法隆寺』に通ず。一行、此處より汽車を捨て、參々伍々、歩塵を擧げて『法隆寺』に向ふ。沿道の田舍人も、流石に土地柄とて、洋服姿の『順禮』に馴れたる眼にも、此一行が奈何に映じけむ、目送暫迎、途會ふ人の會釋も田舍人の素朴さ千載の昔に辿らむとする我等の氣分と照り榮いて嬉し。

おや、忘れてけり、今日催しの譯柄も、プログラムも、馳せ參せる面々の御名前も先

づ以て書き誌す事を忘れてけり、いで其概要を書き記せば

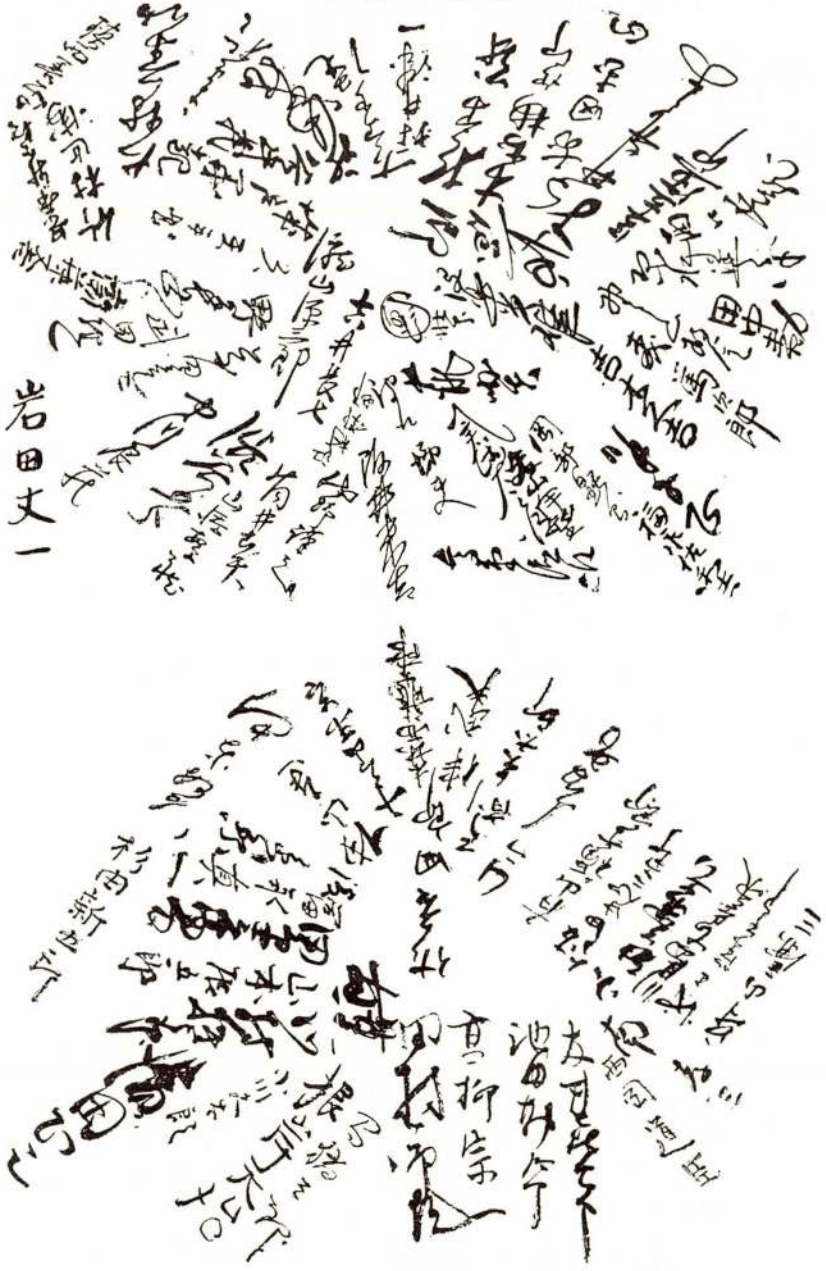
一　日本建築協會第三回秋季大會を、飛鳥の巨刹『法隆寺』古建築物の巡禮に始めて、南都の秋色に飽ぎ、奈良ホテルの樂しき晩餐に畢らむとするのプログラムにて在りき

二　當日馳せ集へる面々には、(徽章渡し順)友田薫長田岩次郎、澁谷五郎、野呂長四郎、平塚鋭吉、西口長藏、上瀧辨吉、筒井武雄、小川久太郎、有山福重郎、平島末吉、川島甚兵衛、守山廉藏、野野山政金、鎭西善平、岡本新次郎、倉崎太三郎、間猪三郎、川村種三郎、



法隆寺中門（會員撮影）

高堂德治、中川辰藏、杉田新五郎、山添繁藏、阪米吉、岡部顯則、田中勳池谷仙太郎、佐野謹三、田原三千男、齊藤又吉、岩田丈一、前田武正、田村市郎、武田經一、富永眞一、高柳宗一、伊東敏夫、池田勘藏、友井喜四郎、竹村近衛、瀧山源三郎、呼子正、伴武夫、久米平藏、城戸義起、前田竜藏、大原忠隆、駒井喜兵衛、村野藤吉、木村梅四郎、森山伊望、設樂貞雄、山本辰五郎、弓削兵太郎、足立彌一郎、小西兼吉、杉原茂、清水英次吉井長七、吉木久吉、佐藤四郎、西岡道臣、谷民



藏、森篤次郎、原科準平、濱田正藏、池上英次郎、新海正綱、森西瀧太郎、熊取谷熊次郎、南孝三、坪井誠一、大坊榮助、福永佐和吉、葛野壯一郎、波江悌夫諸氏の面々に、越山達山崎萬壽夫、渡島繁の事務側諸君と、わたくしとにてありき。

扨ても、其後、さる程に、我等順禮の一行は、沿道の風色に飽くなき時を迎りつゝ、法隆寺の南大門前に、一先づ大阪以來の行塵を打ち拂ひぬ。

此處にて、一行二班に分れ、葛野、波江の兩氏其一方の東導と成り、豫て參加の諸氏に渡せる境內平面圖を手に、先づ南大門の說明より、西大門金堂、五重塔、西室三經院、西圓堂、地藏堂、上堂、講堂、東室聖靈院、食堂、細殿、東大門など西院一帶の古建築物に、流石は斯道に造詣ある人々とて、語るも心地よげに、聽くも面白氣に、千古の手法、近代の變遷、斯の一行の耳と眼に展開されぬ。斯て、兩班交々、『網封藏』と呼ばるゝ寶庫に驚嘆讚美の眼を睜りぬ。考古の智識殆むど空虛な記者の眼底にも、方幾間の斯の寶藏裡に、飛鳥、奈良、平安、鎌倉、室町、而して近代と、當時の美術に象徵されたる時代の思想も風物も、文藝も、建築も、收められて、宛然維れ『歷史』其のものなり。中に、宛然朝鮮人型の顏せる彫刻物の數々あるを、奈何にも新發見かのごとにN氏に指さし語れるわれ、『君識らずや我上代の文明は三韓を通りて來れるを』とN氏の失笑に、成る程と際わどい處で吾が無智の馬脚を曝け出したる、耻しくも亦可笑しかりき。それより東院に移りて、西門、南門（開けずの門）傳法堂に舍利殿、繪殿を迎り、その昔、聖德太子の空想に耽り給ひしてふ『ゆめどの』に、八角形の建築も珍なれど、懷へば寂光一千年の輝きを帶び、人逝て光りは永久に在りの感、そゞろに吾れを襲ふ。

建築に寶物、語るべきことは多し、されど、われは其人にあらずして、別に筆を染むる人あらむ只巡禮の紀念にもと、左に建築物—保護建造物—と創造—或は手法—の時代を羅擧して、われはその責め塞ぎとせむ。

中門　飛鳥

金堂　同
塔婆　同
歩廊　同
經樓　奈良
食堂（附細殿）　同
東大門　同
夢殿　同
傳法堂　同
鐘樓　平安
講堂　同
新堂　鎌倉
西室三經院　同
西圓堂　同
上御堂　同
聖靈院　同
禮堂　同
舍利殿、繪殿　同
地藏堂　同
南大門　室町
東院南門　同
東院西門　同
東院歩廊　同
北室院本堂　同
北室院門　同

看竭す寺寶、いや、國寶の數々は、とても、我等凡眼の、肯綮を得た叙説の出來得べくもあらざるが、唯、朦朧として、千古の名殘りを留め、又は頽壞纔に面影を支へたる壁畫の數々、遖がに古美術研究者の垂涎措かざるものなんめり、と肯かれたり。

正午少し前、寺坊裏門前の旗亭『大黒屋』に一同中餐を攝る。

旗亭、構居廣く、屋根瓦に白苔を帶びて、稍寺院型の構造、環境の風物と共に、古色寂寞の感あるは、バタ式思想とやらに攪き廻はされたる吾が惱みの腦裡に、秋風寂香を送つて、心境頓みに靜けし。

客室、幾段階の上段の間、粗透し彫りの匂欄を廻らして、椽板と共に木理の膚も荒れたる、卵形なる御影石の手洗鉢に青苔蒸して、書院の小障子

に影抛げたる、床の間に、怪しの大幅を懸けて、巨大な銅製の置物を据へたる、進め吳れし薄く、幅狹き座布團に旗亭の印し置ける、扨ては、茶器抔の派手に錦き色せる、旗亭の主人の心盡し左こそと肯かるゝも、宛然維れ、伊勢參宮の道者宿に憩へる心地せるは可笑し。

壽計の折詰めと、時節柄を利かせし松茸の吸物に、古美術と古建築に飽いで、夙朝來の運動に饑へたる腹を拵らへ、其處等邊りに身抔を抛げ遣りて、姑し無我の境に彷徨へる人、繪葉書にペン走らす人、早速、坊前に古美術を商へる店に掘り出し物を漁れる人、扨ては、一行に別れて、附近の寺院に古建築物の順禮をなさむと友誘ふ人、旗亭の自轉車取り出で、坊前の廣場に幾度も圓回を畫きて微笑める若殿達、斯くて食後の休憩に、次いで程を起さむとする南都行の銳氣を養ひつゝある程にさる程に、波江の君の發議にて、紀念の寄り合ひ書きは始りぬ。各自墨を含ませて次より次へと廻り書きせる、所謂墨痕淋漓か、龍躍虎嘯か、將た柳條輕風か、幵は覽む人の批評に委して、不朽の思ひ出でにと拵へ上げぬ。

午後一時、一行、再び法隆寺を見舞ひて、『金堂』の北面に堵列、五重塔を背景とし、豫て奈良より呼び寄せたる寫眞師に我一行を撮影せしめき背景は、我國寶たる『金堂』と『五重塔』、私に寺內撮影は寺制として一般に禁止せるとか、此の日、一行が斯る殊遇を得たるは感謝深し。されど、古代の手法による大建築物前に、テラコッタと、赤煉瓦と、自動車と電燈と扨てはフォークとナイフに相應しき服裝せる我等一行と斯の背景、望むらくは、韓衣唐冠、木履に笏を正して欲しかりき。吾れは獨り、束帶せる人の、此の『金堂』に悠揚として出入せる態を想ひ見て、目まぐろしき現代の文明とやらに、蝸牛角上の喧嘩生活や排池生活を呪ひつゝわれは、千年の昔に生れ換はらずにや、と想ひ耽けにけり。

畢りて、各自再び步塵を擧げて『法隆寺驛』に引き返す。此の度は、他客と混合して、午後二時發列車に搭じ、二時半奈良驛に列車を捨つ。

是より、各自自由行動との掟に、驛頭一先づグ

ループを解いて、俥に徒歩に、嘯かし、南都の『秋色』は、それ等の寵者を増せるに彌や誇り冴へにけむか。

次いで、プログラム最終の行事は始りぬ、そは『奈良ホテル』に於て、歡交の夕餐を催すにてありき。

我等接待側の早くより奈良ホテルに行き、待つ間に、ヴエランダの勾欄近く籐椅子引き寄せて、前面に展開せる欝林、塘池、綠溪、霞山、扨ては雜木の溪間に隱れ、互連せる岳裾に幾蜿蜒せる徑途を辿る人々、此の『自然』と人工の調和、吾れは飽くなきの眺めに入りぬ。

軈て、夕靄よう〳〵濃く、遠方近方に灯の輝き染める頃より、今夕の樂しき團欒を共にせむと集へる人達は次第に增し、ヴエランダ脇の待合室は賑ひ始めて、紫煙罩め、笑聲起り、歡語響けり。

午後六時頃。中食堂に晩餐會は開かれぬ、集へる人達四拾四名。ホテルの都合にて、午後七時限りに食堂を撤せむとの豫ての定めなりしも、此の行に便宜を與へむとて何より何迄も膽煎れる誠一坪井氏の、亦も膽煎れるにや、豫定を更めて、今夕は何時迄なりとも食堂を使ひてよと、會心の報を齎せるに、一同愈々御興を据へて、飽迄、當日の催しに、所謂有終の美を濟すべく各自の面貌は輝けり。

斯くて、デザートコースに入るや、葛野理事の感想を交へたる挨拶に口火を切り、波江氏のテーブルスピーチに次いで、三人のスピーチあり。更に波江氏の發議にて、各自の自己紹介に入り、淡々平板なるあり、隆屹柄鑿なるあり、滑稽皮肉なるあり、紹介毎に拍手堂を撼がし、幾セコンド毎に起る前後四拾幾回の拍手には、淺茅の高原に睡り圓らなる神鹿の夢を破りにけん。

八時過宴を撤し、是にて、日本建築協會第三回秋季大會を畢りぬ。白光に濃き綠と淺紅葉を照り榮やして、樹下徑上に、飯行の我等の影を畫ける古都の夜は殊に妙でたし。

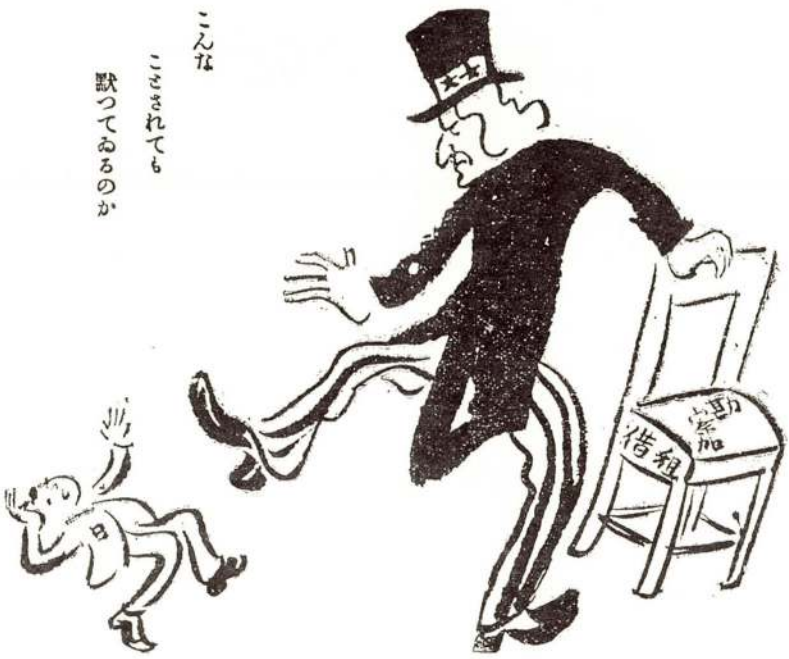
ひとりしてものを思へば秋の田の
稻葉のそよといふ人のなき（古歌）

結構な藏が出來ても
眠つてゐるとすぐこれだぞ





止まらうが
飛ふが此方の
知つたことかい



こんな
ささされても
獣ってゐるのか



撤退すれば
すぐ
この有様



〔藻苑〕

小品文募集

時雨

京都　汀舟子

小糠雨が朝から降り續いて。一寸も歩みそうにない。それでも職人は濡れ乍らセッ〳〵と働いて居る。最前から詰所の椅子に腰掛けて正面の窓臺石を硝子越しに見詰めて居ると、天端に溜つて雨がだん〳〵面の方へ流れ出して來て、水切の下端へ吹ひ込まれる樣に消えて行く。少時すると二三寸置きに栗粒位の白い光りが四ッ五ッ出來て、それが三つになり二ッになり仕舞には一つになりて小豆位になるとポツリと落ちて了ふ。それが左の端近くであつたので『下つてるかナ』と思つて居ると今度は全じ樣な事を右の端近くで始めた。そして大きくなるとやつぱりポツリと落ちて了ふ。『右の方へも流れるナ』と思ふと左の方で又ポツリ右の方でも又ポツリ、『ハヽー水平だナ』と微笑した。

短歌

『安江不空選』

◎

○不退寺（賞）　茅上眞人

□まうでくるひともあらなくふたいでらくさぼうぼうとあきたけにけり。

□くさかげになくむしさびてふたいでらうらのまつやまかぜわたりつゝ。

□さにぬりのあせてさびしきふたいでらいらかくづれてくさたけにけり。

□こんもんのかたへにあをくすめるいけのみ



のもみだしてかはずとびこむ。

□いけのべなるたぼうのたふのねんくちてかたふくのきにくものすゆらげり。

《不退寺亦曰不退轉實輪寺、在大和佐保、南北朝時代所創建也》

○菊　同　人

□しらぎくのはないちりんやすものゝつぼにいけつゝこゝろはたぬし。

□とゝせちかくむかしまぎねしまつづきぼしらぎくいけてたぬしむわれは。

□よきつぼをかはまくもへどなりはひのまづしくあればまぐよしもなし。

□はないけしつぼはまづけどゝかすがにこのしらぎくはけだかくもあるかな。

□しらぎくはいともけだかしふゆちかきひとひこもらひねむかひおらく。

○朝道　唐金欽彌

□あま雲のみねにくだれる杉やまはゆふづくはやしくもがくりつゝ。

□榛の木にふくかぜさぶきやまみちをしづかにひとのくだりゆくみゆ。

□山肩にうねりつゝけるほそみちを牛ぐるまおふ人もありけり。

□山そばを牛ぐるまおふそば人のかたほあかあかゆふ日てらせる。

□ゆくりなくまがれる道にあふひとのこゝろゆふ山にひゝきてきこゆ。

○寒霞溪　兒玉廣太郎

□ま夜なかに船はつきけり小豆島かみかけやまはくろくそそれり。

□つごひくるむらの子あまた寫眞器をいむけてあればみな逃げてゆく。

□あかあかとあきの日のてる山ざかをあゆぎのぼればもみぢ葉みてり。

□草かべのむらもくれゆくゆふぎりにかみかへ山のかくらくおしも。

○外套　根岸元治

□いろあせてうらがへしたる外套をくろくそめかへわれなほまとふ。

□つきづきにそこばくづゝをはらひつゝまぎ



わしまんときすてかねつも。

□はやりにはをくれし型のまんとなれど霜夜ゆたけくみぬちぬくもる。

□ふゆの夜のさびしきにひとりなれゐつゝぼたんの穴をつくろふ吾は。

□まくろなるまんとのそでにとまりたるちいさきあきつうごくともせず。

俳句を作つてみやうと思ふ人に　(三)

蘆田秋双

白菊や香の高き畑かな

ぼか〳〵と暖かな秋の日ざしは、白菊がちの菊畑に洽ねき光を投げて、その菊の一つ〳〵に鮮やかな影をつくらしめてゐる。佇んでゐると首筋や背中は秋日にじり〳〵と熱さを覚ねしめる。蒸せるやうな菊の香はその日ざしの中を畑一面に匂つて頻りに鼻を衝くのである。

作者はこんな感じを云ひ現はさうとしたのである。

この句の中で「白菊や」と「畑かな」と文字がある。それは昔からやかましくいふ「切字」といふものです。

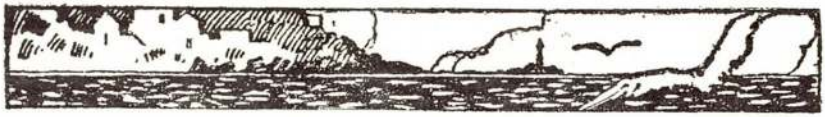
この切字は俳句文法の上にどういふ約束があるかといふと、この切字によつて、句の意味を區切つて了ふのです。即ちこの「白菊や」と云へば、白菊が咲いてゐる光景を云ひ現はしたもので意味はそれで切れて了つてゐるのです。「かな」も「や」も同じ意味の働きをするものです。

すると、この句はどうなるかといふと、この「や」「哉」の切字の爲めに左の如く二つに意味が切れて了ひます。

(白菊や)(香の高き畑哉)

恰度「白菊や」と東を向いて云ひ、「香の高き畑哉」と西を向いて云ふやうになつて全然別々のものになつて了ひます。

ですから(白菊)は白菊だけの意味を有ち。



（香の高き畑哉）はたゞ畑だけの意味になつて了ふ。故に（香の高き）の香は白菊の匂ひでなくて畑の香になつて了ひます。

それではどうすれば作意の如くなるかといふと。

白菊や香の高き畑かな

この「や」の切字を

白菊の香の高き畑かな

即ち「や」を「の」に取換ねると初めて上と下と接續して前述べた如き畑の香でなくて、白菊の香になるのです。

この「や」とか「哉」とかいふ字は即ち感歎詞なのであります。この文字は俳句獨特のもので、これ以上に發達する事の出來ない自由なそして廣汎な意味を有つた詞であるのです。此の詞がある爲めに短詩形の俳句の意味が非常に深くなつてゆくのであります。

課題俳句

建築

（冬季）

蘆田秋双選

新宅の手入濟みけり大晦日　鯉城

釘拾ふ大工の弟子や冬の晴　工人

壁塗るに短かき日とはなりにけり　立圃

塀直す音に暮れたる小春哉　同

足場より落し人ある冬日かな　歩吟

大工歸りしあとの焚火にあたりゐる　同

雜談に大工等耽る焚火かな　耳山

凩にこけし塀直す人等かな　同

棟梁の老知りそめし懷炉かな　青瓢

弟子大工水洟落とす冬日かな　同

辨當に寒き腹なる大工かな　同

足袋の穴しくじり大工嗤ひけり　響空

腹痛くなりし大工に懷炉かな　同

普請場の一隅に菊枯れてあり　同

足場に上れば川が見ゆるや冬柳　槌人

足場解く繩屑かゝる冬柳　同

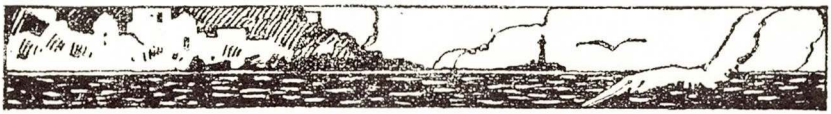


足場から降れば暮れゐて冬柳　同
縁に居て普請の世話や冬の梅　汀舟子
炬燵して老の見てゐる普請かな　同
棟上げの木遣の聲や冬の空　同
雪の日を根切の大工裸かな　同
風にコンクリートの覆飛しけり　静蛙
セメントの粉を吹き飛ばす北風哉　同
足場に印す猫の足跡や霜の朝　同
輪になりて朝を大工の焚火かな　同
普請場の火の用心や冬の風　同
スレートの屋根の光や霜朝日　同
荒壁の凍てゝあるなり今朝の霜　同
初東風に棟上祝ふ木遣かな　菊雄
冬の日や砥石の凍てを溫めぬ　同
石屋だけ轉發に休みけり　同
年の暮疊の表かへしけり　同
あかぎれの煉瓦積む手を溫めけり　同
荒壁や土さく〳〵と霜柱　同
普請場の隅々照らす初日かな　同
木枯にホイスト高く吹れけり　同
寒月に鐵骨の塔そゝり立つ　鳩口
地均らしの響きに落ちつ冬椿　同
風や廣き空地の板圍ひ　同
普請場の焚火に布子焦しけり　同
バラックの夜燈暗きに時雨かな　同
新築の部屋親しまず寒夜かな　同
鐵骨を相打つ響き冬空へ　同
普請場の鎭されて冬の雲低し　同
假枠を取りも敢ねぬに霙かな　無外
冬籠草す建築瑣談かな　同
蛇腹塗る横顏寒き冬日かな　同
神樂堂再建の議など蕪汁　同
干菜粥食ふや厩を昔き終へて　同
トロ造る小手にたばしる霰かな　同
車庫建ちて枯野につゞく街となり　同
消防夫と棟梁を兼ね革羽織　同
隱居所を建つべく語る炬燵かな　同
簔懸けて風呂の北風塞ぎけり　同
吹雪く夜を描くや圓柱の現寸圖　同
溫室を設計したり吹雪く夜に　同
百貫の楷焚きにけり太子講　同



小春日に探る大極殿趾かな　同
建て終ねて板圍とる師走かな　素仙
甍るゝや屋根葺き終へ家のある　同
ペイント塗る白き柱や冬の蠅　同
冬雨や横堀川の木場人　同
普請場や朝より焚火たき止まず　同
朝霜に煉瓦積む手の赤きかな　同
鐵骨に釘打つ音が冬空に　同
左官屋の上塗急ぐ師走かな　同
棟上の冬空晴れてありにけり　同
短日や地つきの唄にくれて來し　同
短日の墨繩に落つ日ざしかな　同
工場の煙突積むに霰かな　同
鉋磨ぐ砥石薄氷光るかな　同
冬日斜鋸目立いそがしき　同
木遣唄冬の夜全く晴れてある　同
鐵骨にコンクリート流す冬晴れて　同
鳶口の光る冬日や木揚人　同
上棟の幣練る町の小春かな　木羊
建圖ひくに漸く更けて火鉢かな　同

風に高き足場のゆるゝかな　同
普請場に不寢番廻る寒夜かな　同
壁土の凍てをもどして焚火かな　同
層樓の成りて寒月冴ゆるかな　同
霜晴れに抗打ちの音頭響きけり　同
大工小屋の板塀隙ある霜夜かな　同
建てしばかの硝子障子に吹雪哉　同
遣り型終ねて泥鮪堀り居る大工哉　同
大霜に瓦を運ぶ足場かな　同
鉋磨ぐに屏いたはるや大工弟子　同
水盛りの目じるし入るゝ冬木哉　同
校舍成りてペンキの香ある冬木哉　同
錢湯も出來て家建つ枯野かな　同
生壁に籾の芽生へし小春かな　同
粕汁の大釜かけし大工部屋　同
圖板抱ねて粕汁すゝる大工かな　同
雨仕舞夜業に及ぶ師走かな　同
新築に土練る足に霜威かな　秀逸　同
木枯にホイスト高く吹かれけり　菊雄



バラックの夜燈暗きに時雨かな　鳩口
隱居所を建つべく語る炬燵かな　無外
棟上の冬空晴れてありにけり　素仙
短日や地つきの唄にくれて來し　同
凩に高き足物のゆるゝかな　木羊
大霜に死を運ぶ足場かな　同
生壁に籾の芽生ゑし小春かな　同
圖板抱ゑて粕汁すゝる大工かな　同

人　石屋だけ鞴祭に休みけり　菊雄

地　建終ゑて板圍とる師走かな　素仙

天　壁土の凍をもどして焚火かな　木羊

選者吟　凩に屋根や一日吹かれゐる

次號課題

◆新年雜詠
◆十二月二十日
◆一人三十句以內
◆住所氏名明記の事
◆『建築と社會投句』と必ず表記を要す
◆天地人に賞を呈す

投稿所　大阪東梅枝町　蘆田秋双



〔時報〕

都市計畫

◉大東京市の計畫

內務省立案の大東京都市計畫區域は東京驛を中心とする周圍十哩半徑のものにして市區は面積百九十七平方哩(現在の約六倍)に當り東京市外の八十二ヶ町村を編入し卅ヶ年の將來を期し水道下水道の都市計畫設計を樹立するものにして右原案は關係市町村の意見を徵し都市計畫東京地方及び中央委員會の議に附し內閣の認可を經て決定すべき筈なるが該區域に編入さるべき町村左の如し、但し現在の行政區域を撤廢し直ちに市に編入するものに非す

▲荏原郡　品川町、大森町、羽田町、大井町、大崎町、入新井村、蒲田村、六鄕村、矢口村、調布村、池上村、馬込村、平塚村、目黑村、碑衾村、駒澤村、世田ヶ谷村、玉川村

松澤村

▲豐多摩郡　淀橋町、中野町、千駄ヶ谷町、澁谷町、大久保町、戶塚町、落合村、代々幡村、野方村、和田堀內村、杉並村、井荻村

高井戶村

▲北豐島郡　板橋町、南千住町、岩淵町、巢鴨町、王子町、瀧ノ川町、日暮里町、志村、高田村、上練馬村、赤塚村、石神井村、三河島村、尾久村、西巢鴨町、上板橋村、下練馬村、長崎村、中新井村

▲南足立郡　千住町、西新井村、江北村、舍人村、江淵村、梅島村、綾瀨村、東淵江村、花畑村、伊興村

▲南葛飾郡　新宿町、龜戶町、大島町、吾嬬町、小松川町、松江村、瑞江村、葛西村、鹿本村、寺島村、木田村、龜青村、南綾瀨村、篠崎村、小岩村、金町村、水元村、奧戶村、隅田村、砂村

▲北多摩郡　砧村、千歲村

◉大大阪建設地域

遷延中の第二回都市計畫大阪地方委員會は近々開會を見るべき筈であるが之に提案すべき都市計畫の區域年度割、地域等の諸案は大阪府都市計畫課にて調査計畫中で地域に關する具體案も此程大體に於て決定したるもの、如く仄聞する所に依れば左の如くなりと。

大大阪の地域制は工業發展策の上に立ちて製品取引地たる商業地域の決定を爲し然る後住宅地域の選定を爲すべきなり、

此地域制定に際し全區域を內方地帶と外方地帶に分ち北新淀川より東及南は城東線に沿ひ、西は泉尾、市岡、春日出、傳法各町の圖內を假に內方地帶とし、其餘を外方地帶とす、而して、內方地帶は現在家屋の櫛比して理想的地域制を布くこと困難なれば單に修理に止め、外方地帶には萬全を期して制定するを得策とする內方地帶の中新淀川南岸より淀川、安治川沿岸迄の地には現在大小の工場數多散在し、北大阪は煤煙に包まれつゝあるに見ても此地の工場に適するを知る、依つて長柄運河に沿ひ約百五十間及傳法、西九條町の一部を工業地域に指定し、是より市郡界迄の地を混合地域其以南を商業地域とす、大阪の風向は北及東北よりするもの最も多けれども、中間に混合地域介在すれば商業地域に向て煙の飛來するは稀なるべく、又騷擾も逃れ得べし次に九條、難波に多數散在せる小工場は外方地帶迄退去するを至當とする此地は工場を存在せしむべき性質のものにはあらず只木津川は將來商港として發展の見込みもなければ大正橋以西兩岸約百五十間づゝ之を許し、他は商業地域とす、住宅地域には大阪監獄跡より、東、西寺町、淀川兩岸（櫻宮網島及其對岸）及大阪城高臺を南へ（東は寶町玉造線三十間手前迄西は寺町迄の間）茶臼山に到るの地を充て他は總べて商業地域とする、又大阪の地勢は大阪市を中心として、東及北は大阪市より尙低く、其低地を經て始めて高燥地に達す故に外方地帶の地域分劃は、北、神崎川の改修を見込んで其兩岸約百五十間づゝの範圍及佃以西を工業地域とし（此內海邊に特別工業地域を制定す）千里山及岡町豐中一帶を住宅地域とし、吹田、服部、豐中、十三の四點に日用品供給の爲め又十三より服部を經て豐中に、服部より吹田に吹田より大阪に通ずる幹線通路の兩側約五十間づゝを商業地域とす、新淀川北岸十三附近は工場地として發展の見込みもなければ勞々水源地保護を兼ねて柴島より稗島迄の地の住宅地域とし、他は混合地域とする、西は現在大阪築港及櫻島、鶴町一帶の地を貿易地帶（商業地域）とし春日出、九條、泉尾より各々の地に通ずる主要道路の兩側約七十間づゝを商業地域に充つるの外、概ね工業地域とし、內方地帶に接して少しく混合地域を設くるに止むる、木津川沿岸より住吉浦沿ひ港南電車認定線（兩側約三十間づゝを商業地域）迄を工業地域とし同線より阪堺國道認定線（兩側約卅間づゝを商業地域とす）迄を混合地域とし、現在阪堺國道亦兩側約三十間づゝを商業地域とし、兩街地の中間及現在街道以東田邊町迄の高臺を住宅地域とす、津守村及敷津村、墨江村の海邊に工場併び立ち住宅地域を襲ふ煤煙の防止策としては十三間川を改修し此地に工業の發展を期すると同時に、大堤防を築き防風林を設くることにより幾分の緩和を圖り度し東方は寢屋川を改修し兩沿岸を工業地域とするの外、守口、森小路、善源寺、生野、小阪、平野鄕、八尾、田邊の地及幹線道路の兩側約五十間づゝを商業地域とし、小阪、平野鄕以東を住宅地域とする以外他は暫らく混合地域に止む工業地域は南より海岸及新淀川、神崎川に沿ひ北に廻り、商業地域は內的商業及外的商業に分けて路線により連絡を保ち住宅地域は北大阪より高

臺を南へ大和川に到る、千里山、岡町、豐中のものは高級住宅に充て、十三附近のものは中流以下の用に供するものとすかくして、各地域の割合を見れば、工業地域二十パーセント、商業地域二十パーセント、住宅地域三十パーセントにして混合地域は三十パーセントなり、混合地域餘りに多き感あれども、東部のもの及北部のものは概ね商業的開發を見るべく西部のものは工業的發展をなす見込みなるが故に純然たる混合地域は僅少となるべし

而して大正七年末大阪市の職工數は全人口の十パーセント、工場敷地は全面積の十二パーセントなる故に大大阪の工業地域として二十パーセントは當を得たるものと見るべく、且大阪の工業は染織工業（四十パーセント）機械工業（三十一パーセント）を大部分とする關係上。河海に隣接せる位置を最も適當とす、只住宅及商業地域が風向上　工業地域の煙害より逃れ得ぬは不都合の感あれども、工業を以て立つ都市少々の煤煙は免れざるべく又一般工業が將來何時迄も煙を噴出するものとも思はれず、工業の發展に連れ煤煙防止方法の如きも案出されるならん。

◉大阪都市計畫經過

內務省にては來月初旬開會する都市計畫大阪地方委員會に附議すべき大阪都市計畫年度割財源及び實施路線に付き審査の結果昨年度末決定せる大阪都市計畫設計路線を全部實施するには總經費約二億圓を要するを以て急を要する路線（全線の約十分の七）を選定し同工費約一億四千萬圓を以て大正九年度より十五年度の七箇年間に完成せしむる事に決定したり尙ほこれが財源には一時市債を起し償還財源には土地增價稅、間地稅、自動車稅、國庫補助、電車經濟分擔金、都市計畫事業に依る被利益者の負擔等を以て充當すべく本年度割事業費は約二百萬圓の豫定なりと。

◉都市計畫新施行地

都市計畫は東京、大阪、橫濱、神戶、名古屋京都の指定六大都市に限られあるが他の都市より內務省に同計畫實施認可を申請し來るもの多く既に廿餘都市に及べり重なるものは下關、福岡、吳、廣島、長崎姬路、尼崎、八幡、新潟等なるが當局は目下之が銓衡中にして本年末か若くは明春早々に前田都市計畫課長內田、野田兩內務技師等は夫々實地視察のため先づ關西方面に赴く筈なりと右につき前田課長は語る

實施認可を申請して來た都市については人口の密度及び增加等、商工業發展の程度、衛生、保安等につき其資格の有無を調査中で歷史もあり且實際に大きな都市であつても實施の必要を認めない所もある一例を擧げると仙臺金澤等は都市としての施設が行屆いて居るから將來は別として直に都市計畫を實行する必要はない之に反して新都市である九州八幡等は製鐵所の關係で多數の勞働者が居住し甚だしい住宅難を感じ六疊一間の家に十人の家族が住んでゐるものもある事が國勢調査の結果明かとなつた從つて衛生、交通等にも危險が多いので是非實施の必要がある斯樣な譯で今度認可されるのでは新都市が多い見込みである數は十都市位が適度であらう

◉都市計畫の一財源

都市計畫の年度割及び財源等につき當局と打合せの爲め上京中なりし大阪市都市計畫

部岡崎早太郎氏は去る二十一日歸阪したるが其談に依れば都市計畫の財源として曩に大藏省に對し市内の通行稅年額約百萬圓を交附せられたしとの希望を提出し置しが財政上の都合にて交付不可能の由につき其の補塡策として府にて徵收せざるに決定したる遊興稅は最初百分の五徵收する筈なりしを百分七、五に增率することになりたり尙都市計畫區域に就ては府側は堺市を包含して實行せんとし市側は大和川を以て限界とせんとし兩案ありて意見一致せざるが當局者の意嚮としては非公式の調査委員會にても設け雙方協議の上圓滿に決定しては如何との事なりしを以て何れ其の方法に依ることゝなるべしと

法案

◉港灣法案の内容

神戸横濱下關等の海岸港灣全部に對しては稅關其他の關係を有する爲め大港灣行政監督は大藏大臣の權限内にありしが其後大正六年に至り閣議の結果國家の發展を圖る爲め港灣行政統一を圖る内務大臣の權限にて行ふを最善と爲し爾來之が法律的效力施行の必要に依り内務省當局は港灣法を制定すべく案の起草を急ぎつゝありしが今回七十五條に亘る略ぼ成案を得たれば曩日開催の土木出張所長會議に諮問し而して省議閣議を經法律として發布すべく今期議會に提出の方針なるが提出は多分議會終了間際なるべしと

◉建築組合法案内容

内務省にては社會政策上の新施設として第四十四議會に建築組合法案を提出すべく鋭意調査中なるが右組合法は全文三十六七箇條より成り其骨子は小住宅難の解決にあるが故に

一、組合は公益に關する社團法人とする事
二、有限責任たる事
三、組合を組織せんとするものは内務大臣の許可を得る事
四、政府は組合に對して補助金の下附若くは家屋稅、登錄稅の減免等の保護を與ふる事
五、低利資金を供給して一時に小住宅を建築せしむるか或は賴母子講的組織の下に組合員の出資額を主として市が先づ小住宅を建築せしめ政府より之に低利資金を供給して組合を保護する事
六、組合組織の資格は一定の人數若くは同一地區内に住するものたる事

等なり此目的は晩近都市の著しく發達膨脹せるに伴ひ住宅問題の解決殊に中産階級以下無資産階級の住所に充つべき住宅の非常なる不足を來し之が解決は獨り社會政策上のみならず風儀上及び衛生上より見ても忽緒に附すべからざるものなるが最も甚しき住宅難に陷れる東京市に於てすら見るべき住宅建築機關としては單に東京府住宅協會及び東京建築組合等二、三の團體に過ぎず政府は此際根本的に之れが解決を爲すべく一定の法規を制定して極力住宅建築の普及發達を促進し以て小住宅を潤澤にせんとする計畫なり從つて政府當局者は出來得る限り保護政策を講ぜんとす其の具體的方法としては先進各國の法規を參考とし國庫の補助若くは租稅の免除等の方策を取るならん試みに之を英獨兩國に就いて見るも獨逸は以上の如き方法を以て建築組合の助成發達を促進せる結果千九百八年（それ以後不明）において八百四十八箇の建築組合（十五萬

人の組合員）と此外株式組織のもの六十一個有限責任のもの六十箇を有し又英國は數年前の調査においてすら組合數四五千に達し百萬に近い組合員を有して善々小住宅の建築に努力しつゝあり、之等の實狀に鑑み內務當局に於ては愈々建築組合法の制定を見其助成發達を促進せんとするにあれば今日の如き小住宅難を大に緩和することを得んか

建築

◉議院建築の行惱

國政を議する帝國議會は卅年來あの見窄らしき假建築で押し通し來れり現在の儘にては帝國の威嚴に關する事夥しき故に本建築の急務たる事が政府にも國民の間にも多年問題となり來れり國勢發展に伴ふ他の事業が忙しき爲め議院建築の方へは却々御鉢が廻らざりしが漸く時機到來して大正七年七百五十萬圓の豫算を以て十年計畫に依り永田町の敷地へ帝國の威信を保つに充分な壯麗善美を盡せる大建築を建る事に定り大正八年には設計の懸賞募集を行ひ大正九年には敷地の地搾へをなし十六年度迄には竣成せしめ昨今工事に非常な行惱を生じて果して豫定の如く出來上るか如何か判らなくなり衆議院事務局では頭痛鉢卷の姿なりそれは物價騰貴の爲め最初の豫算では何も出來ざる事になり七百五十萬圓の豫算は物價の最も低廉なりし大正二年より六年迄の平均を取つて編成したものなるを以て諸材料より人夫賃に至る迄極端に騰貴を示す昨今では殆ど四倍の二千七八百圓と云ふ莫大な經費を要する事となれりされば七百五十萬圓では燒石に水で何うする事も出來ず事務局では大藏省臨時建築事務局と協議して現在の物價より三割を引ける案を立て一躍二千萬圓の建築費を今度政府に要求する事となれるが實際はそれ以上要するが果して二千萬圓で工事を完成せしむるや否や頗る疑問なり、併し此二千萬圓も只要求したゞけの事にして政府が之を容れるや否や大疑問なり、本年は大藏省が極端に緊縮方針を取れる上に他に忙しい事業があれば議院の方など顧みて居る譯に行かず此も二千萬圓の要求が容れられずとすれば同年敷地の地均しをした許りで大建築も徒に空中樓閣で終り敷地には青草が再び茫々生ずる事になる故奧議長と寺田書記官長は大きな設計書を抱へて困り抜いて居れりとの噂あり

公益團體

◉日本建築協會の活動

日本建築協會は去る十一月四日より同二十日迄夜間に於て講習會を催し甲部に於て佐藤工學士の「古代埃及ノ文化ト建築」置塩工學士の「大倭時代ノ文化ト建築」葛野工學士の「住宅ニ就テ」乙部には本多工學士の「鐵骨構造法」增田工學士の「鐵筋コンクリート構造法」波江工學士の「鐵筋コンクリート施工法」等の課目なりしが八十五名許りの聽講者ありき次いで十一月二十二日大阪市天王寺公會堂に於て市街地建築法令に關する講演會を催し池田、中西、置塩井尻各建築監督官の講演ありて四百三十餘名の聽講者ありしが孰れも建築業關係者のみにて頗る熱心に聽講せり更に十二月一日より同八日迄市街地建築物法令に關する講習會開催中なるが之も亦頗る盛況なり尙同協會は來春三四月の交に於て建築展覽會を催すべしと、



編輯

△愈々本號にて第三輯を擧る事となりました。第四輯よりは、一層外觀も內容も刷新をする事になりまして、編輯擔任者は種々努力して居りますから、折角御期待を冀ひます。併し、行屆かぬ處も到らぬ點もありましようから、會員各位からも御注文なり御意見なりを御寄せ被下い。

會合

◎第三回秋季大會

日時　十月三十一日

順序　午前七時三十分大阪湊町驛に參集同七時五十五分發にて、法隆驛に下車、法隆寺に到りて古建築物及寶物を參觀し、晝食後同寺境內『金堂』及『五重塔』を背景として一同紀念撮影をなし、更に午後一時半法隆寺驛發列車にて奈良驛に下車し、各自由行動を執りたる後、有志者は豫てのプログラムに從ひ午後五時迄に奈良ホテルに參集、同六時過食堂を開きて晩餐會を催し同八時頃宴を撤して直ちに解散せり。

出席者

伊藤敏夫、池田助藏、友井喜四郎、竹村近衛、瀧村源三郎、呼子正、伴武夫、久米平藏、白戸茂起、前田隆藏、小原忠隆、駒井喜兵衛、村野藤吉、木村梅四郎、守山伊望設、樂貞雄、山本長五郎、弓削平太郎、足立彌一郎、小西兼吉、杉原茂、德永英次、吉井長七、吉木久吉、佐藤四郎、西岡道臣、谷民藏、森篤次郎、原科甚、友田蕭、永田岩次郎、澁谷五郎、野呂長四郎、平塚鑑吉、西口長藏、土瀧辨吉、筒井武雄、小川久太郎、有山福重郎、平島末吉、川島甚兵衛、守山廉藏、野々山政金、鎭西善平、岡本新次郎、倉崎多三郎、間猪三郎、河村種三郎、高堂德治、中川長藏、杉田新五郎、山添繁藏、坂来吉、岡部顯則、田中勘、池谷仙太郎、左野金三、田原三千男、齋藤又吉、岩田丈一、前田武正、田村市郎、武田經一、富永眞一、高柳家平、濱田正藏、池上英次郎、新澤正綱、森西瀧太郎、熊取谷熊次郎、南弘

三、飯田忠三郎、坪井誠一、大坊榮助、福永佐利吉、葛野壯一郎、波江悌夫の諸氏（以上敬章渡順）

事務係　江村、越山、山崎、渡島

◉理事會

日時　十一月十二日午後五時——八時半

會場　當事務所

出席者　宗、舟橋、葛野、池田各理事、江村

記事　（一）別項の通り新入會員の詮衡をなす（二）大阪府に於て催さゝる市街地建築物法施行細則制定に就ての諮問會に、當協會を代表して野村一郎氏及宗理事出席の事に決す（三）十一月十六日を以て上記委員の打合せ會を催し、第一部委員列席の事に取り決む（四）十一月二十日より同二十五日迄の間に於て、市街地建築物法に關する講演會を開催する事（五）十二月一日より同八日迄の間（日曜日休）市街地建築物法令に關する講習會を催す事。（六）以上速記を取りて出版する事（七）會則及細則中下部の通り變更の具案をなす事（イ）理事長は理事中より互選（ロ）第二十條第二項の「金百圓」を「金二百圓」と變更（ハ）細則中第七條を削除（ニ）其他四件

◉打合せ會

日時　十二月十五日午後五時——九時

會場　當事務所

出席者　池田實、木子七郎、前田武正、前田良馨、新海正綱、葛野壯一郎、瀨戸文吾、光安梶之助、須川庸太郎、宗兵衛、內藤太郎、吉木久吉、波江悌夫の諸氏

記事　前記市街地建築物法施行細則制定に就て打合せをなす。

◉市街地建築物法令に關する講演會

日時　十二月二十二日午後六時——十時

會場　大阪市天王寺公會堂

記事　當日內務省建築監督官內田博士の講演ある筈なりしが俄に差支生じて來阪なかりき、當日は池田、中西、井尻、置塩各建築監督官の講演ありて、來聽者四百三十名。

◉第一回講習會

日時　十一月四日より同二十日迄毎夜六時——九時

會場　當事務所

課目及講師

（甲部）古代埃及ノ文化ト建築（西洋建築史）

工學士　佐藤四郎氏

同　大倭時代ノ文化ト建築（日本建築史）

工學士　置塩章氏

同　工學士　葛野壯一郎氏

（乙部）鐵骨構造法

工學士　本多二郎氏

同　鐵筋コンクリート構造法

工學士　增田清氏

同　鐵筋コンクリート施工法

工學士　波江悌夫氏

聽講者　八十名人（內會員、普賛、終賛、特賛六六人外來一九人）

◉例會

日時　十一月二十七日午後六時半—八時

會場　當事務所

出席者　高堂德治、坪井誠一、光安梶之助、前田武正、森篤次郎、酒井勇三郎、吉木久吉、原科準平、橫濱勉、武田經一、吉井長七、小笠原朋、雜波英吉、波江悌夫、宮飼克二、池田實、高柳宗一、小川久太郎、中西甚作、瀨戸文吾、園部文雄の諸氏

記事　池田理事より（一）第一回講習會の實績（二）建築法令に關する講演會の實績（三）十一月中新入會員（四）十二月一日よりの建築法令に關する講演會開催決定等に就て報告あり（五）了つて、當日は出席者規定數に足らざるも、左の會則及細則中改廢の件を假決議し、原案通り

可決、(六)波江氏より動議あつて左記(三)の提案に對して可決せり

(議案第一號)**會則中變更ノ件**

一　會則第十二條第一項の次に左の一項を加ふ
　理事長は理事中より互選す
可決

二　會則第二十條第二項の「金百圓」を「金二百圓」と變更す
　備考　第二十條　會員は會費年額金十八圓を本會に醵出す
　(中略)
　一時に金百圓以上を出すときは爾後前項の會費を免る
右可決

(議案第二號)**細則中削除ノ件**

細則第七條を削除す
　備考、第七條　會頭副會頭は當分之を缺く
右可決

三　會則第十一條第一項第四號「六名」を「九名」に改む
右可決

四　字句の修正は理事會に委す
右可決

會員消息

◉新入會員

十一月中左の新入會員ありたり。

(紹介)森下新造、久保田種吉、布谷惣平の諸氏。

(會員)姫野武、深田虎太郎、藤井庄作の諸氏。

(賛成)野口德三郎、長谷川正義、小池光義、藤村愛資、石野岩藏、笠井新十郎、杉田新五郎、今井一六、原田忠男、丸小野貞治、阪東義三の諸氏。

◉住所變更

(會員)　(移轉先)

池田寶氏　大阪市西區市岡町五三六官舍

佐藤節雄氏　東京市京橋區三十間堀三丁目三番地鴻池組支店

谷口廉兒氏　堺市大濱南公園三八號

清水榮二氏　兵庫縣武庫郡六甲村八幡濱五二

淺井新一氏　名古市中區正木町一九八

內藤榮氏　東京府豐多摩郡西大久保二〇七根緒正安方

藤本好雄氏　奈良縣吉野郡吉野村飯貝山本方

藤井令三氏　大阪市南區難波櫻川町二ノ一〇九六

(普賛)　(移轉先)

元喜藏氏　米澤市南堀端町縣官舍

進藤朝一氏　兵庫縣武庫郡西灘村字稗田一六五

安積久助氏　北海道札幌區北十條西五丁

中村角之助氏　大阪市北區新川崎町一

永江亘氏　造幣局官舍第三十五番

村上徹一氏　東京市麻布區富士見町五三

伴野貞三氏　大阪市西區築港二條通四丁目三ノ笹尾勇方

　大阪府西成郡中津町下三番二十五番地

寄贈圖書

建築雜誌第三四輯　第四〇六號(建築學會)
建築世界　第十四卷第十一號(建築世界社)
住宅　第九卷第十一號
材木新聞(每號)
建築評論　第二卷第一〇號(建築評論社)
會報　第五號(日本工業俱樂部)
建築と新材料　第三號(其社)
新住宅　十一月號(決洋社)
帝國鐵道協會々報　第二十一卷第九號(帝國鐵道協會)
土木建築　第三卷第十一號(其社)
商工時報　第三十二號(大阪市役所)
通俗衛生　第二六六號(大阪府衛生會)
日本金屬新聞　每號(其社)

役員及職員

理事長	片岡安
理事	宗兵藏（主記）
	池田寅（編輯）
	葛野壯一郎（編輯）
	吉井長七（編輯）
	舟橋喜一（主計）
編輯補	設樂貞雄
	波江悌夫
	佐藤四郎
書記	江村郊
	越山逢繁
	波島壽夫
	山崎萬夫

會員	一八七	會員（地方）	六二
名譽贊助員	六〇	終身贊助員	四三
特別贊助員	一二	普通贊助員	二八七
合計	六五一		

本誌及廣告料定價表

本誌	冊數	定價	郵稅
	一冊	金五拾錢	貳錢
	十二冊	六圓	貳拾四錢

廣告料	種別	金額
	半頁	八圓
	一頁	拾五圓

特別頁モ料金一定シアリ御照會アリ度シ

大正九年十一月三十日印刷（毎月壹回）
大正九年十二月一日發行（一日發行）

大阪市大阪市外中津町下三番一九八番地ノ一
發行兼編輯人 江村恒一

大阪市東區內淡路町地二丁目卅一番
印刷兼印刷人 江村恒一

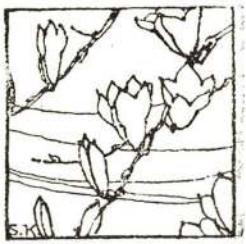
大阪市西區京町堀上通一丁目不動貯金銀行ビルデイングヲ為
印刷所 大阪活版所

事務所 日本建築協會
電話 土佐堀四、二九三三番
振替口座大阪三九、九七五

大阪市東區今橋一丁目二番地
發行所 片岡建築事務所內

大阪市西區京町堀羽子板橋北
特約販賣店 柳々堂書店
電話（土佐堀二四四〇番）
振替口座二〇八四番

市街地建築物法施行規則



市街地建築物法施行規則

（大正九年十一月九日内務省令第三十七號）

第一章　通則

第一條　本則ニ於ケル用語ハ左ノ例ニ依ル

一　居室トハ居室ノ用ニ供スル室ヲ謂フ
玄關、廊下、階段室、外套室、便所、手洗所、浴室、物置、納戸、暗室ノ類ハ居室ト看做サス

二　地階トハ其ノ床面地盤下ニ在ル階ヲ謂フ但シ其ノ床面地盤面ヲ下ルコト一尺未滿ノモノハ之ヲ第一階ト看做ス

三　屋階トハ屋根裏ニ設ケタル階ヲ謂フ

四　床高トハ床面ヨリ其ノ直下地面迄ノ距離ヲ謂フ

五　階高トハ其ノ階ノ床面ヨリ其ノ直上階ノ床面迄ノ高ヲ謂フ但シ最上階ニ在リテハ其ノ天井高ヲ謂フ

六　天井高トハ室ノ床面ヨリ天井迄ノ高ヲ謂フ
但シ一室ニシテ天井高異ル部分アルトキハ其ノ室ノ床面積ヲ以テ容積ヲ除シタルモノヲ謂フ

七　外壁トハ建築物ノ外側ヲ構成スル壁體ヲ謂フ

八　間壁トハ建築物ノ内部ヲ區劃スル壁體ヲ謂フ

九　界壁トハ接續建築物ヲ區劃スル壁體ヲ謂フ

十　不燃材料トハ煉瓦、石、人造石、「コンクリート」、石綿盤、瓦、金屬、陶磁器、硝子、「モルタル」、漆喰ノ類ヲ謂フ

十一　耐水材料トハ煉瓦、石、人造石、「コンクリート」、鉛、「アスファルト」、陶磁器ノ類ヲ謂フ

十二　石造トハ石造、人造石造及「コンクリート」造ヲ謂フ

十三　壁體ノ耐火構造トハ左ノ各號ノ一ニ該當スルモノヲ謂フ

イ　厚一尺以上ノ煉瓦造又ハ石造

ロ　厚四寸以上ノ鐵筋「コンクリート」造
鐵骨造ノ塲合ト雖壁體ノ厚ハ本號イ又ハロノ規定ニ依ル

十四　床又ハ屋根ノ耐火構造トハ左ノ各號ノ一ニ該當スルモノヲ謂フ

イ　鐵筋「コンクリート」造

ロ　鐵骨ヲ有スル鐵筋「コンクリート」造、煉瓦造又ハ石造

ハ　煉瓦造又ハ石造

ニ　最下階ノ床ニアリテハ土間、叩、

石敷ノ類

十五　柱ノ耐火構造トハ左ノ各號ノ一ニ該當スルモノヲ謂フ

イ　煉火造又ハ「コンクリート」造

ロ　鐵筋「コンクリート」造

ハ　鐵柱ニシテ耐火的ニ有効ナル被覆ヲ爲シタルモノ

ニ　石造ニシテ地方長官ノ承認セルモノ

十六　階段ノ耐火構造トハ左ノ各號ノ一ニ該當スルモノヲ謂フ

イ　鐵筋「コンクリート」造、煉瓦造又ハ石造

ロ　鐵骨ヲ有スル鐵筋「コンクリート」造、煉瓦造又ハ石造

ハ　鐵道

十七　甲種防火戸トハ左ノ各號ノ一ニ該當スルモノヲ謂フ

イ　鐵製ニシテ鐵板ノ厚五厘以上ノモノ

ロ　鐵骨「コンクリート」造又ハ鐵筋「コンクリート」造ニシテ厚一寸二分以上ノモノ

ハ　厚五寸以上ノ土藏扉

地方長官ハ防火戸ノ構造ノ種類ニ依リ適當ト認ムルモノニ對シ前各號ノ規定ニ拘ラス別段ノ定ヲ爲スコトヲ得

十八　乙種防火戸トハ左ノ各號ノ一ニ該當スルモノヲ謂フ

イ　鐵製ニシテ鐵板ノ厚五厘未滿ノモノ

ロ　鐵骨「コンクリート」造又ハ鐵筋「コンクリート」造ニシテ厚一寸二分未滿ノモノ

ハ　木造又ハ鐵造ニシテ屋外ニ面スル部分ヲ厚一寸以上ノ「モルタル」漆喰又ハ適當ナル厚ノ石綿盤ノ類ヲ以テ被覆シタルモノ

地方長官ハ防火戸ノ構造ノ種類ニ依リ適當ト認ムルモノニ對シ前各號ノ規定ニ拘ラス別段ノ定ヲ爲スコトヲ得

十九　建築物ノ大修繕トハ壁體、柱、小屋若ハ基礎ノ過半ノ修繕又ハ之ニ準スル構造上主要ナル部分ノ修繕ヲ謂フ

二十　大變更トハ壁體、柱、床、小屋、基礎等構造上主要ナル部分ノ變更ヲ謂フ

第二條　本則ノ適用ニ關シ土地又ハ建築物ニ關スル測算方法、呼稱等ニ付疑義ヲ生シタルトキハ地方長官之ヲ決定ス

第三條　本則ニ規定セル建築物採光、換氣防火、避難、清潔、强度ニ關スル構造設備ハ常ニ有效ニ保持スヘシ

第二章　建築物ノ突出部

第四條　市街地建築物法第九條但書ノ建築物ノ前面突出部ハ左ノ範圍内ニ於テ建築線ヨリ突出セシムルコトヲ得但シ特ニ地方長官ノ許可ヲ受ケタル場合ノ外前面建築線間ノ距離ノ二十分ノ一ヲ超過スルコトヲ得ス

一　蛇腹、軒、小塔、出窓、標旗、標燈、招牌其ノ他之ニ類スルモノハ路面上十尺以上ニ在ル場合ニ限リ三尺迄

二　出入口ノ階段凹庭ノ手摺地覆、腰石、根石其ノ他之ニ類スルモノハ一尺迄

第五條　市街地建築物法第九條但書ノ建築物ノ基礎ハ地方長官特ニ指定スル場合ヲ除キノ外道路幅ノ境線ヲ超エサル範圍内ニ於テ建築線ヨリ突出セシムルコトヲ得

第六條　裝飾塔、物見塔、屋窓、昇降機塔、水槽等建築物ノ屋上突出部ニ付テハ市街地建築物法施行令第四條乃至第八條ノ高ノ最高限ノ五分ノ一迄ハ建築物ノ高ニ之ヲ

算入セス但シ其ノ算入セサル部分ノ最大幅ハ建築物ノ高ノ五分ノ一ヲ、其ノ最大面積ノ合計ハ建築面積ノ十分ノ一ヲ超過スルコトヲ得ス

第三章　建築物ノ構造設備

第一節　一般構造設備

第七條　建築物ノ敷地ハ其ノ接スル道路境界ニ於ケル路面ヨリ高カラシムヘシ但シ建築物ノ用途又ハ土地ノ狀況ニ依リ地方長官本條ノ規定ニ依リ難シト認メ又ハ必要ナシト認メタル場合ハ此ノ限ニ在ラス

第八條　建築物ノ敷地濕潤ナルトキ又ハ出水氾濫ノ虞アルモノナルトキハ地方長官其ノ地盤面ノ地揚高又ハ建築物ノ床高ニ關シ必要ナル命令ヲ發シ又ハ處分ヲ爲スコトヲ得

第九條　建築物ノ敷地ニハ其ノ敷地内ニ於ケル雨水及汚水ヲ排泄又ハ處理スヘキ適當ナル設備ヲ爲スヘシ

第十條　下水溝、下水管、溜桝ノ類ハ耐水材料又ハ地方長官ノ承認スル材料ヲ以テ構造スヘシ

第十一條　便所、畜舍等ヨリ排出スル汚物ニ對シ汚物溜ヲ設ケムトスルトキハ地方長官ノ認可ヲ受クヘシ

汚物溜ハ耐水材料ヲ以テ構造シ適當ナル防水裝置ヲ施シ且覆蓋ヲ設クヘシ

第十二條　便所、畜舍等ヨリ排出スル汚物ハ地方長官ノ指定スル下水道ニ非サレハ之ニ放流スヘカラス但シ地方長官ノ承認スル汚物處理槽ヲ設クルトキハ此ノ限ニ在ラス

第十三條　汲取便所ノ構造ハ左ノ規定ニ依ルヘシ

一　糞尿壺及尿樋ハ不滲透質ノ材料ヲ以テ造リ糞尿壺ノ上口周圍ハ厚三寸以上ノ「コンクリート」ヲ以テ漏斗狀ニ作リ不滲透質ノ材料ヲ以テ上塗ヲ爲スルコト

二　床下ハ周圍ニ耐水材料ヲ以テ障壁ヲ設ケ他ノ部分ト遮斷スルコト

三　汲取口ハ其ノ下端ヲ其ノ接スル地盤面ヨリ三寸以上高クシ且之ヲ直接道路ニ面セシメサルコト

第十四條　井戸ト汲取便所及汚物溜トノ距離ハ三間以上ヲ有セシムヘシ但シ地方長官其ノ構造設備又ハ土地ノ狀況ニ依リ衛生上支障ナシト認メタルトキハ此ノ限ニ在ラス

地方長官ハ井戸ノ位置、構造又ハ設備ニ關シ前項ノ外必要ナル規定ヲ設クルコトヲ得

第十五條　建築物ノ壁體ニシテ直接土壤ニ接觸スル部分ハ耐水材料ヲ以テ構造スヘシ但シ門、障塀其ノ他輕微ナルモノハ此ノ限ニ在ラス

第十六條　居室ノ床地盤面下ニ在ル建築物ニ在リテハ最下階ノ居室ノ床又ハ其ノ床下ハ耐水材料ヲ以テ構成シ其ノ壁體及床下ニハ適當ナル防濕方法ヲ施スヘシ

第十七條　居室ノ床高ハ一尺五寸以上ト爲スヘシ但シ床又ハ床下ニ「コンクリート」叩其ノ他適當ナル防濕方法ヲ施シタルモノハ此ノ限ニ在ラス

居室ノ床木造ナルトキハ其ノ床下ニハ適當ナル換氣方法ヲ講スヘシ

第十八條　居室ノ天井高ハ七尺以上ト爲スヘシ

第十九條　居室ハ其ノ室面積ノ十分ノ一以上ノ有效面積ヲ有スル窓又ハ之ニ代ルヘキ採光面ヲ有スヘシ

前項ノ採光面幅三尺以上ノ緣側ノ距ッル

場合ハ其採光面積ノ二分ノ一ヲ有效面積ト看做ス此ノ場合ニ於テ濡縁ハ縁側ト看做サス

第一項ノ採光面積ハ左ノ各號ニ該當スル部分ニ限リ有效ナルモノト看做ス但シ道路、公園、廣場等ノ空地ニ面スルモノニ在リテハ此ノ限ニ在ラス

一　其ノ部分ヨリ直上屋根面（直上屋根面ナキトキハ壁頂迄以下同シ）ニ至ル高ハ住居地域内ニ於テハ其ノ面スル隣地境界線迄ノ水平距離ノ二倍半ヲ、商業地域内ニ於テハ五倍ヲ、住居地域及商業地域外ニ於テハ四倍ヲ超過セサルコト

二　其ノ部分ヨリ直上屋根面ニ至ル高ハ住居地域内ニ於テハ同一敷地内ニ在ル對向壁迄ノ水平距離ノ二倍半ヲ、商業地域内ニ於テハ五倍ヲ、住居地域及商業地域外ニ於テハ四倍ヲ超過セサルコト

三　其ノ部分ヨリ直上屋根面ニ至ル高ハ住居地域内ニ於テハ同一敷地内ニ在ル對向壁迄ノ水平距離ノ二倍半ヲ、商業地域内ニ於テハ五倍ヲ、住居地域及商業地域外ニ於テハ四倍ヲ超過セサルトキハ此ノ限ニ在ラス

主トシテ住居ノ用ニ供スル建築物ニ在リテハ住居地域外ニ在ルモノト雖モ前項ノ適用ニ關シ住居地域内ニ在ルモノト看做ス

軒、庇其ノ他著シク採光ヲ妨クルモノアリト認メ又ハ衛生上特別ノ必要アリト認ムルトキハ地方長官ハ採光面ニ關シ特ニ其ノ面積ノ增加ヲ命スルコトヲ得

第一項ノ適用ニ於テ天窓ハ其ノ面積ヲ三倍ニ換算ス

第一項ノ面積ニ相當スル窓又ハ之ニ代ルヘキ採光面ノ部分ハ其ノ上端ヲ床面上五尺七寸以上ト爲スヘシ

隨時開放シ得ル襖、障子ノ類ヲ以テ仕切リタル二室ハ本條ノ適用ニ關シ之ヲ一室ト看做ス

第二十條　居室ニ於テハ直接外氣ニ面シテ室面積ノ二十分ノ一以上ニ相當スル面積ヲ開放シ得ヘカラシムヘシ但シ之ニ代ルヘキ適當ノ換氣裝置アルトキハ此ノ限ニ在ラス

前條第五項、第七項及第八項ノ規定ハ本條ニ之ヲ準用ス

第二十一條　特殊ノ用途ニ充ツル作業室ニシテ已ムヲ得サルモノハ地方長官ノ許可ヲ受ケ第十七條第十九條及第二十條ノ規定ニ依ラサルコトヲ得

第二十二條　浴室及便所ニハ採光換氣ノ爲直接外氣ニ面シ適當ナル窓ヲ設ケ又ハ之ニ代ルヘキ設置ヲ爲スヘシ

第二十三條　地方長官ハ建築物ニ對シ防疫上必要ナル防風其ノ他ノ設備ヲ命スルコトヲ得

第二十四條　道路ニ面スル出入口及窓ノ扉ハ開閉ノ際ト雖モ建築線ヨリ突出セサル構造ト爲スヘシ但シ路面上十尺以上ニ在ルモノハ此ノ限ニ在ラス

第二十五條　階段ノ構造ハ左ノ規定ニ依ルヘシ但シ避難階段其ノ他特殊ノ用途ニ供スルモノハ此ノ限ニ在ラス

一　階段及踊場ノ幅ハ內法二尺五寸以上ト爲スコト

二　蹴上七寸五分以下踏面五寸以上ト爲スコト

三　高十五尺ヲ超ユルモノニ在リテハ高十五尺以內毎ニ踊場ヲ設クルコト

階段ノ用途ニ依リ危險ナリト認ムルトキ

ハ地方長官ハ前項ノ規定ニ拘ラス必要ナル命令ヲ發シ又ハ處分ヲ爲スコトヲ得

第二十六條　地方長官保安上必要ト認ムルトキハ階段ノ設置ヲ命シ又ハ其ノ配置若ハ設備ノ變更ヲ命スルコトヲ得

第二十七條　屋根ハ耐火構造ニ非サルトキハ不燃材料ヲ以テ覆葺スヘシ但シ「モルタル」塗、漆喰塗ノ類ヲ以テ覆葺セムトスルトキハ地方長官ノ許可ヲ受クヘシ茶室、四阿ノ類ノ屋根又ハ輕微ナル庇ノ類ハ土地ノ狀況ニ依リ地方長官ノ許可ヲ受ケ本條ノ規定ニ依ラサルコトヲ得

第二十八條　地方長官ハ物干、物見臺等屋上工作物ニ關シ必要ナル規定ヲ設クルコトヲ得

第二十九條　建築面積二百坪以上ノ建築物ニハ建築面積二百坪以内毎ニ防火壁ヲ設クヘシ但シ外壁、床、屋根、柱及階段耐火構造ナルトキ又ハ地方長官其ノ用途ニ依リ已ムヲ得スト認ムルトキ若ハ土地ノ狀況ニ依リ特ニ支障ナシト認ムルトキハ此ノ限ニ在ラス

第三十條　前條防火壁ノ構造ハ左ノ規定ニ依ルヘシ

一　耐火構造ト爲スコト

二　兩端ハ外壁ニ逢スルコト但シ木造建築物ニ在リテハ之ニ近接スル木部ヨリ一尺以上屋外ニ突出セシムルコト

三　上端ハ屋根面ニ直角ニ測リ一尺五寸以上屋上ニ突出セシムルコト但シ耐火構造ノ屋根ニ在リテハ屋上ニ突出セシメサルコトヲ得

四　各開口ノ幅及高ハ九尺以下ニシテ甲種防火戸ノ設備ヲ有スルコト但シ特殊ノ用途ニ充ツル建築物ニ在リテハ地方長官ノ認可ヲ受ケ幅及高ヲ十二尺迄ト爲スコトヲ得

五　凹壁溝ヲ設クル場合ト雖モ其ノ部分ノ壁厚ハ煉瓦造及石造ニ在リテハ七寸以上、鐵筋「コンクリート」造ニ在リテハ三寸五分以上ト爲スコト

第三十一條　防火壁アル建築物ニ於テ屋窟裝飾塔等ノ屋上突出部木造ニシテ延燒ノ虞アリト認ムルトキハ地方長官ハ其ノ構造ニ對シ防火上必要ナル命令ヲ發シ又ハ處分ヲ爲スコトヲ得

第三十二條　三階建ノ木造又ハ木骨造建物ノ防火壁ハ鐵筋「コンクリート」造又ハ鐵骨造ト爲スヘシ

第三十三條　壁附煖爐ノ構造ハ左ノ規定ニ依ルヘシ

一　爐胸ハ堅牢ナル基礎ノ上ニ築造シ木造建物ニ在リテハ上部ヲ積出シト爲サヽルコト

二　薪炭ヲ使用スル壁附煖爐ニ在リテハ焚口下及其ノ前方一尺以上左右各五寸以上ノ部分ノ床ヲ、其ノ他ノ壁附煖爐ニ在リテハ焚口下ノ部分ノ床ヲ不燃材料ニテ構造シ其ノ下方八寸以内ニハ燃實材料ヲ取付ケサルコト

三　壁附煖爐ノ煙突ニシテ屋内ニ在ル部分ハ鐵筋「コンクリート」、石、煉瓦ノ類ヲ以テ構造シ外壁ノ厚ハ鐵筋「コンクリート」ニ在リテハ五寸以上、其ノ他ニ在リテハ七寸以上ト爲シ煙道ハ土管ヲ挿入シ又ハ「セメント、モルタル」ヲ以テ塗ルコト

四　煙道ノ屈曲百二十度以内ナルトキハ其ノ屈曲部ニ掃除口ヲ設クルコト

第三十四條　三階建ノ木造又ハ木骨造建物ノ壁附煖爐ハ其ノ爐胸ヲ鐵筋「コンクリート」造又ハ鐵骨造ト爲スヘシ

第三十五條　煖爐、竈、風呂竈ノ類ノ煙突ノ屋上突出部ハ其ノ最短部ニ於テ二尺以上ト爲スヘシ但シ煉瓦造又ハ石造ノ部分ハ補強ヲ爲サヽル限リ三尺以上ト爲スヘカラス

第三十六條　煙突ノ直上部ニ軒アルトキハ其ノ軒ヨリ更ニ二尺以上突出セシムヘシ煙突上方軒先ト ノ水平距離三尺未滿ナルトキ亦同シ

第三十七條　金屬製煙突ニシテ小屋裏、床裏等露出セサル位置ニ在ル部分ハ金屬以外ノ不燃材料ヲ以テ被覆スヘシ

第三十八條　金屬製煙突ハ木材其ノ他ノ燃質材料ト五寸以上ノ間隔ヲ有スヘシ但シ厚三寸以上ヲ有スル金屬以外ノ不燃材料ヲ以テ被覆スルトキハ此ノ限ニ在ラス

第三十九條　地方長官ハ煙突ニシテ近接建築物ニ危害ヲ及ホス虞アリト認ムルトキハ前數條ノ外必要ナル措置ヲ命スルコトヲ得

第四十條　汽罐、營業用風呂竈其ノ他多量ノ燃料ヲ使用スル設備ニ附屬スル煙突ノ高ニ付テハ其ノ燃料ノ種類、量及土地ノ狀況ニ依リ地方長官之ヲ定ム

第四十一條　汽罐、風呂竈ノ類ノ焚場及灰捨場ニ對シ地方長官防火上必要ナル構造設備ヲ命スルコトヲ得

第四十二條　高六十五尺ヲ超過スル建築物ニハ適當ナル避雷設備ヲ爲スヘシ

第四十三條　高六十五尺軒高五十尺ヲ超過スル建築物ハ其ノ壁體、床、柱、屋根、階段等主要構造部ヲ耐火構造ト爲スヘシ

第二節　構造強度

第一　概則

第四十四條　「コンクリート」及「モルタル」ノ原料ト爲スヘキ「セメント」ハ農商務省告示「ポルトランド、セメント」試驗方法ノ規定ニ依リ合格シタルモノナルコトヲ要ス

第四十五條　建築物ノ基礎ニ使用スル木材ハ常水面下ニ在ルコトヲ要ス但シ規模小ナル建築物又ハ短期間使用ノ建築物ニ在リテハ此ノ限ニ在ラス

第四十六條　主要ナル構造用木材ニシテ石煉瓦、「コンクリート」、土ノ類ニ積込ム部分又ハ之ニ接スル部分ニハ防腐方法ヲ施スヘシ但シ木造建築物ノ眞壁ニ接スル木部ニ對シテハ此ノ限ニ在ラス

第四十七條　地方長官ハ建築物ノ構造強度ニ關シ土地ノ狀況ニ依リ本節ニ定ムルモノヽ外必要ナル規定ヲ設クルコトヲ得

第二　木構造及木骨構造

第四十八條　柱、梁其ノ他之ニ類スル構材ノ繼手及仕口ニシテ主要ナルモノハ「ボールト」締其ノ他適當ナル方法ニ依リ緊著スヘシ

第四十九條　建物ノ主要ナル柱ハ掘立ト爲スヘカラス但シ適當ナル防腐方法ヲ施シタルモノハ此ノ限ニ在ラス

第五十條　掘立ニ非サル柱ノ下部ニハ土臺又ハ脚固ヲ使用スヘシ但シ柱ヲ其ノ基礎ニ緊著シタルトキハ此ノ限ニ在ラス

第五十一條　石、煉瓦其ノ他ノ腰積ヲ有スル建物ハ之ヲ土臺敷構造ト爲シ土臺ハ腰積ニ緊結スヘシ

石、煉瓦、「コンクリート」ノ類ノ束ヲ以テ前項ノ腰積ニ代フルモノハ其ノ構造ニ付特ニ地方長官ノ許可ヲ受クヘシ

第五十二條　建物ノ土臺及敷桁ノ隅角ニハ蟻材ヲ使用スヘシ

第五十三條　柱ノ小徑ハ土臺、脚固、胴差、桁、其ノ他ノ主要横架材間ノ距離ニ對シ

三階建ノ第三階ニ階建ノ第二階又ハ平家建ニ在リテハ其ノ三十五分ノ一ヲ、三階建ノ第二階又ハ二階建ノ第一階ニ在リテハ其ノ三十分ノ一ヲ、二階建ノ第一階ニ在リテハ其ノ二十六分ノ一ヲ下ルヘカラス但シ庇ノ支柱其ノ他輕微ナル荷重ヲ承クルモノハ此ノ限ニ在ラス

木骨石造、木骨煉瓦造及土藏造ニ在リテハ前項ノ適用ニ關シ三十五分ノ一ヲ三十分ノ一、三十分ノ一ヲ二十五分ノ一、二十五分ノ一ヲ二十三分ノ一トス

第五十四條 柱ニシテ其ノ必要ナル斷面積ノ三分ノ一以上ヲ缺取ル場合ニハ其ノ部分ヲ補強スヘシ

第五十五條 三階建木造建物又ハ平家建ニ非サル木骨石造若ハ木骨煉瓦造建物ノ壁體ニハ適當ナル筋違ヲ使用スヘシ

第五十六條 木骨石造又ハ木骨煉瓦造ニ於ケル貼付ノ石、煉瓦類ノ厚ハ二階以上ニ於テハ之ヲ七寸五分以下ト爲シ適當ナル方法ヲ以テ軸部ニ緊結スヘシ

第五十七條 建築物ノ敷地ノ地盤堅牢ナルトキ又ハ規模小ナル建築物ニハ地方長官ノ許可ヲ受ケ第五十條及第五十二條ノ規定ヲ適用セサルコトヲ得

第三　石構造、煉瓦構造及コンクリート」構造

第五十八條 石、煉瓦其ノ他之ニ類スル材料ヲ以テ築造スル建築物ノ部分ハ「セメント」又ハ「モルタル」ヲ用ヒテ組積スヘシ但シ高九尺以下ノ壁其ノ他構造ノ輕微ナルモノハ此ノ限ニ在ラス

第五十九條 建物ノ壁體石造又ハ煉瓦造ナルトキ下階ノ壁厚ハ其ノ上階ノ壁厚ヨリ小ナルヘカラス

第六十條 石造又ハ煉瓦造壁體ノ壁厚ハ之ヲ一尺未滿ト爲スヘカラス

第六十一條 建物ノ壁體石造又ハ煉瓦造ニシテ高十五尺以上ノモノハ其ノ壁長三十六尺ヲ超過スヘカラス但シ地盤堅牢ナル場合又ハ適當ナル補強方法ヲ施シタルモノハ地方長官ノ許可ヲ受ケ之ヲ四十八尺迄ト爲スコトヲ得

壁厚特ニ大ナルモノハ地方長官ノ許可ヲ受ケ前項ノ規定ニ依ラサルコトヲ得

壁長ハ其ノ壁體ニ接著スル對鄰壁ノ接著部分ノ中心距離ヲ以テ之ヲ度ル

地方長官適當ト認ムル補強方法ヲ施シタル控壁ハ前項ノ適用ニ關シ之ヲ對鄰壁ト看做ス

壁高ハ其ノ壁體ノ接著スル地盤ヨリ之ヲ度ル

第六十二條 建物ノ壁體「コンクリート」造以外ノ石造ニシテ其ノ高十五尺未滿ノモノ、壁厚ハ其ノ高ノ十二分ノ一未滿ト爲スヘカラス

第六十三條 建物ノ外壁煉瓦造ニシテ其ノ高十五尺以上長二十四尺以下ノモノ、壁厚ハ左ノ規定ニ依ルヘシ

一　高二十五尺以下ノモノニ在リテハ一尺以上ト爲スコト

二　高二十五尺ヲ超過シ四十尺以下ノモノニ在リテハ第一階ハ一尺四寸以上第二階以上ハ一尺以上ト爲スコト

三　高四十尺ヲ超過シ五十尺以下ノモノニ在リテハ第一階及第二階ハ一尺四寸以上第三階以上ハ一尺以上ト爲スコト

長二十四尺ヲ超過シ三六尺以下ノモノノ壁厚ハ前項規定ノ厚ニ三寸ヲ加フヘシ長三十六尺ヲ超過シ四十八尺以下ノモノノ壁厚ハ第一項規定ノ厚ニ七寸ヲ加フヘシ

地階ノ壁厚ハ第一階ノ壁厚ニ三寸以上ヲ加フヘシ

第六十四條　煉瓦造間壁ノ厚ハ前條規定ノ厚ヨリ三寸ヲ減スルコトヲ得

第六十五條　建物ノ壁體煉瓦造ナルトキ或ル階ニ於ケル出入口、窓其ノ他ノ開口ノ幅ノ總和カ壁長ノ二分ノ一ヲ超過スルトキハ其ノ壁厚ハ前三條ノ規定ノ厚ニ三寸ヲ加フヘシ但シ其ノ壁體ニ幅三尺以上ノ柱形（控壁ヲ含ム以下同シ）ヲ有スル場合ニ於テ其柱形間及之ト對鄰壁トノ中心距離十五尺以下ナルトキハ此ノ限ニアラス

第六十六條　建物ノ壁體煉瓦造ニシテ左記各號ノ一ニ該當スル場合ニハ各階ノ壁厚ハ第六十三條及第六十四條ノ規定ノ厚ヨリ三寸ヲ減スルコトヲ得

一　其ノ階ノ床及其ノ階直上階ノ床又ハ屋根鐵筋「コンクリート」造ナルトキ

二　地方長官適當ト認ムル控壁、鐵骨又ハ鐵筋「コンクリート」ノ臥梁其ノ他ノ補強方法アルトキ

第六十七條　建物ノ壁體煉瓦造ナルトキ其ノ壁厚ハ第六十三條乃至第六十六條ノ規定ニ拘ラス其ノ階高ノ十五分ノ一未滿ト爲スヘカラス

第六十八條　建物ノ壁體煉瓦造ナルトキ其ノ階高ノ四分ノ三以上ノ高ヲ通シテ壁體ニ竪壁溝ヲ設クル場合ニハ其ノ壁溝部ノ壁厚ハ第六十條、第六十三條乃至第六十七條ノ規定ノ厚ノ三分ノ二未滿ト爲スヘカラス

横壁溝ハ深三寸長九尺ヲ超過スヘカラス

第六十九條　高十五尺以上ノ煉瓦壁體ニ於ケル出入口及窓相互間ノ直上垂直距離及之ト壁頂間ノ垂直距離ハ二尺以上ト爲スヘシ但シ鐵又ハ鐵筋「コンクリート」ノ臥梁ヲ以テ適當ナル補強ヲ爲ストキハ此ノ限ニ在ラス

第七十條　煉瓦造二重壁ニ於テハ其ノ一方ノ壁ハ第五十九條乃至第六十一條及第六十三條乃至第六十九條ノ規定ニ依ルヘシ

第七十一條　建物ノ壁體「コンクリート」造ナルトキハ第六十三條乃至第七十條ノ適用ニ關シ之ヲ煉瓦造ト看做ス

第七十二條　建物ノ體壁「コンクリート」造以外ノ石造ナルトキ其ノ厚ハ第六十三條乃至第六十五條ノ厚ニ其ノ十分ノ二ヲ加フヘシ

第六十六條乃至第七十條ノ規定ハ之ヲ前項ノ壁體ニ準用ス

第七十三條　貼石、貼瓦ノ類ハ之ヲ壁厚ニ算入セス

第七十四條　鐵骨造又ハ鐵筋「コンクリート」造ニ在リテハ、煉瓦「コンクリート」等ノ帳壁ニハ第五十九條、第六十條、第六十二條乃至第七十二條ノ規定ヲ適用セス

第七十五條　高十二尺未滿ノ間壁其ノ他構造上輕微ナル壁體ニ對シテハ第六十條乃至第七十二條ノ規定ヲ適用セス

第七十六條　石造又ハ煉瓦造ノ壙壁ハ特殊ノ補強方法ヲ施シタル場合ノ外左ノ規定ニ依ルヘシ

一　煉瓦造又ハ「コンクリート」造ニ在リテハ其ノ厚ヲ其ノ部分ヨリ壁頂迄ノ垂直距離ノ十五分ノ一以上ト爲スコト

二　「コンクリート」造以外ノ石造ニ在リテハ其ノ厚ヲ其ノ部分ヨリ壁頂迄ノ垂直距離ノ十二分ノ一以上ト爲スコト

三　長二間未滿毎ニ適當ナル控壁ヲ設クルコト但シ其ノ壁厚前二號ノ規定ノ最小限ノ一倍半以上ナルトキハ此ノ限ニ在ラス

第七十七條　同一建築物ノ壁體二種以上ノ構造ヨリ成ルトキハ其ノ壁長及壁厚ニ付

テハ地方長官之ヲ定ム

第七十八條　切妻壁體ハ之ニ接スル構材ニ緊結スヘシ

地盤面上五十尺以上ニ在ル切妻壁體ノ部分ニ對シテハ適當ナル補強ヲ爲スヘシ

第七十九條　張間五尺以上ノ開口上ニ架スル石造又ハ煉瓦造ノ迫持ハ其ノ迫高ヲ張間ノ十分ノ一以上ト爲スヘシ但シ適當ナル補強ヲ爲シタルモノハ此ノ限ニ在ラス

第八十條　壁體ノ隅角、蛇腹、窓、出入口脇其ノ他之ニ類スル部分ニ使用スル石、人造石ノ類ハ適當ナル方法ヲ以テ之ヲ其ノ接スル壁體ノ部分ニ緊結スヘシ

第八十一條　石造又ハ煉瓦造ノ桔出窓、桔出縁等ハ壁面ヨリ三尺以上突出セシムヘカラス但シ鐵骨又ハ鐵筋「コンクリート」ヲ以テ適當ナル補強ヲ爲シタルモノハ此ノ限ニ在ラス

第四　鐵構造及鐵骨構造

第八十二條　建物ノ構造ニ使用スル鋼材ノ品質ハ應張強度一平方糎ニ付千六百瓩以上、伸度試驗片小徑ノ八倍以上ニ付百分ノ二十以上ノモノナルコトヲ要ス

第八十三條　建物ノ構造ニ使用スル鋼又ハ鍊鐵ノ主要ナル構材ノ接合ニハ已ムヲ得サル場合ノ外「リベット」ヲ使用スヘシ

接合用「リベット」又ハ「ボールト」ノ中心距離ハ其ノ直徑ノ二倍半未滿ト、其ノ中心ト材端トノ距離ハ其ノ直徑ノ一倍半未滿トナスヘカラス

第八十四條　建物ノ構造ニ使用スル鐵柱ハ其ノ斷面ノ最小二次率半徑ヲ其ノ主要ナル支點間距離ニ對シ鋼又ハ鍊鐵ニアリテハ百五十分ノ一以上、鑄鐵ニアリテハ七十五分ノ一以上トナスヘシ

柱以外ノ應壓鋼材又ハ應壓鍊鐵材ニアリテハ前項ノ百五十分ノ一ヲ二百分ノ一トス

第八十五條　鋼柱又ハ鍊鐵柱ノ接合ニハ其ノ小ナル柱ト同等以上ノ强サヲ有スル添鈑ヲ用ヰ柱ノ全應力ヲ傳フルニ足ルヘキ數ノ「リベット」ヲ使用スヘシ

第八十六條　鐵骨造建物ニ於ケル主要ナル柱ハ之ヲ基礎ニ緊結スヘシ

第八十七條　鐵骨造建物ノ帳壁ハ之ヲ鐵骨ニ連結スヘシ

第五　鐵筋「コンクリート」構造

第八十八條　鐵筋「コンクリート」構造ニ使用スル鐵骨ノ品質ハ第八十二條ノ規定ニ依ルヘシ

一　砂ハ泥土、鹽分ヲ含マサルモノナルコト

二　砂利又ハ碎石ハ硬質ニシテ二糎二分ノ一目篩ヲ通過シ且鐵筋相互間及鐵筋ト假構トノ間ヲ自由ニ通過スルモノナルコト

三　煉瓦屑、石炭爐ノ類ハ之ヲ使用セサルコト

四　「コンクリート」ノ調合割合ハ「セメント」ノ容積一ニ對シ砂ト砂利又ハ碎石トノ容積ノ和六ヲ超過セサルコト但シ「セメント」ハ千四百瓩ヲ以テ一立方米突トス

鐵筋「コンクリート」構造ニ使用スル鐵骨ノ品質ハ第八十二條ノ規定ニ依ルヘシ

第八十九條　鐵筋「コンクリート」構造ニ於テハ鐵筋ノ兩端ヲ他ノ構造部ニ緊結スルカ又ハ之ヲ曲ケテ適當ニ「コンクリート」中ニ碇着スヘシ

第九十條　鐵筋「コンクリート」ノ梁、版等ニ生スル應剪力度「コンクリート」ノ許容應剪力度ヲ超過スルトキハ其ノ部分ニ左記ノ規定ニ依リ繫筋ヲ配置スヘシ

一　繋筋ハ應剪力ノ分布ニ從ヒ適當ニ之ヲ配置シ其間隔ハ梁、版等ノ厚ノ三分ノ二ヲ超過セサルコト

二　繋筋ハ應張鐵筋下端ヨリ應壓力中心迄達スルコト

主筋ヲ適當ニ曲ケタルモノハ其ノ部分ヲ繋筋ト看做ス

第九十一條　鐵筋「コンクリート」柱ノ構造ハ左ノ規定ニヨルヘシ

一　主筋ハ四本以上タルコト

二　繋筋ノ中心距離ハ一尺以下トシ且主筋直徑ノ十五倍ヲ超過セサルコト

三　柱ノ小徑ハ其ノ主要支點間距離ノ二十分ノ一以上ナルコト

第九十二條　鐵筋「コンクリート」構造ニ於テ主筋ニ對スル「コンクリート」ノ被覆厚ハ版ニアリテハ二糎未滿ト、梁及柱ニ在リテハ三糎未滿ト。基礎ニアリテハ五糎未滿トナスヘカラス

第九十三條　鐵筋「コンクリート」ノ床、屋根其ノ他ノ横架材ノ上ニ假構ヲ設クルトキハ其ノ假構ヲ除去スルニ先チ其ノ下階ノ主要假構ヲ除去スヘカラス但シ「コンクリート」施工後二月ヲ經過セルモノニアリテハ此ノ限ニ在ラス

第九十四條　高十二尺未滿ノ墻壁其ノ他建築上輕微ナルモノニ在リテハ地方長官ノ認可ヲ受ケ第八十八條乃至第九十二條ノ規定ニ依ラサルコトヲ得

第六　獨立煙突

第九十五條　高五十尺ヲ超過スル自立煙突ニシテ鐵造又ハ鐵筋「コンクリート」造ニアラサルモノハ鐵材ヲ以テ之ニ適當ナル補強ヲナスヘシ

高百尺以上ノ煙突ハ之ヲ鐵造又ハ鐵筋「コンクリート」造トナスヘシ

第九十六條　鐵造煙突ニシテ高五十尺ヲ超過スルモノハ鐵板ノ厚ヲ四粍以上トナスヘシ

第九十七條　煙突ノ構造上必要ナル支線ト地盤トノ接着ハ鐵筋「コンクリート」造其他腐朽ノ虞ナキ控杭ニ緊着スヘシ但シ高七十五尺未滿ノ煙突ノ控杭ハ適當ナル防腐方法ヲ施シタル木材トナスコトヲ得

第九十八條　土管煙突ハ高三十尺ヲ超過スヘカラス但シ堅固ナル鐵製支枠ヲ有スルモノハ地方長官ノ許可ヲ受ケ高五十尺迄トナスコトヲ得

第九十九條　土管煙突ハ其ノ接合部ニ「モルタル」ヲ用ヒ支枠ヲ緊結スヘシ

第百條　前四條ノ適用ニ關シテハ煙突ノ高ハ之ニ接着スル地盤面ヨリ之ヲ度ル

第七　強度計算

第百一條　強度計算ニ適用スル各種材料ノ其重要ノ最小限左ノ如シ

材料	重量（瓩）
煉瓦積	一立方米ニ付　一九〇〇、〇
花崗岩及安山岩	一立方米ニ付　二五〇〇、〇
砂利又ハ碎石ヲ凝元体トセル「コンクリート」及鐵筋「コンクリート」	一立方米ニ付　二三〇〇、〇
松	一立方米ニ付　五七〇、〇
杉、檜、樅、「オレンゴンパイン」北海道松ノ類	一立方米ニ付　四六〇、〇
鋼	一百立方糎ニ付　〇、七八五
瓦　葺（葺土ヲ除ク）	一平方米ニ付　六〇、〇
葺土、壁土、及漆喰	一立方米ニ付　一六〇〇、〇

第百二條 強度計算ニ於テ建築物ノ各部分ニ生スヘキ應力度ハ各種材料ニ付左ノ限度ヲ超過スヘカラス

材料	應壓力度（一平方糎ニ付瓩）	應張力度（一平方糎ニ付瓩）	應剪力度（一平方糎ニ付瓩）	應曲力度（一平方糎ニ付瓩）
欅、栗	九〇、〇	九、〇	九、〇	九〇、〇
松	七五、〇	七五、〇	七、五	七五、〇
檜、椹、「オンゴンパイン」	六五、〇	六五、〇	六、五	七五、〇
杉、北海道松ノ類	五〇、〇	五〇、〇	五、〇	五〇、〇
花崗岩	一一〇、〇			一五〇、〇
硬質安山岩	八〇、〇			九〇、〇
煉瓦積	三〇、〇			
「コンコリート」「セメント」一 砂二 砂利又ハ碎石四	四五、〇	四、五	鐵筋「コンクリート」構造ニ於テ主筋ヲ橫斷スル面ニ對シテハ九、〇 四、五	四、五
「コンクリート」「セメント」一 砂三 砂利又ハ碎石六	三〇、〇	三、〇	三、〇	三、〇
軟鋼	一一〇、〇	一一〇、〇	七五、〇	一一〇、〇
錬鐵	八五、〇	八五、〇	五六、〇	八五、〇
鑄鐵	八五、〇	一〇〇、〇	一〇〇、〇	一〇〇、〇

前表ニ於ケル「コンクリート」ノ調合割合ハ容積ヲ以テシ「セメント」ハ千四百瓩ヲ以テ一立方米トス

品質特ニ劣等ナリト認ムルモノニ對シテハ地方長官ハ第一項ノ限度ヲ低下セシムルコトヲ得

第百三條 鐵筋「コンクリート」構造ノ強度計算ニ於テハ鐵ト「コンクリート」トノ彈比ヲ十五トナスヘシ

第百四條 鐵筋「コンクリート」構造ノ強度計算ニ於ケル應滑力度ハ一平方糎ニツキ七瓩ヲ超過スヘカラス但シ異形鐵筋ヲ使用スル場合ニアリテハ其ノ形狀ニヨリ地方長官ノ許可ヲ受ケ之ヲ十瓩迄トナスコトヲ得

第百五條 強度計算ニ適用スル各種床動荷重ノ最小限左ノ如シ

床ノ種類	動荷量（一平方米ニ付瓩）
住家	二五〇
事務室、病院ノ類	三七〇
學校	四二〇
集會所、劇場、客席ノ類	五〇〇
商品陳列室、陳列館ノ類	五五〇
倉庫、書庫、作業場等ニ付テハ其ノ實況ニ	

應スル適當ナル動荷重ニ依ルヘシ

本條ノ動荷重ハ其ノ實況ニ應シ小梁ニ對シテハ其ノ十分ノ一以内ヲ、大梁ニ對シテハ其ノ十分ノ二以内ヲ、柱ニ對シテハ其ノ十分ノ三以内ヲ減スルコトヲ得但シ倉庫、書庫、集會室、劇場、棧敷、陳列室等ニ對シテハ本項動荷重ノ輕減ヲ爲スコトヲ得ス

第百六條 杭打基礎ニ於杭ニ對スル荷量ハ墜錘ヲ使用スル場合ニ在リテハ左式ニ依テ算定セルモノヲ超過スヘカラス

$$P=\frac{W\ H}{5D+0.1}$$

P 荷重

W 錘ノ重量

H 錘ノ落高（米）

D 杭ノ最終沈下（米）

「コンクリート」杭ニシテ其ノ完全ニ凝結セサルモノニ對シテハ前項ノ算式ヲ適用セス前項ノ場合及汽錘ヲ使用シタル場合ニ在リテハ地方長官ハ荷重試驗ノ施行ヲ命スルコトヲ得

第百七條 應壓鐵材ニ對スル荷重ハ左式ニ於テ算定セルモノヲ超過スヘカラス

$$P=A f_c\left(1-c\frac{L}{r}\right)$$

P 荷重

A 斷面積

f_c 第百二條ノ鐵材ニ對スル應壓力度

L 主要ナル支點間ノ距離

r 斷面ノ最小二次率半徑但シ鐵柱ニシテ其周圍ノ構造ニ依リ撓ミノ方向ニ制限アルモノハ其ノ斷面ノ適當ナル軸ニ對スル二次率半徑トナスコトヲ得

定數

鋼及鍊鐵ニアリテハ〇、〇〇三トシ其兩支端回轉自由ナルトキハ〇、〇〇四、鑄鐵ニアリテハ〇、〇〇五トス

第百八條 應壓木材ニ對スル荷重ハ左式ニ依リテ算定セルモノヲ超過スヘカラス

$$P=A f_c\left(1-0.02\frac{L}{d}\right)$$

P 荷重

A 斷面積

f_c 第百二條規定ノ木材ニ對スル應壓力度

L 主要ナル支點間ノ距離

d 斷面ノ最小徑

第百九條 應壓鐵筋「コンクリート」材ニ對スル荷重ハ左式ニ依リ算定セルモノヲ超過スヘカラス

$$P=f_c(A_c+15A_s)$$

P 荷重

第百二條ノ「コンクリート」ニ對スル應壓力度

A 「コンクリート」ノ有効斷面積

S 主筋ノ斷面積

前項有効斷面積ハ其ノ主筋ノ外側線内ノ面積トス

適當ナル卷筋ヲ有スル應壓「コンクリート」材ニ在リテハ第一項ノ「コンクリート」ニ對スル應壓力度ヲ一平方糎ニツキ五十瓩迄增加スルコトヲ得但シ此ノ場合ニ於ケル卷筋ノ中心距離ハ八糎ヲ超過スヘカラス

應壓鐵筋「コンクリート」材ニシテ其ノ主要ナル支點間ノ距離其ノ最小徑ノ十五倍ヲ超過スルニ在リテハ別ニ適當ナル算式ニ依リ之ヲ算定スヘシ

第百十條 應曲材ニ對スル曲能率ハ左式ニ依リ算定セルモノヲ超過スヘカラス

$$M=f_b S$$

M 曲能率

f 第百二條ノ應曲力度

S 斷面率

第百十一條 鐵筋「コンクリート」ノ單筋矩形梁又ハ版內ニ中軸ヲ有スル單筋丁梁ニ對スル曲能率ハ各式ニ依リ算定セルモノヲ超過スヘカラス

$$M=\frac{n_1(3-n)}{6}f_c bd^2$$

$$M=\frac{3-n_1}{3\ m}f_t+bd^2$$

M 曲能率

n 中軸比（梁ノ應壓端ヨリ中軸迄ノ距離ト梁ノ有動丈トノ比）

f 第百二條ノ「コンクリート」ニ對スル應張力度

f 第百二條ノ鐵筋ニ對スル應張力度

m 對筋比

d 梁ノ幅

b 梁ノ有効丈

前項中軸比ハ左式ニ依ル

$$n_1=\frac{15}{m}\left(\sqrt{1+\frac{2m}{15}}-1\right)$$

第百十二條 應壓力ト曲能率トヲ併有スル構材ノ合成應力度ハ左式ニ依リ算定セルモノヲ下ルヘカラス

$$f=\frac{M}{S}+\frac{P}{A}\times\frac{1}{1-\frac{1}{C_r}}$$

f_c 合成應壓力度

M 曲能率

S 應壓側ニ對スル斷面率

應壓力

A 斷面積

l 主要ナル支點間ノ距離

r 曲能率ニ依ル斷面ノ中軸ニ對スル二次率半徑但シ木材ニ在リテハ曲能率ニ依ル斷面ノ中軸ニ直角ナル徑

C 第百七條ニ定數但シ木材ニ在リテハ之ヲ〇・〇二トス

前項ノ合成應壓力度ハ第百二條ノ應壓力度ヲ超過スヘカラス

第百十三條 鐵筋「コンクリート」構造ニ於ケル梁又ハ版ノ張間ハ其ノ支承物間ノ中心距離ヲ以テ之ヲ度ルモノトス但シ支承物間ノ內法距離ニ梁ノ丈又ハ版ノ厚ヲ加ヘタルモノヲ以テ之ニ代フルコトヲ得

梁又ハ版ノ支端ニ持送アル場合ニ於ケル張間ハ持送ノ厚カ梁ノ丈又ハ版ノ厚ノ一三倍ニ達スル部分ヨリ之ヲ起算ス

第百十四條 鐵筋「コンクリート」構造ニ於テ梁ト版トヲ適當ニ連結シタル場合ニ在リテハ之ヲ丁梁ト看做スコトヲ得但シ此ノ場合ニ於ケル丁梁ハ其ノ張間ノ四分ノ一以內、版ノ厚ノ十二倍以內ノ幅ヲ有スルモノトシテ之ヲ算定スヘシ

第百十五條 鐵筋「コンクリート」構造ニ於テ縱橫ニ鐵筋ヲ有スル長方形版四邊ヲ通シテ支承物ヲ有スル場合ニ於テハ左式ニ依リ算定シタルモノヲ下ラサル範圍內ニ於テ其ノ荷重ヲ兩張間ニ分賦スル事ヲ得

$$W_1=\frac{l^4}{l^4+b_4^4}W$$

$$W_1=\frac{L^4}{L^4+b_4^4}W$$

W 等布荷重

l 一方ノ張間

b_1 lニ直角ナル張間

W_1ヲ張間トスルモノニ分賦スル等

布荷重
W5bヲ張間トスルモノニ分賦スル等布荷重

第百十六條 鐵筋「コンクリート」構造ニ於テ三箇以上ノ等張間ヲ有スル連梁又ハ連版等布荷重又ハ一樣ナル對稱集中荷重ヲ受クル場合ノ強度計算ニ適用スヘキ正負曲能率ハ左ノ規定ニ依ルモノヲ下ルヘカラス

一　兩端以外ノ張間ニ於ケル正曲能率ハ各張間ニ付單梁ト假定シテ得ヘキ曲能率圖ニ於テ最大曲能率ノ値其ノ位置ニ於テ其ノ三分ノ二トナル樣基線ヲ平行ニ移動シタル場合ニ付テ之ヲ度ルコト

二　兩端以外ノ張間ニ於ケル負曲能率ハ各張間ニ付單梁ト假定シテ得ヘキ曲能率圖ニ於テ其ノ支點ニ於ケル負曲能率カ單梁トシテノ最大曲能率ノ三分ノ二ニ達スル迄基線ヲ平行ニ移動シタル場合ニ付テ之ヲ度ルコト

三　最終支點單ニ支持セラレタル場合ニ在リテハ終端張間ニ於ケル最大正曲能率ハ第一號ノ規定ニ依リテ定メタル最大正曲能率ニ其ノ十分ノ二ヲ加ヘ最終支點ノ曲能率ヲ零トシ次ノ支點ニ於テハ第二號ノ規定ニ依リテ定メタル負曲能率ニ其ノ十分ノ五ヲ加フルコト

荷重、張間又ハ支承ノ狀態前項以外ノ場合ニ於テハ前項ノ主旨ニ基キ適當ニ其ノ正負曲能率等ヲ定ムヘシ

第百十七條 構造ノ狀況ニ依リ大ナル曲能率ヲ生スヘキ柱ハ其ノ曲能率ニ依ル壓力度ヲ加算シテ其ノ大サヲ定ムヘシ

第四章　防火地區

第百十八條 防火地區ハ甲種防火地區及乙種防火地區ノ二種トス

第百十九條 甲種防火地區內ニ在ル建物ハ其ノ外壁ヲ耐火構造ト爲スヘシ

第百二十條 甲種防火地區內ニ在ル建物ノ軒、軒蛇腹、扉窓、裝飾塔ノ類ハ不燃材料ヲ以テ構成スヘシ

第百二十一條 甲種防火地區內ニ在ル建物ノ窓及出入口ニシテ左ノ各號ノ一ニ該當スルトキハ甲種防火戸ヲ設クヘシ但シ鐵骨網入硝子造ニシテ其ノ面積三十平方尺以內ノ窓又ハ屋根、床、柱及階段耐火構造ナル建物ノ窓ニ在リテハ此ノ限ニ在ラス

一　其ノ面スル道路ノ對側境界線ヨリ六間未滿ノ距離ニ在ルトキ但シ建築線道路境界線ト一致セサル場合ニ在リテハ建築線ヲ以テ道路境界線ト看做ス

二　隣地境界線又ハ隣接建物ニ面シ其ノ水平距離六、間未滿ナルトキ

三　隣地境界線又ハ隣接建物ヨリノ水平距離六間未滿ノ位置ニ在ルトキ但シ窓ノ枠及組子鐵造又ハ金屬板ヲ以テ被覆セルモノハ此ノ限ニ在ラス

公園、廣場、河、海等ノ空地ニ面スル窓ニ付テハ前項ノ規定ノ適用ニ於テ其ノ空地ヲ道路ト看做ス

第百二十二條 甲種防火地區內ニ在ル建物ノ屋根ハ耐火構造ト爲スヘシ但シ厚一寸五分以上ノ不燃材料ヲ以テ構成シタル野地ヲ有スルトキハ此ノ限ニ在ラス

第百二十三條 甲種防火地區內ニ在ル建物ニシテ左ノ各號ノ一ニ該當スルモノハ其ノ床柱及階段ヲ耐火構造ト爲スヘシ

一　建築面積二百坪以上ニシテ階數二以上ノモノ

二　建築面積百坪以上ニシテ階數三以上ノモノ

三　階數四以上ノモノ

第百二十四條　甲種防火地區內ニ在ル建物ニシテ道路ニ面セサルモノハ其ノ高十八尺ヲ、軒高十二尺ヲ、建築面積十二坪ヲ超過セサル場合ニ限リ乙種防火地區內ニ在ル建物ニ關スル規定ニ依ルコトヲ得但シ地方長官建物ノ用途ニ依リ火災豫防上危險ノ虞アリト認ムルモノハ此ノ限ニ在ラス

第百二十五條　甲種防火地區內ニ在ル壁ハ不燃材料ヲ以テ構成スヘシ

第百二十六條　乙種防火地區內ニ在ル建物ハ其ノ外壁ヲ耐火構造又ハ準耐火構造ト爲スヘシ

第百二十七條　前條ノ準耐火構造トハ左ノ各號ノ一ニ該當スル構造ヲ謂フ

一　鐵骨造ニシテ外部ヲ生子板張ト爲シタルモノ

二　鐵骨造又ハ木造ニシテ外部ニ左ノ各號ノ一ニ該當スル被覆ヲ爲シタルモノ

イ　外面ニ石、煉瓦又ハ人造石ノ類ヲ用ヰ其ノ厚三寸以上ノモノ

ロ　瓦貼ノ上ニ「セメント、モルタル」塗トシ厚合計一寸二分以上ノ「セメント、モルタル」塗又ハ「コンクリート」塗ニ「セメント、モルタル」塗ノ上ニ化粧煉瓦貼トシテ厚合計一寸二分以上ノモノ

ホ　木骨土藏造ニシテ塗土、漆喰等ノ厚合計三寸以上ノモノ

三　其ノ他地方長官之ニ準スト認メタルモノ

第百二十八條　乙種防火地區內ニ在ル建物ノ軒、軒蛇腹、屋窓、裝飾塔ノ類ハ不燃材料ヲ以テ構成シ又ハ被覆スヘシ

第百二十九條　乙種防火地區內ニ在ル建物ノ窓及出入口ニシテ左ノ各號ノ一ニ該當スルトキハ甲種防火戸又ハ乙種防火戸ヲ設クヘシ但シ鐵骨網入硝子造ニシテ其ノ面積四十平方尺以內ノ窓又ハ其ノ屋根、床、柱及階段耐火構造ナル建物ノ窓ニ在リテハ此ノ限ニ在ラス

一　其ノ面スル道路ノ對側境界線ヨリ三間未滿ノ距離ニ在ルトキ但シ建築線道路境界線ト一致セサル場合ニ在テハ建築線ヲ以テ道路境界線ト看做ス

二　隣地境界線又ハ隣接建物ヨリノ水平距離三間未滿ノ位置ニ在ルトキ但シ窓ノ枠及組子鐵造又ハ金屬板ヲ以テ被覆セルモノハ此ノ限ニ在ラス

公園、廣場、河、海等ノ空地ニ面スル窓ニ付テハ前項ノ適用ニ於テ其ノ空地ヲ道路ト看做ス

第百三十條　乙種防火地區內ニ在ル建物ノ屋根ヲ金屬板ヲ以テ被覆スルトキハ其ノ野地ヲ厚一寸以上ノ不燃材料ヲ以テ構成スヘシ

第百三十一條　防火地區內ニ在ル建物ノ界壁ハ防火壁ト爲スヘシ

第百三十二條　建物防火地區ノ境界線外ニ瓦ル場合ニ於テハ其ノ全部ニ對シ防火地區內ノ建物ニ關スル規定ヲ適用ス但シ其ノ建物ノ部分ヲ成ス防火壁ニシテ防火地區外ニ在ルトキハ其ノ防火壁外ノ部分ニ付テハ此ノ限ニ在ラス

第百三十三條　建物甲種防火地區及乙種防火地區ニ瓦ル場合ニ在リテハ其ノ全部ニ對シ甲種防火地區內ノ建物ニ關スル規定ヲ適用ス但シ其ノ建物ノ部分ヲ成ス防火壁ニシテ甲種防火地區外ニ在ルトキハ其

ノ防火壁外ノ部分ニ付テハ此ノ限ニ在ラス

第百三十四條 前三條ノ防火壁ニ付テハ第三十條ノ規定ヲ準用ス

第百三十五條 地方長官ハ防火地區内ニ在ル建築物ニ關シ本令ノ規定ノ外火災豫防上必要ナル命令ヲ發シ又ハ處分ヲ爲スコトヲ得

第五章　美觀地區

第百三十六條 地方長官ハ美觀地區内ニ在ル建築物ニシテ環境ノ風致ヲ害シ又ハ街衢ノ體裁ヲ損スルト認ムルトキハ其ノ除却改修其ノ他ノ必要ナル措置ヲ命スルコトヲ得

第百三十七條 地方長官ハ美觀地區内ニ建築スル建築物ノ意匠ニ關スル設計ニシテ環境ノ風致ヲ害シ又ハ街衢ノ體裁ヲ損スト認ムルトキハ其ノ設計ノ變更ヲ命スルコトヲ得

第百三十八條 地方長官美觀上必要アリト認ムルトキハ美觀地區内ニ一定ノ區域ヲ指定シ其ノ區域内ノ建築物ノ高、軒高又ハ外壁ノ材料及主色ヲ指定スルコトヲ得

第百三十九條 地方長官前三條ノ措置又ハ指定ニシテ重要ナリト認ムル事項ニ關シテハ主務大臣ノ認可ヲ受クヘシ

第百四十條 美觀地區内ニ在ル建築物ノ外部汚損セルトキハ速ニ之ヲ修理スヘシ

第百四十一條 美觀地區内ニ在ル建築物ノ排水管、排氣管、煖房煙管、瓦斯管及煙突ノ類ハ特ニ地方長官ノ許可ヲ受ケタル場合ヲ除クノ外之ヲ道路、廣場又ハ公園ニ面スル壁面ニ露出セシムルコトヲ得ス

第百四十二條 美觀地區内ニ在ル建築敷地ニシテ未タ建築物ナキモノ又ハ建築工事著手中ノモノハ板塀ノ類ヲ以テ體裁ヨク之ヲ圍繞スヘシ但シ適當ナル整理ヲ爲シ特ニ地方長官ノ許可ヲ受ケタルモノハ此ノ限ニ在ラス

第六章　工事執行

第百四十三條 左ノ各號ノ一ニ該當スル建築物ノ新築、增築、改築、移轉、大修繕又ハ大變更ヲ爲サムトスルトキハ地方長官ノ認可ヲ受クヘシ

一　市街地建築物法第十四條ノ建築物

二　防火地區及美觀地區内ノ建築物

三　其ノ他地方長官ノ指定スル建築物

建築物ノ用途ヲ變更シテ前項第一號又ハ第三號ニ充テントスルモノ亦同シ

第百四十四條 前條ニ該當セサル建築物ノ新築、增築、改築、移轉、大修繕又ハ大變更ヲ爲サムトスルトキハ地方長官ニ届出ツヘシ

地方長官ハ命令ノ規定ニ依リ輕微ナルモノニ付前項ノ届出ヲ爲サシメルコトヲ得

第百四十五條 地方長官第百四十三條ノ認可申請ニ付支障ナシト認ムルトキハ建築認可證ヲ交付スヘシ

第百四十六條 第百四十三條及第百四十四條ノ建築工事竣功シタルトキ及地方長官ノ特ニ指定シタル工程ニ達シタルトキハ地方長官ニ届出ツヘシ

第百四十七條 地方長官第百四十三條ノ建築物竣工ノ届出ヲ受ケ支障ナシト認メタルトキハ遲滯ナク建築物使用認可證ヲ交付スヘシ但シ申請者ノ請求ニ依リ建築物ノ竣功セル部分ニ對シ使用認可證ヲ交付スルコトヲ得

前項ノ使用認可證ヲ受ケタル後ニ非サレハ建築物ヲ使用スルコトヲ得ス

第百四十八條 地方長官ハ吏員ヲ派シ建築物及建築工事ヲ臨檢セシムルコトヲ得

前項ノ場合ニ於テ臨檢者ハ其ノ證票ヲ携帶スヘシ

第一項ノ場合ニ於テ建築主、建築工事請負人、建築工事管理者又ハ建築物ノ所有者若ハ占有者檢査ニ必要ナル準備ヲ命セラレタルトキハ之ヲ拒ムコトヲ得ス

前項準備ノ費用ハ建築主又ハ建築所有者ノ負擔トス

第百四十九條 地方長官ハ建築工事ノ認可申請、届出又ハ其變更ノ手續其ノ他建築工事ノ取締ニ關シ本則ニ定ムルモノノ外必要ナル規定ヲ設クルコトヲ得

附　則

第百五十條 本則中地方長官トアルハ東京府ニ於テハ警視總監トス

第百五十一條 本則ハ市街地建築物法施行ノ日ヨリ之ヲ施行ス